武蔵国分寺跡発掘調査概報

XI

ー北方地区・佐藤国分寺共同住宅増築工事に伴う調査ー

1987年3月

国分寺市遺跡調査会

序

国分寺市遺跡調査会は、旧武蔵国分寺遺跡調査会と旧恋ケ窪遺跡調査会を発展的に解消し、合同再編成して、昭和61年4月に発足いたしました。旧両調査会の掲げた所期の目的がほぼ達成されたのを受け、過去12年間の足跡を踏り返り、現況における問題点を摘出し、今後の課題と展望の上に立って、武蔵国分寺跡をはじめとする市内遺跡の調査・研究、保存・整備、活用事業を推進する第一歩として、新たな体制に切り替えた次第であります。

武蔵国分寺跡におきましても、僧寺と尼寺の寺地区画に数度の変遷があることや、本跡が二寺を中心として東西2㎞、南北1.5㎞の範囲に広がる掘立柱建物跡・竪穴住居跡群より成り立ち、都市的様相を呈していたことなどが明らかになってまいりました。これらにつきましては、昨年刊行されました『国分寺市史　上巻』の中で詳らかにする機会が与えられました。とはいえ、まだまだ断片的、表面的把握にとどまっており、今後は全体像の解明へ向け総力を傾注していく所存であります。

さて、調査会事業の大きな柱として、各種土木工事等開発に伴う事前の発掘調査があります。年毎に増加する傾向にありまして、限られた体制の中での対応は困難を極めており、調査団のご労苦はいかばかりかと察せられます。わけても、出土品整理・報告書刊行作業の遅延を招来し、未整理・未報告資料が山積している現況であります。これら掘り出されたまま埋もれている資料の公表は急務といえましょう。

幸い今次調査におきましては、長期に亘る発掘・整理におきまして、佐藤威彦氏をはじめとして多くの方々より多大なるご協力・ご指導・ご助言を賜り、全ての作業を滞りなく終え、ここに報告書を上梓することができました。厚く御礼申し上げます。

本調査による成果は本文のとおりでありますが、先に刊行しました『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅶ－佐藤国分寺共同住宅建設に伴う調査』ともども広く活用されますことを願ってやみません。本書が国分寺市域の歴史の解明に少しでも供することができますれば幸いです。ご叱正を乞う次第であります。

昭和62年3月

調査会長（国分寺市文化財保護審議会委員長）

星　野　亮　勝

例　　言

1. 本書は、東京都国分寺市西元町に所在する武蔵国分寺跡に於いて昭和48年以来実施されている調査の内、第201次調査：佐藤国分寺共同住宅増築工事に伴う調査の成果をまとめたものである。
2. 調査地は、国分寺市西元町一丁目2448～1･10に所在し、全面積1153.425㎡、所有者は[redacted]氏外3名である。
3. 発掘より報告書作成に至る調査に係る費用は[redacted]氏が負担した。昭和59年6月2日付にて締結した委託契約に基き、武蔵国分寺遺跡調査会が事業を実施し、昭和61年4月1日以降は国分寺市遺跡調査会に継承して事業を完遂した。
4. 現地における調査は、昭和59年7月3日より昭和60年5月22日まで行い、報告書作成作業は昭和62年3月31日まで国分寺市遺跡調査会事務所（国分寺市西元町1－15－15）で行った。
5. 現地における調査より報告書作成に至る作業は、滝口宏団長の指導・助言のもと調査員福田信夫が担当し、河内公夫（調査員補）がこれをたすけた。
6. 発掘調査・報告書作成の過程で次の方々の協力・参加を得た。厚く御礼申し上げます。（順不同、敬称略）。

星野亮勝・吉田格・佐藤敏也・有吉重蔵・上村昌男・広瀬昭弘

株式会社巴組鐵工所（穴倉義昭・細田清・大嶋正敏）

発掘（全員、※は整理共）

※岩崎洋・稲井亮・久保田悦司・河合正樹・川島幸雄・南純一・関口恒男・宮井義徳・松村秀行・江幡尚人・飯田正人・高橋勝範・奥村武久・山下裕史・向後英治・柴田栄・佐久間章貴・藤本進・佐藤則博・中村光政・吉岡史人・小川恭範・中山雅仁・寺西成人・粗原和樹・※秋池勝利・※佐々木正和・林伸明・君塚重彦・※喜屋武悟・※雨宮毅・※渡辺一美・※大元進太郎

整理（※は原稿浄書・校正）

川岸みつ子・八高昭枝・小峰ミヨ子・小林幸江・野中節子・※剛ミサオ・※永沢昭子・※鈴木洋子

測量（コクサイ航測株式会社）・気球写真（サンシャイン工業株式会社）

凡　　例

本　文

1. 遺構は、各遺構毎にほぼ発見順に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示する。本文中に於ては、「ＳＩ325住居跡」・「ＳＫ825土坑」の様に記述する。その番号は本跡全体に於ける登録番号であって、本調査区のみで完結しない。

ＳＡ	柵跡・柱穴列	ＳＩ	住居跡・工房跡	ＳＸ	特殊遺構
ＳＢ	掘立柱建物跡・礎石建物跡	ＳＫ	土坑・瓦溜め	Ｐ	歴史時代ピット
ＳＤ	溝跡・溝状遺構	ＳＳ	集石・配石	ＰＪ	縄文時代ピット

2. 瓦の部分名称については、佐原真氏の「平瓦桶巻き作り」（1972『考古学雑誌』58巻２号所収）での名称によった。
3. 瓦の左側端・右側端とは、狭端を上位置した凹面での左・右を指す。ただし、狭端・広端の不明なものについては、実測図での左・右を指すものとする。
4. 文字瓦の銘記方法については、大川清氏の『武蔵国分寺古瓦塼文字考』（1958）と「瓦塼」(1970『新版考古学講座』7巻所収）での分類名称によった。

図面・図版

1. 遺　構

①遺構配置図表示の数字は、発掘基準線中心点からの距離を表わす。発掘基準線中心点と僧寺金堂中心点の位置関係は、前者の南北基準線上、中心点南２6.276ｍに後者がある。また、僧寺中軸線の方位は発掘南北基準線と一致し、南北から7°08′03″それぞれ西偏する。

②断面図表示の数字は水系レベルで、海抜高を示す。

③スクリーントーンの指示は次のとおりである。

	Ⅱ　層		Ⅳ・Ⅴ層		遺物断面
	Ⅲｂ層		赤色焼土・焼け面		柱穴柱痕跡
	Ⅲｃ層		火熱受けた範囲		

④歴史時代住居跡平面図において、床面の硬軟を四段階に区分した。三点鎖線で示す範囲はａ（堅固）、二点鎖線で示す範囲はａ′(やや堅固)、一点鎖線で示す範囲はｂ（やや軟弱）、それ以外はｃ（軟弱）とした、又、ピット内（脇）の－符合を付した数字は、床面（もしくは検出面）からの深さを示す。（センチメートル）

⑤歴史時代住居跡遺物分布図における記号は次のとおりである。▲（土師器坏・埦）、△（土師器甕他）、◬（土師器、器形不明）、●（須恵器坏・埦）、○（須恵器甕他）、◎（須恵器、器形不明）、◭（土師質土器坏、埦）、◮（土師質土器、器形不明）、■（施釉陶器）、□（瓦塼類）、★（鉄製品）、☆（石製品）、◦（縄文土器、礫、他）。この内断面への投影は幅１ｍに限った。なお、図中の数字は遺物図面番号で、例えば「21－１」とあれば、「図面21－１」のことを示す。

⑥縮尺は次のとおり統一した。

発掘区全体図１/200、建物跡・住居跡・溝跡・土坑他1/50、カマド1/25、火葬墓1/2.5

2. 遺　物

①縄文石器類におけるスクリーントーンの指示は次のとおりである。

やや明瞭な摩耗範囲

②打製石斧、スタンプ形石器において、側縁に沿う実線は、つぶれの範囲を示す。

③歴史時代土器類におけるスクリーントーンの指示は次のとおりである。

	須恵器・土師器		灰釉陶器		施釉範囲
	内黒土師器（器内面に表示）		緑釉陶器		（中央に表示）

④写真図版のうち出土遺物は、図面番号と対照にした。例えば、「21－１」とあれば、「図面２１－１」のことを示す。

⑥縮尺は次のとおり統一した。

【図面】

縄文時代土器・石器1/3（石鏃2/3）、歴史時代土器類1/3、同瓦塼類1/4、同鉄製品・土製品1/2

【図版】

縄文時代土器・石器1/3（石鏃1/1）、　歴史時代土器類1/3、同瓦塼類1/4、同鉄製品・土製品・自然遺物・骨1/1

本　文　目　次

序
例　言
凡　例
Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　調査地区の概観 …… 7
1. 調査地区の位置・立地 …… 7
2. 層　序 …… 8
Ⅲ　発掘経過 …… 10
Ⅳ　歴史時代の調査 …… 13
1. 検出遺構 …… 13
(1) 掘立柱建物跡
(2) 竪穴住居跡
(3) 溝　跡
(4) 土　坑
(5) 火葬墓
(6) ピット
2. 出土遺物 …… 24
3. 小　結 …… 37
Ⅴ　縄文時代の調査 …… 45
1. 検出遺構 …… 45
2. 出土遺物 …… 49
3. 遺物包含層の発掘 …… 51
4. 小　結 …… 53
Ⅵ　先土器時代の調査 …… 57
Ⅶ　結語に代えて …… 58
参考文献 …… 60

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 5
第２図　調査地区の位置 …… 6
第３図　標準層序（ＧＬ86・87区南壁） …… 9
第４図　歴史時代遺構平面全体図（縮尺１/200） …… 14
第５図　火葬墓の分布図 …… 42
第６図　縄文時代遺構平面全体図①Ⅲｃ層上面（縮尺１/200） …… 46
第７図　縄文時代遺構平面全体図②Ⅳ層上面（縮尺１/200） …… 47
第８図　土器出土分布図（縮尺１/200） …… 54
第９図　石器出土分布図（縮尺１/200） …… 55
第10図　礫出土分布図（縮尺１/200） …… 56
第11図　発掘深度図 …… 57

表　目　次

第１表　調査工程表 …… 11
第２表　歴史時代出土遺物一覧(1)
〃　〃　〃　〃 …… 26
第12表　〃　(11)
第13表　住居跡出土土器群の組成 …… 38
第14表　石器計測表 …… 51

図　面　目　次

図面１　ＳＢ78・80掘立柱建物跡実測図
図面２　ＳＩ325住居跡実測図
図面３　ＳＩ325・326住居跡実測図
図面４　ＳＩ326住居跡実測図
図面５　ＳＩ326・327住居跡実測図
図面６　ＳＩ327住居跡実測図
図面７　ＳＩ327住居跡実測図
図面８　ＳＩ327・328住居跡実測図
図面９　ＳＩ328住居跡実測図
図面10　ＳＩ328住居跡実測図
図面11　ＳＤ184・185溝跡、ＳＸ37火葬墓実測図
図面12　ＳＫ819、ＳＫ820、ＳＫ821、ＳＫ822・823土坑実測図
図面13　ＳＫ825・826・863土坑実測図

図面14　ＳＩ３２５住居跡出土遺物
図面15　ＳＩ３２５住居跡出土遺物
図面16　ＳＩ３２６住居跡出土遺物
図面17　ＳＩ３２６住居跡出土遺物
図面18　ＳＩ３２６住居跡出土遺物
図面19　ＳＩ３２７住居跡出土遺物
図面20　ＳＩ３２７住居跡出土遺物
図面21　ＳＩ３２８住居跡出土遺物
図面22　ＳＫ８２５土坑、ＳＸ37火葬墓、遺構外出土遺物
図面23　ＳＫ８６４Ｊ、８６５Ｊ、８６７Ｊ土坑実測図
図面24　ＳＫ８６４Ｊ土坑、遺物包含層、表土他出土土器
図面25　遺物包含層、表土他出土石器

図　版　目　次

図版１　発掘状況
1. 発掘着手時状況（東から）昭和59年７月５日
2. 表土掘削状況（西から）昭和59年７月５日
3. 仮囲い状況（北東から）昭和59年12月22日
4. 歴史時代遺構検出状況・全体（東から）昭和59年７月26日
5. 歴史時代遺構検出状況・東半（南から）昭和59年７月26日
6. 歴史時代遺構調査状況（東から）昭和59年９月12日
7. 気球による全景撮影状況・準備（南から）昭和59年12月23日
8. 縄文時代遺構調査状況（ＳＫ８６５Ｊ）昭和60年２月13日

図版２　歴史時代調査区全景
1. 全景（東から）
2. 気球による全景

図版３　ＳＢ78、80掘立柱建物跡
1. ＳＢ78全景（北から）
2. ２－２柱穴土層断面（東から）
3. ２－３柱穴土層断面（東から）
4. ３－３柱穴土層断面（北から）
5. ＳＢ80全景（南から）
6. １－１柱穴土層断面（南から）
7. ２－１柱穴土層断面（南から）

図版４　ＳＩ３２５住居跡
1. 全景（西から）
2. 構築時全景（北から）
3. 遺物出土状態・下層（北から）
4. 南北土層断面（東から）

5. カマド全景（西から）
図版5　ＳＩ326住居跡　1. Ｂ・Ｃ期全景（北から）
2. Ｃ期遺物出土状態（東から）
3. Ａ期全景（東から）
4. Ａ期南西カマドＥ－Ｅ′土層断面（東から）
5. Ａ期南西カマド構築時（北東から）
図版6　ＳＩ327住居跡　1. Ｂ期全景（東から）
2. 遺物出土状態（北から）
3. Ａ期北カマド全景（南から）
4. Ｂ期南東カマド（北から）
5. 入口部全景（北から）
図版7　ＳＩ328住居跡　1. 全景（北から）
2. 遺物出土状態（東から）
3. 南北土層断面（西から）
4. カマド東西土層断面（南から）
5. 入口部土層断面（東から）
図版8　ＳＤ184・185溝跡　1. ＳＤ184全景（西から）
2. ＳＤ184Ｂ－Ｂ′土層断面（西から）
3. ＳＤ185全景（東から）
4. ＳＤ185Ａ－Ａ′土層断面（東から）
5. ＳＤ185Ｂ－Ｂ′土層断面（東から）
図版9　ＳＫ819～823土坑　1. ＳＫ819全景
2. ＳＫ819南北土層断面（東から）
3. ＳＫ820・821全景（北から）
4. ＳＫ820・821全景（東から）
5. ＳＫ820南北土層断面（西から）
6. ＳＫ821東西土層断面（北から）
7. ＳＫ822・823全景（北から）
8. ＳＫ822東西土層断面（南から）
9. ＳＫ823南北土層断面（東から）
図版10　ＳＫ825・826・863土坑　1. ＳＫ825全景（北から）
2. ＳＫ825遺物出土状態（東から）
3. ＳＫ825構築時①カマド部分（北から）
4. ＳＫ825構築時②ＳＫ826土坑全景（東から）

5. ＳＫ８２５南北土層断面（東から）
6. ＳＫ８２５南北土層断面（西から）
7. ＳＫ８６３全景（東から）
8. ＳＫ８６３東西土層断面（南から）

図版11　ＳＸ37火葬墓
1. 上面検出状態（東から）
2. 東西土層断面（南から）
3. 骨蔵器検出状態（東から）
4. 骨蔵器検出状態（北から）
5. 掘り方全景（東から）
6. 掘り方全景（北から）

図版12　ＳＩ３２５住居跡出土遺物

図版13　ＳＩ３２５・３２６住居跡出土遺物

図版14　ＳＩ３２６住居跡出土遺物

図版15　ＳＩ３２６・３２７住居跡出土遺物

図版16　ＳＩ３２７住居跡出土遺物

図版17　ＳＩ３２８住居跡出土遺物

図版18　ＳＫ８２５土坑、ＳＸ37火葬墓、遺構外出土遺物

図版19　縄文時代全景、遺物出土状態
1. 調査区東半部全景（北から）
2. 調査区東半部全景（西から）
3. 調査区東半部遺物出土状態（北から）
4. 調査区西半部全景（東から）
5. 調査区西半部全景（北から）
6. 調査区西半部遺物出土状態（東から）

図版20　SK864Ｊ・865Ｊ・867Ｊ土坑
1. ＳＫ８６４Ｊ全景（南から）
2. ＳＫ８６４Ｊ東西土層断面（北から）
3. ＳＫ８６５Ｊ全景（南から）
4. ＳＫ８６５Ｊ東西土層断面（南から）
5. ＳＫ８６７Ｊ全景（東から）
6. ＳＫ８６７Ｊ南北土層断面（東から）

図版21　縄文土器

図版22　縄文土器・石器

図版23　先土器時代調査区
1. 全景（南から）
2. 南壁土層断面（北から）
3. 発掘終了状況（西から）昭和60年５月22日

Ⅰ　調査に至る経過

[redacted]氏（[redacted]）より昭和58年4月24日付国教文収第277号にて、国分寺市西元町一丁目2448－1・10番地に共同住宅を増築したい旨、文化財保護法に基づく文化庁長官宛届出がなされた。

当該地の南側に於ては、昭和55年4月1日より同年10月31日迄、同氏外3名による同規模の共同住宅建設に伴う発掘調査（第107次調査[1]）が実施されており、隣接地（第3次調査[2]＝リオン厚生会館建設地、第51次調査[3]＝ＫＤＤ社員寮建設地）等における調査結果よりみて、先土器時代、縄文時代、歴史時代の住居跡をはじめとする遺構の存在が予想されることから、事前に発掘調査を実施する方向で協議を進めることとなった。

なお、工事計画の概要は、共同住宅（ベタ基礎、3階建、12戸）増築工事と付帯工事（給排水・外灯他）で、掘削面積が608.3㎡というものであった。

協議は、届出人代理[redacted]氏、設計・施工会社（巴組鐵工所）穴倉義昭氏、と教育委員会文化財課（田倉・有吉・福田）の間で、4度（第1回：昭和58年10月31日、第2回：昭和58年12月23日、第3回：昭和59年4月21日、第4回：昭和59年5月19日）に亘り行われた。以下に経過の概要を記す。

第1回において工事計画の詳細につき説明を受け、埋蔵文化財の取り扱いにつき説明を行った。事前に発掘調査を実施することの合意を得た上、調査実施にあたっての諸条件（排土処理は届出人が実施、埋戻しは行わない、現地事務所を置く）で了解を得たので、調査計画書を作成することとなった。

第2回において、遺構・遺物の数量等の予測を立てにくいことから、調査計画書2案を提示した。即ち、第1案（周辺において最も密度の濃い地区を参考とした場合、現地14.8ケ月、室内29ケ月、経費26,133,000円）と第2案（前回調査地：第107次調査地と同程度かやや少なめと予測した場合。但し、期間延長の可能性が高いことと、その後の協議について明記する。現地約10.3ケ月、室内19ケ月、経費18,904,000円）で、何れの案においても従前より調査体制が整っていないことを勘案した。

第3回協議冒頭において、調査計画2案検討の結果、第2案でお願いしたい旨回答がなされた。但し、経費の点で前回実績と比べ全体で2倍近いので物価上昇等加味しても了承できないことから減額の強い要望が示された。文化財課よりは、体制不備 ― 調査員の不足や作業員の雇用形態の変更（2ケ月更新、最長4ケ月）からおこる定着率の悪化及び有経験者の不足などのために、日数増、人員増を見込まなければならないことを説明した。

第4回において、文化財課より、整理作業計画の内、体制を変更し、調査員補、整理補助員を投入することにより賃金（整理作業員）を減額し、さらに予備費を削除する等の修正案を示

し、合意するに至った。以下その概要を示す。

(1)調査対象　建物本体の入口部施設・外灯・浸透槽・給排水・ガス管接続部分並びに影響範囲各々周囲1.5ｍの範囲で、発掘深度は工事による掘削深度及び影響範囲（建物本体等ＧＬ－1.0ｍ±0.1ｍ、外灯ＧＬ－1.4ｍ±0.1ｍ、浸透槽ＧＬ－5.0±0.5ｍ）とする。面積637.407㎡。但し、調査範囲外へ延びる遺構の内、住居跡・土坑などまとまりのあるものについては拡張して遺構全体を調査するものとするが、経費・期間共契約内におさめる。

(2)時代　先土器・縄文・奈良・平安の各時代について行う。先土器については、外灯・浸透槽部分のみとする。

(3)期間　現地165日間（約10.3ヶ月）、室内380日間（約19ヶ月）。但し、遺構・建物等の予測数量を前回と同程度かそれ以下に見込んでいるので、期間延長の可能性が高い。延長については別途協議し、契約変更を行う。以上明記する。

(4)経費（委託費）　届出人の負担とするが、器材その他調査会より提供できるものはこれを使用する。

総額15,345,000円。調査の進行に支障をきたさないよう6回に分割して支払うものとする。

(5)体制　調査員1名、調査員補1名、発掘作業員8名前後、整理作業員4名前後。

(6)その他　表土及び二次残土処理（場外処分）、仮囲い、現地作業事務所建設等は届出人にて行う。埋め戻しは行わない。

かくして、昭和59年6月2日付にて、[redacted]氏と武蔵国分寺遺跡調査会との間で発掘調査委託契約が締結された。期間は昭和59年7月4日から昭和62年3月31日迄、現地調査は昭和59年7月4日から昭和60年5月31日迄とした。

注(1)　武蔵国分寺遺跡調査団（団長滝口宏）　1982『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅶ』

(2)　〃　1979『武蔵国分寺跡　武蔵国分寺遺跡調査会年報1974』

(3)　〃　1985『武蔵国分寺跡発掘調査概報Ⅷ』

【旧調査体制】　　武蔵国分寺遺跡調査会組織　　（昭和59年7月～昭和61年3月）

会長	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副会長	滝口宏	東京都文化財保護審議会会長
〃	大島外治	国分寺市教育委員会委員長
理事	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
〃	大川清	国士舘大学教授
〃	坂詰秀一	立正大学教授
〃	本多良雄	国分寺市長
〃	長谷川穣二郎	国分寺市助役
〃	興津精二	国分寺市教育委員会教育長
〃	永井佳雄	東京都教育庁文化課副主幹
〃	坂本喜市	国分寺市社会教育委員会議議長
〃	佐藤敏也	国分寺市文化財保護審議会委員
〃	松井新一	〃
〃	吉田格	〃
〃	藤間恭助	〃
監事	浅見正平	国分寺市社会教育委員
〃	山田弘	国分寺市教育委員会社会教育課長（S-59-10-就任、S-60-10-以降部長兼任）
〃	清水武	〃（S-59-9退任）
事務局長	関口雄基臣	国分寺市教育委員会教育次長（S-60-10二部制施行に伴い退任）
〃	山田弘	国分寺市教育委員会社会教育部長（S-60-10二部制施行に伴い就任）
事務局長補佐	大井川武彦	東京都教育庁文化課埋蔵文化財係長
〃	安田暉	国分寺市教育委員会文化財課長（S-60-10-7退任）
〃	関口信良	〃（S-60-10-7就任）
事務局員	田倉武市	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長兼文化財保護係長
〃	鈴木晃	国分寺市教育委員会文化財課庶務係員

調査団

調査団長	滝口宏	東京都文化財保護審議会会長
調査副団長	永峯光一	〃　委員
〃	大川清	国士舘大学教授
〃	坂詰秀一	立正大学教授
調査員	有吉重蔵	国分寺市教育委員会文化財保護係員
〃	福田信夫	〃
〃	上村昌男	〃
〃	三木弘	国学院大学大学院

【新調査体制】　　国分寺市遺跡調査会組織　　（昭和61年4月発足 ～現在）

会長	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副会長	滝口　宏	東京都文化財保護審議会会長
理事	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
〃	坂詰秀一	〃
〃	大川　清	国士舘大学教授
〃	本多良雄	国分寺市長
〃	内野孝治	国分寺市教育委員会委員長
〃	興津精二	国分寺市教育委員会教育長
〃	坂本喜市	国分寺市社会教育委員会議議長
〃	藤間哉助	国分寺市文化財保護審議会委員
〃	佐藤敏也	〃
〃	松井新一	〃
〃	吉田　格	〃
〃	永井佳雄	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
〃	山田　弘	国分寺市教育委員会社会教育部長
監事	浅見正平	国分寺市社会教育委員
〃	高津喜三郎	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長

武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会

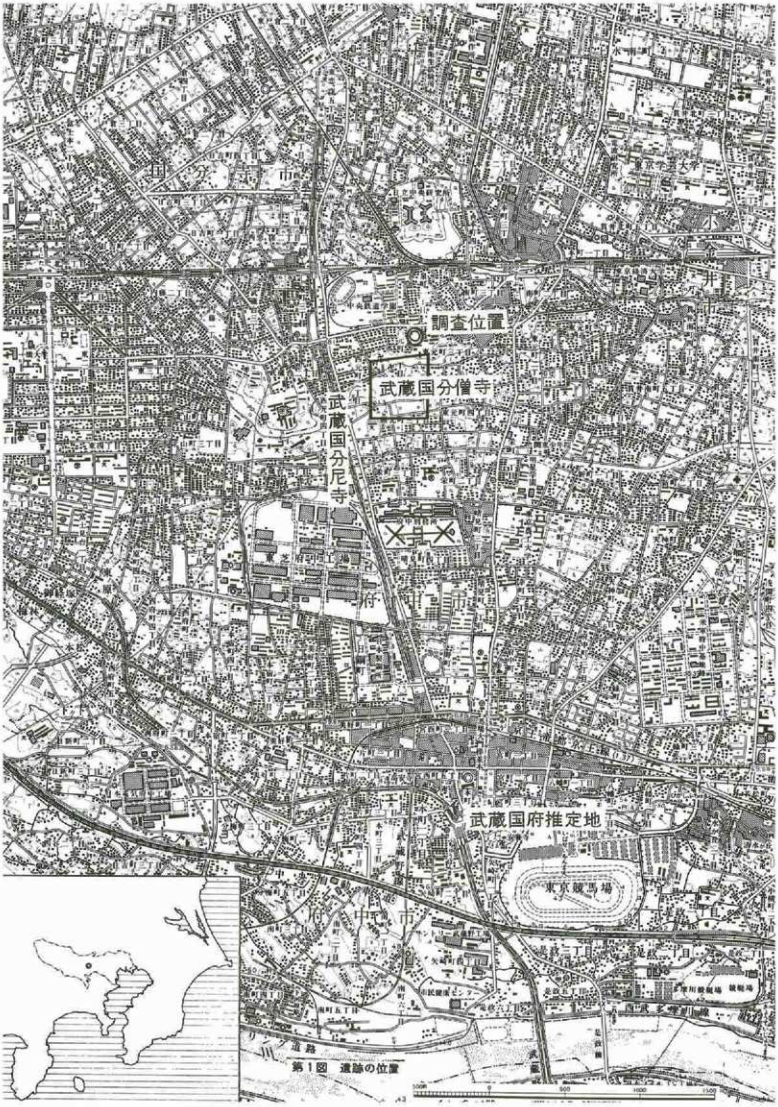
委員長	滝口　宏	（考　古）
委員	永峯光一	（　〃　）
〃	坂詰秀一	（　〃　）
〃	大川　清	（　〃　）

事務局

事務局長	関口信良	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課長
事務局員	田倉武市	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課庶務係長
〃	鈴木　晃	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課庶務係員

調査団

調査団長	滝口　宏	東京都文化財保護審議会会長
主任調査員	有吉重蔵	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係長
調査員	福田信夫	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係員
〃	広瀬昭弘	〃
〃	上村昌男	〃
〃	実川順一	
〃	三木　弘	国学院大学大学院博士課程後期


調査位置
武蔵国分僧寺
武蔵国分尼寺
武蔵国府推定地
東京競馬場
中河原駅
中河原市
府中市
国分寺市
小金井市
調布市
多摩川
道路
1000
0
500
1000
1500

第1図　遺跡の位置

第72次
調査位置
第201次
第107次
第51次
第218次
第127次
第3次
第200次
北方建物跡
講堂
東僧房
金堂
中門
SFI道路跡
僧寺寺域
国分僧寺
尼房
金堂
尼寺寺域
国分尼寺
寺地南限
寺地北限
寺地
国分
市
西元町二丁目
西元町三丁目
西元町四丁目
泉町二丁目
泉町三丁目
泉町四丁目
泉町五丁目
泉町六丁目
泉町七丁目
泉町八丁目
泉町九丁目
泉町十丁目
泉町十一丁目
泉町十二丁目
泉町十三丁目
泉町十四丁目
泉町十五丁目
泉町十六丁目
泉町十七丁目
泉町十八丁目
泉町十九丁目
泉町二十丁目
泉町二十一丁目
泉町二十二丁目
泉町二十三丁目
泉町二十四丁目
泉町二十五丁目
泉町二十六丁目
泉町二十七丁目
泉町二十八丁目
泉町二十九丁目
泉町三十丁目
泉町三十一丁目
泉町三十二丁目
泉町三十三丁目
泉町三十四丁目
泉町三十五丁目
泉町三十六丁目
泉町三十七丁目
泉町三十八丁目
泉町三十九丁目
泉町四十丁目
泉町四十一丁目
泉町四十二丁目
泉町四十三丁目
泉町四十四丁目
泉町四十五丁目
泉町四十六丁目
泉町四十七丁目
泉町四十八丁目
泉町四十九丁目
泉町五十丁目
泉町五十一丁目
泉町五十二丁目
泉町五十三丁目
泉町五十四丁目
泉町五十五丁目
泉町五十六丁目
泉町五十七丁目
泉町五十八丁目
泉町五十九丁目
泉町六十丁目
泉町六十一丁目
泉町六十二丁目
泉町六十三丁目
泉町六十四丁目
泉町六十五丁目
泉町六十六丁目
泉町六十七丁目
泉町六十八丁目
泉町六十九丁目
泉町七十丁目
泉町七十一丁目
泉町七十二丁目
泉町七十三丁目
泉町七十四丁目
泉町七十五丁目
泉町七十六丁目
泉町七十七丁目
泉町七十八丁目
泉町七十九丁目
泉町八十丁目
泉町八十一丁目
泉町八十二丁目
泉町八十三丁目
泉町八十四丁目
泉町八十五丁目
泉町八十六丁目
泉町八十七丁目
泉町八十八丁目
泉町八十九丁目
泉町九十丁目
泉町九十一丁目
泉町九十二丁目
泉町九十三丁目
泉町九十四丁目
泉町九十五丁目
泉町九十六丁目
泉町九十七丁目
泉町九十八丁目
泉町九十九丁目
泉町百丁目
泉町百一丁目
泉町百二丁目
泉町百三丁目
泉町百四丁目
泉町百五丁目
泉町百六丁目
泉町百七丁目
泉町百八丁目
泉町百九丁目
泉町百十丁目
泉町百十一丁目
泉町百十二丁目
泉町百十三丁目
泉町百十四丁目
泉町百十五丁目
泉町百十六丁目
泉町百十七丁目
泉町百十八丁目
泉町百十九丁目
泉町百二十丁目
泉町百二十一丁目
泉町百二十二丁目
泉町百二十三丁目
泉町百二十四丁目
泉町百二十五丁目
泉町百二十六丁目
泉町百二十七丁目
泉町百二十八丁目
泉町百二十九丁目
泉町百三十丁目
泉町百三十一丁目
泉町百三十二丁目
泉町百三十三丁目
泉町百三十四丁目
泉町百三十五丁目
泉町百三十六丁目
泉町百三十七丁目
泉町百三十八丁目
泉町百三十九丁目
泉町百四十丁目
泉町百四十一丁目
泉町百四十二丁目
泉町百四十三丁目
泉町百四十四丁目
泉町百四十五丁目
泉町百四十六丁目
泉町百四十七丁目
泉町百四十八丁目
泉町百四十九丁目
泉町百五十丁目
泉町百五十一丁目
泉町百五十二丁目
泉町百五十三丁目
泉町百五十四丁目
泉町百五十五丁目
泉町百五十六丁目
泉町百五十七丁目
泉町百五十八丁目
泉町百五十九丁目
泉町百六十丁目
泉町百六十一丁目
泉町百六十二丁目
泉町百六十三丁目
泉町百六十四丁目
泉町百六十五丁目
泉町百六十六丁目
泉町百六十七丁目
泉町百六十八丁目
泉町百六十九丁目
泉町百七十丁目
泉町百七十一丁目
泉町百七十二丁目
泉町百七十三丁目
泉町百七十四丁目
泉町百七十五丁目
泉町百七十六丁目
泉町百七十七丁目
泉町百七十八丁目
泉町百七十九丁目
泉町百八十丁目
泉町百八十一丁目
泉町百八十二丁目
泉町百八十三丁目
泉町百八十四丁目
泉町百八十五丁目
泉町百八十六丁目
泉町百八十七丁目
泉町百八十八丁目
泉町百八十九丁目
泉町百九十丁目
泉町百九十一丁目
泉町百九十二丁目
泉町百九十三丁目
泉町百九十四丁目
泉町百九十五丁目
泉町百九十六丁目
泉町百九十七丁目
泉町百九十八丁目
泉町百九十九丁目
泉町二百丁目
泉町二百一丁目
泉町二百二丁目
泉町二百三丁目
泉町二百四丁目
泉町二百五丁目
泉町二百六丁目
泉町二百七丁目
泉町二百八丁目
泉町二百九丁目
泉町二百十丁目
泉町二百十一丁目
泉町二百十二丁目
泉町二百十三丁目
泉町二百十四丁目
泉町二百十五丁目
泉町二百十六丁目
泉町二百十七丁目
泉町二百十八丁目
泉町二百十九丁目
泉町二百二十丁目
泉町二百二十一丁目
泉町二百二十二丁目
泉町二百二十三丁目
泉町二百二十四丁目
泉町二百二十五丁目
泉町二百二十六丁目
泉町二百二十七丁目
泉町二百二十八丁目
泉町二百二十九丁目
泉町二百三十丁目
泉町二百三十一丁目
泉町二百三十二丁目
泉町二百三十三丁目
泉町二百三十四丁目
泉町二百三十五丁目
泉町二百三十六丁目
泉町二百三十七丁目
泉町二百三十八丁目
泉町二百三十九丁目
泉町二百四十丁目
泉町二百四十一丁目
泉町二百四十二丁目
泉町二百四十三丁目
泉町二百四十四丁目
泉町二百四十五丁目
泉町二百四十六丁目
泉町二百四十七丁目
泉町二百四十八丁目
泉町二百四十九丁目
泉町二百五十丁目
泉町二百五十一丁目
泉町二百五十二丁目
泉町二百五十三丁目
泉町二百五十四丁目
泉町二百五十五丁目
泉町二百五十六丁目
泉町二百五十七丁目
泉町二百五十八丁目
泉町二百五十九丁目
泉町二百六十丁目
泉町二百六十一丁目
泉町二百六十二丁目
泉町二百六十三丁目
泉町二百六十四丁目
泉町二百六十五丁目
泉町二百六十六丁目
泉町二百六十七丁目
泉町二百六十八丁目
泉町二百六十九丁目
泉町二百七十丁目
泉町二百七十一丁目
泉町二百七十二丁目
泉町二百七十三丁目
泉町二百七十四丁目
泉町二百七十五丁目
泉町二百七十六丁目
泉町二百七十七丁目
泉町二百七十八丁目
泉町二百七十九丁目
泉町二百八十丁目
泉町二百八十一丁目
泉町二百八十二丁目
泉町二百八十三丁目
泉町二百八十四丁目
泉町二百八十五丁目
泉町二百八十六丁目
泉町二百八十七丁目
泉町二百八十八丁目
泉町二百八十九丁目
泉町二百九十丁目
泉町二百九十一丁目
泉町二百九十二丁目
泉町二百九十三丁目
泉町二百九十四丁目
泉町二百九十五丁目
泉町二百九十六丁目
泉町二百九十七丁目
泉町二百九十八丁目
泉町二百九十九丁目
泉町三百丁目
泉町三百一丁目
泉町三百二丁目
泉町三百三丁目
泉町三百四丁目
泉町三百五丁目
泉町三百六丁目
泉町三百七丁目
泉町三百八丁目
泉町三百九丁目
泉町三百十丁目
泉町三百十一丁目
泉町三百十二丁目
泉町三百十三丁目
泉町三百十四丁目
泉町三百十五丁目
泉町三百十六丁目
泉町三百十七丁目
泉町三百十八丁目
泉町三百十九丁目
泉町三百二十丁目
泉町三百二十一丁目
泉町三百二十二丁目
泉町三百二十三丁目
泉町三百二十四丁目
泉町三百二十五丁目
泉町三百二十六丁目
泉町三百二十七丁目
泉町三百二十八丁目
泉町三百二十九丁目
泉町三百三十丁目
泉町三百三十一丁目
泉町三百三十二丁目
泉町三百三十三丁目
泉町三百三十四丁目
泉町三百三十五丁目
泉町三百三十六丁目
泉町三百三十七丁目
泉町三百三十八丁目
泉町三百三十九丁目
泉町三百四十丁目
泉町三百四十一丁目
泉町三百四十二丁目
泉町三百四十三丁目
泉町三百四十四丁目
泉町三百四十五丁目
泉町三百四十六丁目
泉町三百四十七丁目
泉町三百四十八丁目
泉町三百四十九丁目
泉町三百五十丁目
泉町三百五十一丁目
泉町三百五十二丁目
泉町三百五十三丁目
泉町三百五十四丁目
泉町三百五十五丁目
泉町三百五十六丁目
泉町三百五十七丁目
泉町三百五十八丁目
泉町三百五十九丁目
泉町三百六十丁目
泉町三百六十一丁目
泉町三百六十二丁目
泉町三百六十三丁目
泉町三百六十四丁目
泉町三百六十五丁目
泉町三百六十六丁目
泉町三百六十七丁目
泉町三百六十八丁目
泉町三百六十九丁目
泉町三百七十丁目
泉町三百七十一丁目
泉町三百七十二丁目
泉町三百七十三丁目
泉町三百七十四丁目
泉町三百七十五丁目
泉町三百七十六丁目
泉町三百七十七丁目
泉町三百七十八丁目
泉町三百七十九丁目
泉町三百八十丁目
泉町三百八十一丁目
泉町三百八十二丁目
泉町三百八十三丁目
泉町三百八十四丁目
泉町三百八十五丁目
泉町三百八十六丁目
泉町三百八十七丁目
泉町三百八十八丁目
泉町三百八十九丁目
泉町三百九十丁目
泉町三百九十一丁目
泉町三百九十二丁目
泉町三百九十三丁目
泉町三百九十四丁目
泉町三百九十五丁目
泉町三百九十六丁目
泉町三百九十七丁目
泉町三百九十八丁目
泉町三百九十九丁目
泉町四百丁目
泉町四百一丁目
泉町四百二丁目
泉町四百三丁目
泉町四百四丁目
泉町四百五丁目
泉町四百六丁目
泉町四百七丁目
泉町四百八丁目
泉町四百九丁目
泉町四百十丁目
泉町四百十一丁目
泉町四百十二丁目
泉町四百十三丁目
泉町四百十四丁目
泉町四百十五丁目
泉町四百十六丁目
泉町四百十七丁目
泉町四百十八丁目
泉町四百十九丁目
泉町四百二十丁目
泉町四百二十一丁目
泉町四百二十二丁目
泉町四百二十三丁目
泉町四百二十四丁目
泉町四百二十五丁目
泉町四百二十六丁目
泉町四百二十七丁目
泉町四百二十八丁目
泉町四百二十九丁目
泉町四百三十丁目
泉町四百三十一丁目
泉町四百三十二丁目
泉町四百三十三丁目
泉町四百三十四丁目
泉町四百三十五丁目
泉町四百三十六丁目
泉町四百三十七丁目
泉町四百三十八丁目
泉町四百三十九丁目
泉町四百四十丁目
泉町四百四十一丁目
泉町四百四十二丁目
泉町四百四十三丁目
泉町四百四十四丁目
泉町四百四十五丁目
泉町四百四十六丁目
泉町四百四十七丁目
泉町四百四十八丁目
泉町四百四十九丁目
泉町四百五十丁目
泉町四百五十一丁目
泉町四百五十二丁目
泉町四百五十三丁目
泉町四百五十四丁目
泉町四百五十五丁目
泉町四百五十六丁目
泉町四百五十七丁目
泉町四百五十八丁目
泉町四百五十九丁目
泉町四百六十丁目
泉町四百六十一丁目
泉町四百六十二丁目
泉町四百六十三丁目
泉町四百六十四丁目
泉町四百六十五丁目
泉町四百六十六丁目
泉町四百六十七丁目
泉町四百六十八丁目
泉町四百六十九丁目
泉町四百七十丁目
泉町四百七十一丁目
泉町四百七十二丁目
泉町四百七十三丁目
泉町四百七十四丁目
泉町四百七十五丁目
泉町四百七十六丁目
泉町四百七十七丁目
泉町四百七十八丁目
泉町四百七十九丁目
泉町四百八十丁目
泉町四百八十一丁目
泉町四百八十二丁目
泉町四百八十三丁目
泉町四百八十四丁目
泉町四百八十五丁目
泉町四百八十六丁目
泉町四百八十七丁目
泉町四百八十八丁目
泉町四百八十九丁目
泉町四百九十丁目
泉町四百九十一丁目
泉町四百九十二丁目
泉町四百九十三丁目
泉町四百九十四丁目
泉町四百九十五丁目
泉町四百九十六丁目
泉町四百九十七丁目
泉町四百九十八丁目
泉町四百九十九丁目
泉町五百丁目
泉町五百一丁目
泉町五百二丁目
泉町五百三丁目
泉町五百四丁目
泉町五百五丁目
泉町五百六丁目
泉町五百七丁目
泉町五百八丁目
泉町五百九丁目
泉町五百十丁目
泉町五百十一丁目
泉町五百十二丁目
泉町五百十三丁目
泉町五百十四丁目
泉町五百十五丁目
泉町五百十六丁目
泉町五百十七丁目
泉町五百十八丁目
泉町五百十九丁目
泉町五百二十丁目
泉町五百二十一丁目
泉町五百二十二丁目
泉町五百二十三丁目
泉町五百二十四丁目
泉町五百二十五丁目
泉町五百二十六丁目
泉町五百二十七丁目
泉町五百二十八丁目
泉町五百二十九丁目
泉町五百三十丁目
泉町五百三十一丁目
泉町五百三十二丁目
泉町五百三十三丁目
泉町五百三十四丁目
泉町五百三十五丁目
泉町五百三十六丁目
泉町五百三十七丁目
泉町五百三十八丁目
泉町五百三十九丁目
泉町五百四十丁目
泉町五百四十一丁目
泉町五百四十二丁目
泉町五百四十三丁目
泉町五百四十四丁目
泉町五百四十五丁目
泉町五百四十六丁目
泉町五百四十七丁目
泉町五百四十八丁目
泉町五百四十九丁目
泉町五百五十丁目
泉町五百五十一丁目
泉町五百五十二丁目
泉町五百五十三丁目
泉町五百五十四丁目
泉町五百五十五丁目
泉町五百五十六丁目
泉町五百五十七丁目
泉町五百五十八丁目
泉町五百五十九丁目
泉町五百六十丁目
泉町五百六十一丁目
泉町五百六十二丁目
泉町五百六十三丁目
泉町五百六十四丁目
泉町五百六十五丁目
泉町五百六十六丁目
泉町五百六十七丁目
泉町五百六十八丁目
泉町五百六十九丁目
泉町五百七十丁目
泉町五百七十一丁目
泉町五百七十二丁目
泉町五百七十三丁目
泉町五百七十四丁目
泉町五百七十五丁目
泉町五百七十六丁目
泉町五百七十七丁目
泉町五百七十八丁目
泉町五百七十九丁目
泉町五百八十丁目
泉町五百八十一丁目
泉町五百八十二丁目
泉町五百八十三丁目
泉町五百八十四丁目
泉町五百八十五丁目
泉町五百八十六丁目
泉町五百八十七丁目
泉町五百八十八丁目
泉町五百八十九丁目
泉町五百九十丁目
泉町五百九十一丁目
泉町五百九十二丁目
泉町五百九十三丁目
泉町五百九十四丁目
泉町五百九十五丁目
泉町五百九十六丁目
泉町五百九十七丁目
泉町五百九十八丁目
泉町五百九十九丁目
泉町六百丁目
泉町六百一丁目
泉町六百二丁目
泉町六百三丁目
泉町六百四丁目
泉町六百五丁目
泉町六百六丁目
泉町六百七丁目
泉町六百八丁目
泉町六百九丁目
泉町六百十丁目
泉町六百十一丁目
泉町六百十二丁目
泉町六百十三丁目
泉町六百十四丁目
泉町六百十五丁目
泉町六百十六丁目
泉町六百十七丁目
泉町六百十八丁目
泉町六百十九丁目
泉町六百二十丁目
泉町六百二十一丁目
泉町六百二十二丁目
泉町六百二十三丁目
泉町六百二十四丁目
泉町六百二十五丁目
泉町六百二十六丁目
泉町六百二十七丁目
泉町六百二十八丁目
泉町六百二十九丁目
泉町六百三十丁目
泉町六百三十一丁目
泉町六百三十二丁目
泉町六百三十三丁目
泉町六百三十四丁目
泉町六百三十五丁目
泉町六百三十六丁目
泉町六百三十七丁目
泉町六百三十八丁目
泉町六百三十九丁目
泉町六百四十丁目
泉町六百四十一丁目
泉町六百四十二丁目
泉町六百四十三丁目
泉町六百四十四丁目
泉町六百四十五丁目
泉町六百四十六丁目
泉町六百四十七丁目
泉町六百四十八丁目
泉町六百四十九丁目
泉町六百五十丁目
泉町六百五十一丁目
泉町六百五十二丁目
泉町六百五十三丁目
泉町六百五十四丁目
泉町六百五十五丁目
泉町六百五十六丁目
泉町六百五十七丁目
泉町六百五十八丁目
泉町六百五十九丁目
泉町六百六十丁目
泉町六百六十一丁目
泉町六百六十二丁目
泉町六百六十三丁目
泉町六百六十四丁目
泉町六百六十五丁目
泉町六百六十六丁目
泉町六百六十七丁目
泉町六百六十八丁目
泉町六百六十九丁目
泉町六百七十丁目
泉町六百七十一丁目
泉町六百七十二丁目
泉町六百七十三丁目
泉町六百七十四丁目
泉町六百七十五丁目
泉町六百七十六丁目
泉町六百七十七丁目
泉町六百七十八丁目
泉町六百七十九丁目
泉町六百八十丁目
泉町六百八十一丁目
泉町六百八十二丁目
泉町六百八十三丁目
泉町六百八十四丁目
泉町六百八十五丁目
泉町六百八十六丁目
泉町六百八十七丁目
泉町六百八十八丁目
泉町六百八十九丁目
泉町六百九十丁目
泉町六百九十一丁目
泉町六百九十二丁目
泉町六百九十三丁目
泉町六百九十四丁目
泉町六百九十五丁目
泉町六百九十六丁目
泉町六百九十七丁目
泉町六百九十八丁目
泉町六百九十九丁目
泉町七百丁目
泉町七百一丁目
泉町七百二丁目
泉町七百三丁目
泉町七百四丁目
泉町七百五丁目
泉町七百六丁目
泉町七百七丁目
泉町七百八丁目
泉町七百九丁目
泉町七百十丁目
泉町七百十一丁目
泉町七百十二丁目
泉町七百十三丁目
泉町七百十四丁目
泉町七百十五丁目
泉町七百十六丁目
泉町七百十七丁目
泉町七百十八丁目
泉町七百十九丁目
泉町七百二十丁目
泉町七百二十一丁目
泉町七百二十二丁目
泉町七百二十三丁目
泉町七百二十四丁目
泉町七百二十五丁目
泉町七百二十六丁目
泉町七百二十七丁目
泉町七百二十八丁目
泉町七百二十九丁目
泉町七百三十丁目
泉町七百三十一丁目
泉町七百三十二丁目
泉町七百三十三丁目
泉町七百三十四丁目
泉町七百三十五丁目
泉町七百三十六丁目
泉町七百三十七丁目
泉町七百三十八丁目
泉町七百三十九丁目
泉町七百四十丁目
泉町七百四十一丁目
泉町七百四十二丁目
泉町七百四十三丁目
泉町七百四十四丁目
泉町七百四十五丁目
泉町七百四十六丁目
泉町七百四十七丁目
泉町七百四十八丁目
泉町七百四十九丁目
泉町七百五十丁目
泉町七百五十一丁目
泉町七百五十二丁目
泉町七百五十三丁目
泉町七百五十四丁目
泉町七百五十五丁目
泉町七百五十六丁目
泉町七百五十七丁目
泉町七百五十八丁目
泉町七百五十九丁目
泉町七百六十丁目
泉町七百六十一丁目
泉町七百六十二丁目
泉町七百六十三丁目
泉町七百六十四丁目
泉町七百六十五丁目
泉町七百六十六丁目
泉町七百六十七丁目
泉町七百六十八丁目
泉町七百六十九丁目
泉町七百七十丁目
泉町七百七十一丁目
泉町七百七十二丁目
泉町七百七十三丁目
泉町七百七十四丁目
泉町七百七十五丁目
泉町七百七十六丁目
泉町七百七十七丁目
泉町七百七十八丁目
泉町七百七十九丁目
泉町七百八十丁目
泉町七百八十一丁目
泉町七百八十二丁目
泉町七百八十三丁目
泉町七百八十四丁目
泉町七百八十五丁目
泉町七百八十六丁目
泉町七百八十七丁目
泉町七百八十八丁目
泉町七百八十九丁目
泉町七百九十丁目
泉町七百九十一丁目
泉町七百九十二丁目
泉町七百九十三丁目
泉町七百九十四丁目
泉町七百九十五丁目
泉町七百九十六丁目
泉町七百九十七丁目
泉町七百九十八丁目
泉町七百九十九丁目
泉町八百丁目
泉町八百一丁目
泉町八百二丁目
泉町八百三丁目
泉町八百四丁目
泉町八百五丁目
泉町八百六丁目
泉町八百七丁目
泉町八百八丁目
泉町八百九丁目
泉町八百十丁目
泉町八百十一丁目
泉町八百十二丁目
泉町八百十三丁目
泉町八百十四丁目
泉町八百十五丁目
泉町八百十六丁目
泉町八百十七丁目
泉町八百十八丁目
泉町八百十九丁目
泉町八百二十丁目
泉町八百二十一丁目
泉町八百二十二丁目
泉町八百二十三丁目
泉町八百二十四丁目
泉町八百二十五丁目
泉町八百二十六丁目
泉町八百二十七丁目
泉町八百二十八丁目
泉町八百二十九丁目
泉町八百三十丁目
泉町八百三十一丁目
泉町八百三十二丁目
泉町八百三十三丁目
泉町八百三十四丁目
泉町八百三十五丁目
泉町八百三十六丁目
泉町八百三十七丁目
泉町八百三十八丁目
泉町八百三十九丁目
泉町八百四十丁目
泉町八百四十一丁目
泉町八百四十二丁目
泉町八百四十三丁目
泉町八百四十四丁目
泉町八百四十五丁目
泉町八百四十六丁目
泉町八百四十七丁目
泉町八百四十八丁目
泉町八百四十九丁目
泉町八百五十丁目
泉町八百五十一丁目
泉町八百五十二丁目
泉町八百五十三丁目
泉町八百五十四丁目
泉町八百五十五丁目
泉町八百五十六丁目
泉町八百五十七丁目
泉町八百五十八丁目
泉町八百五十九丁目
泉町八百六十丁目
泉町八百六十一丁目
泉町八百六十二丁目
泉町八百六十三丁目
泉町八百六十四丁目
泉町八百六十五丁目
泉町八百六十六丁目
泉町八百六十七丁目
泉町八百六十八丁目
泉町八百六十九丁目
泉町八百七十丁目
泉町八百七十一丁目
泉町八百七十二丁目
泉町八百七十三丁目
泉町八百七十四丁目
泉町八百七十五丁目
泉町八百七十六丁目
泉町八百七十七丁目
泉町八百七十八丁目
泉町八百七十九丁目
泉町八百八十丁目
泉町八百八十一丁目
泉町八百八十二丁目
泉町八百八十三丁目
泉町八百八十四丁目
泉町八百八十五丁目
泉町八百八十六丁目
泉町八百八十七丁目
泉町八百八十八丁目
泉町八百八十九丁目
泉町八百九十丁目
泉町八百九十一丁目
泉町八百九十二丁目
泉町八百九十三丁目
泉町八百九十四丁目
泉町八百九十五丁目
泉町八百九十六丁目
泉町八百九十七丁目
泉町八百九十八丁目
泉町八百九十九丁目
泉町九百丁目
泉町九百一丁目
泉町九百二丁目
泉町九百三丁目
泉町九百四丁目
泉町九百五丁目
泉町九百六丁目
泉町九百七丁目
泉町九百八丁目
泉町九百九丁目
泉町九百十丁目
泉町九百十一丁目
泉町九百十二丁目
泉町九百十三丁目
泉町九百十四丁目
泉町九百十五丁目
泉町九百十六丁目
泉町九百十七丁目
泉町九百十八丁目
泉町九百十九丁目
泉町九百二十丁目
泉町九百二十一丁目
泉町九百二十二丁目
泉町九百二十三丁目
泉町九百二十四丁目
泉町九百二十五丁目
泉町九百二十六丁目
泉町九百二十七丁目
泉町九百二十八丁目
泉町九百二十九丁目
泉町九百三十丁目
泉町九百三十一丁目
泉町九百三十二丁目
泉町九百三十三丁目
泉町九百三十四丁目
泉町九百三十五丁目
泉町九百三十六丁目
泉町九百三十七丁目
泉町九百三十八丁目
泉町九百三十九丁目
泉町九百四十丁目
泉町九百四十一丁目
泉町九百四十二丁目
泉町九百四十三丁目
泉町九百四十四丁目
泉町九百四十五丁目
泉町九百四十六丁目
泉町九百四十七丁目
泉町九百四十八丁目
泉町九百四十九丁目
泉町九百五十丁目
泉町九百五十一丁目
泉町九百五十二丁目
泉町九百五十三丁目
泉町九百五十四丁目
泉町九百五十五丁目
泉町九百五十六丁目
泉町九百五十七丁目
泉町九百五十八丁目
泉町九百五十九丁目
泉町九百六十丁目
泉町九百六十一丁目
泉町九百六十二丁目
泉町九百六十三丁目
泉町九百六十四丁目
泉町九百六十五丁目
泉町九百六十六丁目
泉町九百六十七丁目
泉町九百六十八丁目
泉町九百六十九丁目
泉町九百七十丁目
泉町九百七十一丁目
泉町九百七十二丁目
泉町九百七十三丁目
泉町九百七十四丁目
泉町九百七十五丁目
泉町九百七十六丁目
泉町九百七十七丁目
泉町九百七十八丁目
泉町九百七十九丁目
泉町九百八十丁目
泉町九百八十一丁目
泉町九百八十二丁目
泉町九百八十三丁目
泉町九百八十四丁目
泉町九百八十五丁目
泉町九百八十六丁目
泉町九百八十七丁目
泉町九百八十八丁目
泉町九百八十九丁目
泉町九百九十丁目
泉町九百九十一丁目
泉町九百九十二丁目
泉町九百九十三丁目
泉町九百九十四丁目
泉町九百九十五丁目
泉町九百九十六丁目
泉町九百九十七丁目
泉町九百九十八丁目
泉町九百九十九丁目
泉町一千丁目
泉町一千一丁目
泉町一千二丁目
泉町一千三丁目
泉町一千四丁目
泉町一千五丁目
泉町一千六丁目
泉町一千七丁目
泉町一千八丁目
泉町一千九丁目
泉町一千十丁目
泉町一千十一丁目
泉町一千十二丁目
泉町一千十三丁目
泉町一千十四丁目
泉町一千十五丁目
泉町一千十六丁目
泉町一千十七丁目
泉町一千十八丁目
泉町一千十九丁目
泉町一千二十丁目
泉町一千二十一丁目
泉町一千二十二丁目
泉町一千二十三丁目
泉町一千二十四丁目
泉町一千二十五丁目
泉町一千二十六丁目
泉町一千二十七丁目
泉町一千二十八丁目
泉町一千二十九丁目
泉町一千三十丁目
泉町一千三十一丁目
泉町一千三十二丁目
泉町一千三十三丁目
泉町一千三十四丁目
泉町一千三十五丁目
泉町一千三十六丁目
泉町一千三十七丁目
泉町一千三十八丁目
泉町一千三十九丁目
泉町一千四十丁目
泉町一千四十一丁目
泉町一千四十二丁目
泉町一千四十三丁目
泉町一千四十四丁目
泉町一千四十五丁目
泉町一千四十六丁目
泉町一千四十七丁目
泉町一千四十八丁目
泉町一千四十九丁目
泉町一千五十丁目
泉町一千五十一丁目
泉町一千五十二丁目
泉町一千五十三丁目
泉町一千五十四丁目
泉町一千五十五丁目
泉町一千五十六丁目
泉町一千五十七丁目
泉町一千五十八丁目
泉町一千五十九丁目
泉町一千六十丁目
泉町一千六十一丁目
泉町一千六十二丁目
泉町一千六十三丁目
泉町一千六十四丁目
泉町一千六十五丁目
泉町一千六十六丁目
泉町一千六十七丁目
泉町一千六十八丁目
泉町一千六十九丁目
泉町一千七十丁目
泉町一千七十一丁目
泉町一千七十二丁目
泉町一千七十三丁目
泉町一千七十四丁目
泉町一千七十五丁目
泉町一千七十六丁目
泉町一千七十七丁目
泉町一千七十八丁目
泉町一千七十九丁目
泉町一千八十丁目
泉町一千八十一丁目
泉町一千八十二丁目
泉町一千八十三丁目
泉町一千八十四丁目
泉町一千八十五丁目
泉町一千八十六丁目
泉町一千八十七丁目
泉町一千八十八丁目
泉町一千八十九丁目
泉町一千九十丁目
泉町一千九十一丁目
泉町一千九十二丁目
泉町一千九十三丁目
泉町一千九十四丁目
泉町一千九十五丁目
泉町一千九十六丁目
泉町一千九十七丁目
泉町一千九十八丁目
泉町一千九十九丁目
泉町二千丁目
泉町二千一丁目
泉町二千二丁目
泉町二千三丁目
泉町二千四丁目
泉町二千五丁目
泉町二千六丁目
泉町二千七丁目
泉町二千八丁目
泉町二千九丁目
泉町二千十丁目
泉町二千十一丁目
泉町二千十二丁目
泉町二千十三丁目
泉町二千十四丁目
泉町二千十五丁目
泉町二千十六丁目
泉町二千十七丁目
泉町二千十八丁目
泉町二千十九丁目
泉町二千二十丁目
泉町二千二十一丁目
泉町二千二十二丁目
泉町二千二十三丁目
泉町二千二十四丁目
泉町二千二十五丁目
泉町二千二十六丁目
泉町二千二十七丁目
泉町二千二十八丁目
泉町二千二十九丁目
泉町二千三十丁目
泉町二千三十一丁目
泉町二千三十二丁目
泉町二千三十三丁目
泉町二千三十四丁目
泉町二千三十五丁目
泉町二千三十六丁目
泉町二千三十七丁目
泉町二千三十八丁目
泉町二千三十九丁目
泉町二千四十丁目
泉町二千四十一丁目
泉町二千四十二丁目
泉町二千四十三丁目
泉町二千四十四丁目
泉町二千四十五丁目
泉町二千四十六丁目
泉町二千四十七丁目
泉町二千四十八丁目
泉町二千四十九丁目
泉町二千五十丁目
泉町二千五十一丁目
泉町二千五十二丁目
泉町二千五十三丁目
泉町二千五十四丁目
泉町二千五十五丁目
泉町二千五十六丁目
泉町二千五十七丁目
泉町二千五十八丁目
泉町二千五十九丁目
泉町二千六十丁目
泉町二千六十一丁目
泉町二千六十二丁目
泉町二千六十三丁目
泉町二千六十四丁目
泉町二千六十五丁目
泉町二千六十六丁目
泉町二千六十七丁目
泉町二千六十八丁目
泉町二千六十九丁目
泉町二千七十丁目
泉町二千七十一丁目
泉町二千七十二丁目
泉町二千七十三丁目
泉町二千七十四丁目
泉町二千七十五丁目
泉町二千七十六丁目
泉町二千七十七丁目
泉町二千七十八丁目
泉町二千七十九丁目
泉町二千八十丁目
泉町二千八十一丁目
泉町二千八十二丁目
泉町二千八十三丁目
泉町二千八十四丁目
泉町二千八十五丁目
泉町二千八十六丁目
泉町二千八十七丁目
泉町二千八十八丁目
泉町二千八十九丁目
泉町二千九十丁目
泉町二千九十一丁目
泉町二千九十二丁目
泉町二千九十三丁目
泉町二千九十四丁目
泉町二千九十五丁目
泉町二千九十六丁目
泉町二千九十七丁目
泉町二千九十八丁目
泉町二千九十九丁目
泉町三千丁目
泉町三千一丁目
泉町三千二丁目
泉町三千三丁目
泉町三千四丁目
泉町三千五丁目
泉町三千六丁目
泉町三千七丁目
泉町三千八丁目
泉町三千九丁目
泉町三千十丁目
泉町三千十一丁目
泉町三千十二丁目
泉町三千十三丁目
泉町三千十四丁目
泉町三千十五丁目
泉町三千十六丁目
泉町三千十七丁目
泉町三千十八丁目
泉町三千十九丁目
泉町三千二十丁目
泉町三千二十一丁目
泉町三千二十二丁目
泉町三千二十三丁目
泉町三千二十四丁目
泉町三千二十五丁目
泉町三千二十六丁目
泉町三千二十七丁目
泉町三千二十八丁目
泉町三千二十九丁目
泉町三千三十丁目
泉町三千三十一丁目
泉町三千三十二丁目
泉町三千三十三丁目
泉町三千三十四丁目
泉町三千三十五丁目
泉町三千三十六丁目
泉町三千三十七丁目
泉町三千三十八丁目
泉町三千三十九丁目
泉町三千四十丁目
泉町三千四十一丁目
泉町三千四十二丁目
泉町三千四十三丁目
泉町三千四十四丁目
泉町三千四十五丁目
泉町三千四十六丁目
泉町三千四十七丁目
泉町三千四十八丁目
泉町三千四十九丁目
泉町三千五十丁目
泉町三千五十一丁目
泉町三千五十二丁目
泉町三千五十三丁目
泉町三千五十四丁目
泉町三千五十五丁目
泉町三千五十六丁目
泉町三千五十七丁目
泉町三千五十八丁目
泉町三千五十九丁目
泉町三千六十丁目
泉町三千六十一丁目
泉町三千六十二丁目
泉町三千六十三丁目
泉町三千六十四丁目
泉町三千六十五丁目
泉町三千六十六丁目
泉町三千六十七丁目
泉町三千六十八丁目
泉町三千六十九丁目
泉町三千七十丁目
泉町三千七十一丁目
泉町三千七十二丁目
泉町三千七十三丁目
泉町三千七十四丁目
泉町三千七十五丁目
泉町三千七十六丁目
泉町三千七十七丁目
泉町三千七十八丁目
泉町三千七十九丁目
泉町三千八十丁目
泉町三千八十一丁目
泉町三千八十二丁目
泉町三千八十三丁目
泉町三千八十四丁目
泉町三千八十五丁目
泉町三千八十六丁目
泉町三千八十七丁目
泉町三千八十八丁目
泉町三千八十九丁目
泉町三千九十丁目
泉町三千九十一丁目
泉町三千九十二丁目
泉町三千九十三丁目
泉町三千九十四丁目
泉町三千九十五丁目
泉町三千九十六丁目
泉町三千九十七丁目
泉町三千九十八丁目
泉町三千九十九丁目
泉町四千丁目
泉町四千一丁目
泉町四千二丁目
泉町四千三丁目
泉町四千四丁目
泉町四千五丁目
泉町四千六丁目
泉町四千七丁目
泉町四千八丁目
泉町四千九丁目
泉町四千十丁目
泉町四千十一丁目
泉町四千十二丁目
泉町四千十三丁目
泉町四千十四丁目
泉町四千十五丁目
泉町四千十六丁目
泉町四千十七丁目
泉町四千十八丁目
泉町四千十九丁目
泉町四千二十丁目
泉町四千二十一丁目
泉町四千二十二丁目
泉町四千二十三丁目
泉町四千二十四丁目
泉町四千二十五丁目
泉町四千二十六丁目
泉町四千二十七丁目
泉町四千二十八丁目
泉町四千二十九丁目
泉町四千三十丁目
泉町四千三十一丁目
泉町四千三十二丁目
泉町四千三十三丁目
泉町四千三十四丁目
泉町四千三十五丁目
泉町四千三十六丁目
泉町四千三十七丁目
泉町四千三十八丁目
泉町四千三十九丁目
泉町四千四十丁目
泉町四千四十一丁目
泉町四千四十二丁目
泉町四千四十三丁目
泉町四千四十四丁目
泉町四千四十五丁目
泉町四千四十六丁目
泉町四千四十七丁目
泉町四千四十八丁目
泉町四千四十九丁目
泉町四千五十丁目
泉町四千五十一丁目
泉町四千五十二丁目
泉町四千五十三丁目
泉町四千五十四丁目
泉町四千五十五丁目
泉町四千五十六丁目
泉町四千五十七丁目
泉町四千五十八丁目
泉町四千五十九丁目
泉町四千六十丁目
泉町四千六十一丁目
泉町四千六十二丁目
泉町四千六十三丁目
泉町四千六十四丁目
泉町四千六十五丁目
泉町四千六十六丁目
泉町四千六十七丁目
泉町四千六十八丁目
泉町四千六十九丁目
泉町四千七十丁目
泉町四千七十一丁目
泉町四千七十二丁目
泉町四千七十三丁目
泉町四千七十四丁目
泉町四千七十五丁目
泉町四千七十六丁目
泉町四千七十七丁目
泉町四千七十八丁目
泉町四千七十九丁目
泉町四千八十丁目
泉町四千八十一丁目
泉町四千八十二丁目
泉町四千八十三丁目
泉町四千八十四丁目
泉町四千八十五丁目
泉町四千八十六丁目
泉町四千八十七丁目

Ⅱ　調査地区の概観

1.　調査地区の位置・立地

調査地区は国分寺市西元町一丁目2448－1・10番地に所在し、武蔵国分寺跡の一画を占めている。標高77ｍほどの武蔵野台地・武蔵野段丘面上に立地する。

武蔵野台地は、関東山地南部の奥多摩に源を発する多摩川と関東山地北部の秩父山系に源を発する荒川とにはさまれる扇状地形の洪積台地であり、その西南縁には、国分寺崖線と府中崖線と呼ばれる崖（ハケ）があり、国分寺崖線により武蔵野段丘面と低位立川段丘面とに分けられている。この崖線は国分寺付近で比高差12ｍほどある。崖下よりは湧水が豊富に湧き出している。調査地区の東側の道を200ｍほど南下した崖下に真姿弁財天がまつられている真姿の池があり、今では市内で最も水量の多い湧水がみられる。湧水はやや南下して、西方の現国分寺裏山から流れくる湧水と集合し、小川となって東へ蛇行しながら進み（元町用水とよばれる）東元町三丁目の不動橋の所で恋ケ窪の湧水を集めて下流する野川の本流と合流する。野川の本流は開折谷を形成しており、調査地区の東約200ｍでその谷壁斜面となる。東元町三丁目21の東急分譲地西端の谷壁下からは今も豊富な水量の湧水（下水側溝にみられる）がみられ、これが形成した谷が台地の奥まで北西方向へ浅く延びている。調査地区においては、西南から北西へかけゆるやかな下り傾斜となるのは、この谷の影響と考えられる。

さて、調査地区は、都道145号（国立－国分寺）線を30ｍほど南へ入ったところで、南側は昭和54年調査の佐藤氏国分寺アパート、北西側は同氏他所有の林地となっている。東の道路をはさんでリオン株式会社があり、西側には広大な敷地の郵政省住宅があって閑静な住宅地となっている。

武蔵国分寺跡の主要部は崖下におかれたが、溝跡で区画する寺地の範囲は、台地上まで延びている。調査地区は寺地・寺域の北辺溝より約130ｍにある。武蔵国分寺跡の発掘基準線中心点より北へ393.5～416ｍ、東へ219～264ｍにあたり、僧寺金堂中心より直径距離で約494ｍ（調査地区中心まで）を測る。

武蔵国分寺跡の北方域にあたる本調査地周辺では、第51次調査、第72次調査、第107次調査[1]、第127次調査[2]、第168・190次調査[3]、第200次調査[4]、第218次調査[5]など中規模の調査が実施されている。台地縁辺部において、平安時代前期の遺構・遺物が若干みられるほかは、平安時代後期の掘立柱建物跡、竪穴住居跡などが重複することなく散在し、一部は溝跡などの区画施設に規制された計画的配置を示していることなどが明明している。

このほか、先土器、縄文時代における遺構・遺物も、第107次調査において、第51次調査ほどの内容はないものの、先土器時代ユニット・礫群、縄文時代土坑（早期）や土器片（早・前

・中期）、石器（石鏃、スタンプ形石器、打製石斧等）などが検出されているので隣区においても同様と予測し、調査に臨んだ。

2. 層　　序

調査地区は武蔵野段丘上の平坦地であり、ほぼ単純な層序を示す。以下にその基本層序を概述する。図は、調査区南東隅の断面である。（GL86・87区南壁）

Ia 層　盛土。ローム・砂利その他の客土、調査区南半と東端にみられる。10～40cm。

Ib 層　表土。

II 層　黒褐色土。粒子粗く、粘性に欠く。遺構内の堆積土に酷似する。調査区南東域にあっては、ほとんど認められない。10cm前後。

IIIa 層　黒褐色土。やや茶褐色味を帯びる。締まり、粘性あり、III層の上部で、II層に近い部分。II層・IIIb 層との境は漸移的。10～15cm。調査区全域においてみられる。縄文時代遺物を出土する。

IIIb 層　暗茶褐色土。下部ほど褐色味強い。縄文時代の遺物を多く出土する。歴史時代遺構の大半が該層上面にて検出し易くなる。

IIIc 層　茶褐色土。ローム漸移層。縄文時代の遺物を若干出土する。縄文時代の遺構は本層上面にて検出がやや容易となる。

IV 層　暗黄褐色ローム。ソフトローム。縄文時代遺構の大半が、本層上面にて検出が容易となる。なお、調査による掘削深度は、先土器時代調査坑を除き、全て該層上面までとした。

Va 層　黄褐色ローム。ハードローム。

Vb 層　黄褐色ローム。ハードローム。Va 層に比べスコリア粒少なく、暗い。

VI 層　暗黄褐色ローム。立川ローム第一黒色帯。VI層の明るさによりその存在が判る。

VII 層　黄褐色ローム。明るいローム。上部において径3～5cm大でブロック状で明るい。

VIIIa 層　暗黄褐色ローム。

VIIIb 層　暗黄褐色ローム。立川ローム第二黒色帯。VIIIa 層よりさらに黒色味増す。

IXa 層　黒褐色ローム。立川ローム第二黒色帯。VIIIb 層との境は明瞭であり、より黒色味を増している。

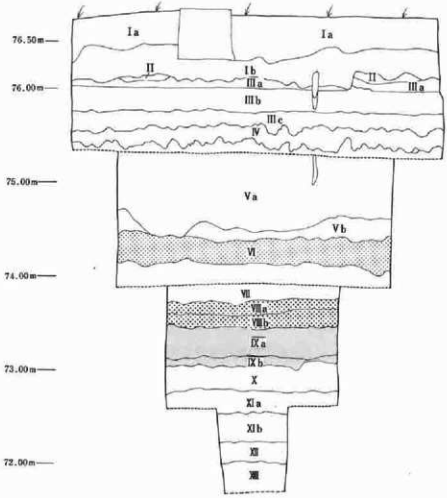
IXb 層　暗黄褐色ローム。立川ローム第二黒色帯。成分はIXb 層で、Xa 層より明るい。

X 層　黄褐色ローム。次第に硬度増す。

XIa 層　黄褐色ローム。硬度さらに強まる。

XIb 層　暗黄褐色ローム。黄色味あるのは本層まで、IXa 層より暗い。

XII 層　暗褐色ローム。さらに暗くなり、粒子緻密となる。



第３図　標準層序（ＧＬ８６・８７区南壁）

XIII層　暗褐色ローム。さらに暗くなり、緻密となる。硬度も増す。

註(1)　既報告　武蔵国分寺遺跡調査団（団長滝口宏）１９８０　『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ｎ』

(2)　未報告　昭和56年５月～７月調査

(3)　既報告　武蔵国分寺遺跡調査団（団長滝口宏）１９８５　『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ｋ』

(4)　未報告　近刊予定　昭和59年６月～11月調査

(5)　未報告　昭和59年11月～12月調査

Ⅲ 発 掘 経 過

昭和59年6月2日に調査委託契約を締結した後、7月4日の現地着手へ向けて諸準備を進めた。発掘器材と作業員について確保した上、6月22日に届出人側の工事設計・施工業者（巴組鐵工所東京支店大嶋氏と細田氏担当）と①立木伐採・処理、②表土排土（場外搬出）、③調査範囲の位置出し、④東側沿道掘削部分の山留め・保安柵設置、⑤現場事務所の設置などについて打ち合わせに入り、計画通り、7月5日より掘削を開始できるよう準備を進めることとなった。まず、②プレハブ現地事務所が6月26・27日で設置され、①立木伐採が引き続き6月30日まで行われ、7月2・3日で③調査範囲の位置出しが行われた。④については、調査会より国分寺市（建設部管理課）に沿道掘削許可申請、道路占用許可申請を6月25日に行い、6月28日に許可がおり、これを受けて、小金井警察署に道路使用許可申請を7月3日に行い、7月7日に許可がおりた。期間は昭和60年1月4日までとなったので、12月26日に延長申請を行い、5月31日迄の期間で許可された。表土掘削が東側沿道に及んだ7月9日に保安柵を設置した。

7月3・4日で器材を搬入し、作業員の現地集合体制を整え、7月5日よりパワーショベルとダンプカーにより表土排土・場外搬出作業を開始した。7月11日迄にほぼ表土をとりおえ、7月19日までかかって遺構精査を行った。予測を上廻り、掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡4軒（付属施設多い）、溝跡2条、火葬墓、土坑、小穴などが検出された。以後歴史時代の遺構調査は住居跡を主として、昭和60年1月25日まで行った。

（調査日数133日間、調査面積694,210㎡）

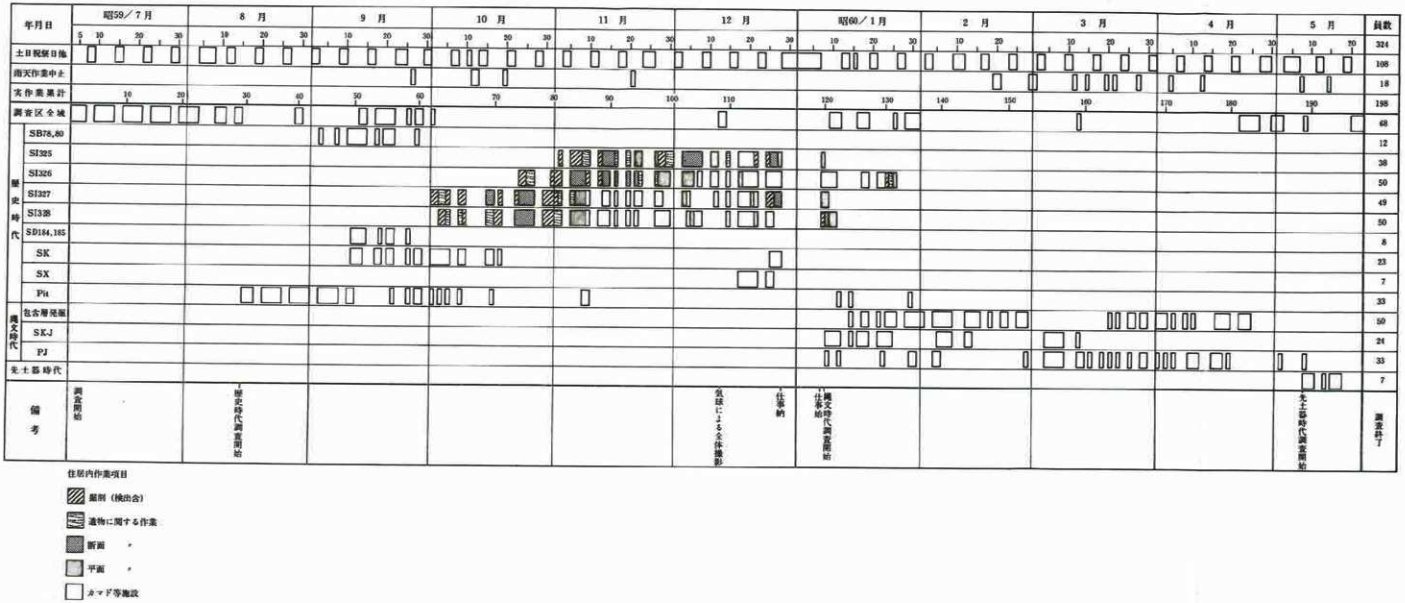
歴史時代の調査の目途が立ち河内公夫氏の着任を受けて、昭和60年1月8日より歴史時代検出面でみられた縄文時代落ち込みと、縄文時代遺物包含層の発掘に着手した。

ほぼ予測通り、多く集中する範囲もなく、土坑と小穴などの遺構を検出し、予定通り進捗し、5月8日をもって終了した。（調査日数71日間、調査面積636,380㎡）

先土器時代の調査は、外灯部分については歴史・縄文時代調査と伴せていたので、調査区南東隅の溝遺構部分につき、5月8日より開始し、5月17日に終了した。（調査日数7日間、調査面積16,591㎡）

以後片付け、器材撤収を行い、5月22日に全ての現地作業を終了した。総調査日数198日、調査面積694,210㎡（内57,83㎡について歴史時代のみ）、作業員延人数1437人。各遺構の調査進行状況については次表にまとめた。

全体としては、当初予測を上廻る内容であったにもかかわらず、冬期に南半部が凍結した以外は天候にも恵まれたこと、体制不足の為期間の余裕をいただいたことなどが幸して、予定通り順調に進捗し、多くの成果を得て終了することができた。


年月日
昭59／7月
8 月
9 月
10 月
11 月
12 月
昭60／1月
2 月
3 月
4 月
5 月
員数
土日祝祭日他
雨天作業中止
実作業累計
調査区全域
SB78,80
SI325
SI326
SI327
SI328
SD184,185
SK
SX
Pit
包含層発掘
SK-J
PJ
先土器時代
備考
調査開始
歴史時代調査開始
気球による全体撮影
仕事納
縄文時代調査開始
仕事始
先土器時代調査開始
調査終了
324
108
18
198
68
12
38
50
49
50
8
23
7
33
50
24
33
7
住居内作業項目
薬剤（検出含）
遺物に関する作業
断面 〃
平面 〃
カマド等施設

第1表　調査工程表

Ⅳ　歴史時代の調査

1. 検　出　遺　構

本調査によって発見された歴史時代遺構は、下記に列挙する掘立柱建物跡２棟、竪穴住居跡４軒、溝跡２条、土坑８基（内１基はカマド状施設を有する土坑）、火葬墓１基、ピット（小穴）51個で、竪穴住居跡がいづれも北側で発見されるなどの偏りはあるが、ほぼ全域にわたっている。検出面、堆積土、出土遺物などから該期のものと判断した。

掘立柱建物跡：ＳＢ78・80　　竪穴住居跡：ＳＩ325・326・327・328

溝跡：ＳＤ184・185　　土坑：ＳＫ819・820・821・822・823・825・826・863

火葬墓：ＳＸ37　　ピット：Ｐ－１～51

Ⅰ層（盛土・表土）が40～60㎝、Ⅱ層（黒褐色土）が５～10㎝前後あったことから、遺構の残存状況は比較的良好であった。

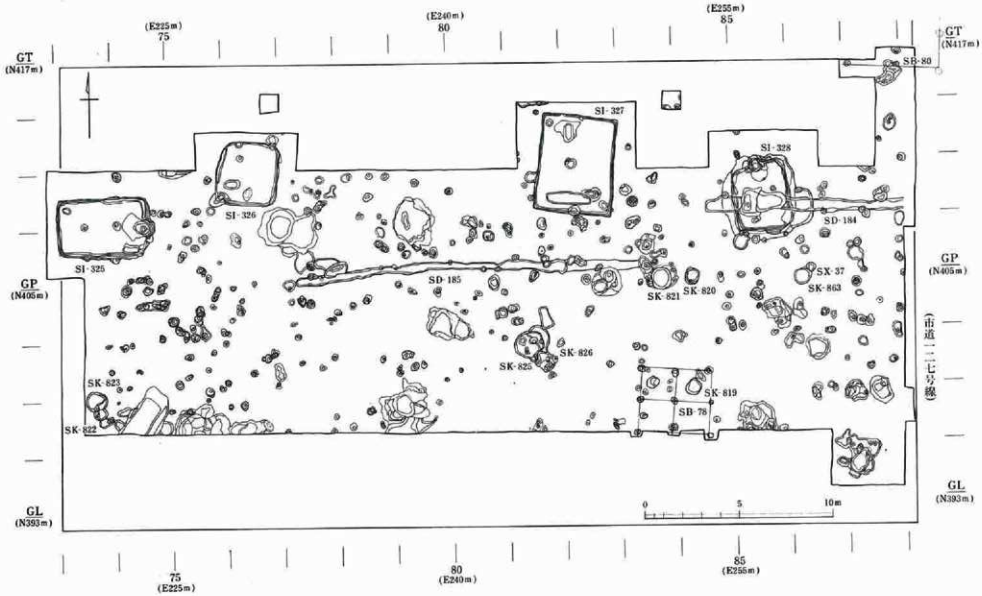
遺構の検出は、前回（107次：南側）のデータにもとづき、機械力を併用して実施し、確認が容易となるⅢb層上面でとめた。

Ⅱ層との関係については幸い、４軒の住居とも土層壁にかかって検出されたので、注意深く観察したが、いづれも明瞭な切り合い関係は把えられなかった。ＳＩ325・326 住居跡にあっては、壁の立上りをⅡ層中に見出し得ず、Ⅱ層が覆土を覆っている図としたが、住居上のⅢ層とⅢa層上のⅡ層とは、前者がやや黒色味あるなどの相違点があった。ＳＩ327住居跡にあっては、住居壁等のみⅡ層が覆い、次第に住居内堆積土上面へと変化するものと把えたが、不確実であった。ＳＩ328住居跡にあっては、壁周辺においてⅡ層の堆積が良好でない為、その関係は明瞭でない。以上を総合すると、Ⅲ層及び住居覆土の形成後の土壌変化なども加味する要があろうが、両形成期はかなり近接しているものと考えることができる。明瞭なる遺構堆積物（例えば、粘土・ローム等）などがあれば把え易いかと思われるので、今後共注意していきたい。

(1) 掘立柱建物跡

ＳＢ78掘立柱建物跡（図面１、図版３）

ＧＭ・ＧＮ83・84区に所在する。ＳＫ819土坑が建物内に存する。東西２間×南北２間で９個の柱穴を検出する総柱であるが、周辺調査区検出例よりみて調査区外の南へ１間延び、南北３間の南北棟になるものと思われる。桁行柱間 1.7 m等間に対して梁行柱間1.85m等間と広がるなどの共通点を有することとなる。建物の規模は、東西総長 3.17 m、南北総長推定 5.1 m（検出 3.4 m）となる。柱位置は一直線に並ぶ通りははとんど無い。桁行方位（発掘基準線に対する偏角以下同じ）はＮ５°Ｅを示す。柱穴は径 0.2 ～ 0.4 mの円形で深さ 0.2 ～ 0.65m と大



第４図　歴史時代遺構平面全体図（縮尺１／２００）

小様々である。掘り形埋め土は若干有るのみ。建て替えはない。出土建物はない。

ＳＢ80掘立柱建物跡（図面１・図版３）

ＧＳ87区に所在する。東西2.5ｍの間隔をおいて２個の柱穴を検出した。東接する第51次調査区道路部分で調査済の南北に３本の柱穴列（ＳＡ５）の南端と直交する方向であり、柱穴規模が類似することなどから一つの建物跡として把えることとした。都合５本検出された柱穴は南西に２間（柱間2.5＋2.2ｍ）、南北に２間（2.1ｍ等間）となり、西並びに東へ延びるものと思われる。柱穴の規模はＳＢ78に同じく、小規模で径0.3ｍの円形、深さ0.3～0.4ｍで、柱跡は径0.15ｍほどである。南北柱通りの方位はＮ４°Ｅを示す。建て替えはない。出土遺物はない。

(2) 竪穴住居跡

Ｓｉ325住居跡（図面２・３、図版４）

ＧＰ・ＧＱ73・74区に所在する。僧寺中軸線より北へ408ｍ、東へ221.5ｍの位置である。規模は、東西4.3～5.0ｍ、南北3.0～3.1ｍの隅丸長方形で、北壁方位はＮ90°Ｗを示し、中軸線に直交する。

第Ⅲa 層上部より第Ⅳ層ソフトローム上面まで約0.5ｍ掘り込んで、若干の貼床を施す。カマド周辺よりもむしろ西側のＰ－２の小穴を中心に堅固な範囲が広がっている。又、床面は壁から中央へ、そして、西から東へとゆるやかに下り傾斜となっている。周溝は、東壁のカマド下と南半を除き全周する。幅0.1～0.25ｍ。深さは床面より0.1～0.15ｍを測る。北壁東半から東壁北半にかけて幅広く、浅くなっている。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられる。構築土はほとんど残らない為、上面では確認できなかった。壁外への掘り込みは、平面凸字形、断面丸底状で、幅（南北）1.0ｍ、奥行（東西）0.4ｍである。火床面は、長円形で幅0.6ｍ、奥行0.8ｍでその中には、壁よりやや住居内へ入る。火床面は地山土（ローム）で0.1ｍほど赤色焼土化し、さらに0.1ｍほどまで火熱を受けていた。火床面上には女瓦片が多く出土した。構築材の一部と思われる。カマドの前面の床はゆるく摺鉢状にカマド火床へと続いており、その幅は南北最大1.5ｍ東西（火床西端より）0.6ｍを測る。東西土層断面によれば、カマド部分のみ、住居堆積土中層より、火床面近くまで、“掘り込み”がみられ、焼土粒少ない黒褐色土（14・15層）が堆積する。構築土がみられないのはこの為と思われる。

南東隅に長円形の落ち込み（Ｐ－１）を検出。東西1.0ｍ、南北0.5ｍ、深さ0.1ｍ強。

住居中央部にＰ－２、Ｐ－３の２個の小穴が検出された。共に断面ラッパ形で、Ｐ－２は床面上の開口部径0.4ｍ、本体部径0.2ｍ、深さは0.4ｍ。Ｐ－３も同様の規模であるが、床面より0.15ｍまで、埋められていた。従ってＰ－３→Ｐ－２の新旧関係となる。Ｐ－２上層には焼土粒が多くみられて、この２個の小穴は、壁際に掘り形埋め土と思われる層がみられ、堆積土下層は締まり弱いことなどから、柱穴とみることができる。本住居の形態が、南北：東西で

約1：1.6と細長いこととの関連が考えられる。

堆積土は大きく上下2層に分けることができる。上層（1･2層）は、黒褐色土で焼土粒少なく、下層（3～8層）は黒褐色土～赤褐色土で、焼土粒多く含む層と焼土ブロック等より成る。焼土粒、焼土ブロックの分布範囲は、カマド前面を除くように住居西半部全体から、東半部の北壁沿と南壁沿であり、西に厚く（住居検出時に確認）東で薄い。床面直上の部分あり。

遺物は総数352点あり、その大半は、覆土上層や焼土・焼土ブロック層で、その上面より出土。主に住居の南東部に多くこれらは焼土の分布と似る。カマド火床面上の一群を除き、覆土上層から焼土内のものまで接合資料があることや、分布に相違がみられないことから一群のものとしてとらえることができる。従って、焼土は住居西方向より土器片、瓦片等は、住居北西方向より、各々東及び南東へむかって漸時投入されていったものと考えることができる。

ＳＩ３２８住居跡（図面３～５、図版５）

ＧＱ・ＧＲ75～77区に所在する。僧寺中軸線より北へ411m、東へ229.5mの位置である。規模は、東西3.0～3.2ｍ、南北3.3ｍの隅丸方形で、北壁方位はN85°Wを示す。

第Ⅲa 層上面より第Ⅲc層（ローム漸移層）中位まで約0.4ｍ掘り込んで、若干の貼床を施す。周溝は幅0.1～0.2ｍ。深さ0.01～0.05ｍと浅く、南西隅カマド前面を除きほぼ全周する。但し、北壁下と南壁下では極めて浅く判然としない部分が多い。床面は西北部分と南西部分が若干高いほかはほぼ平坦で、南西カマド前面が最も堅固にしまっている。

南西隅に住居外への掘り込みを有するカマドがあって（Ａ期西南隅カマド）、一部に埋め込んだ形跡がみられた。その前面にも"カマド"（長円形の火床面を検出）があって（Ｂ期西南隅カマド）、貼床が施されている。さらに、北西部には僅かな焼け面（床）の痕跡がみられた。（Ｃ期焼け面の痕跡）。以上の中で、Ａ期とＢ期は直接的に切り合い関係なく、共にＣ期以前に位置付けられるのであるが、床面の最も堅固な範囲がＢ期西南隅カマドを中心に広がっていることから、Ａ期→Ｂ期→Ｃ期へと移行するものと考えられる。

Ａ期西南隅カマドは、住居の西南コーナーに壁外の掘り込みを伴って設けられたもので、武蔵国分寺跡既検出例の中でも数少ない西南隅カマドである。壁外への掘り込みは幅0.8ｍ、奥行0.8ｍで、断面は舟底状を呈する。火床面の中心は壁下にあり、火床は若干凹む程度。火床は、火熱を受ける程度で、径0.2ｍ弱である。

残存状態は比較的良く、掛け口の天井部は構築材の女瓦と共に崩落していた（ａ～ｃ層に相当）が、それ以外はローム・粘土を含む黒褐色土により女瓦・男瓦を芯材とする構築土が残っていた。ｂ～ｈ層は、掛け口部への埋め込み土と思われる。

本カマドは火床の被熱状態よりみて、短期間の使用が推定される。

次に、Ｂ期南西隅カマドとしたものは、火床面を残すのみのもので、ＳＩ327住居内の屋内の両カマドと、位置（壁からの距離）・火床の規模などが類似することから、構築土は残存しないものの（それは、全て除去され貼床されていると考え）、同様の屋内のカマドととらえた。

床への掘り込みは長円形で幅（南北）0.5ｍ、奥行（東西）0.9ｍ、深さ0.06ｍと浅い。壁から掘り込み西端まで0.4ｍ、掘り込み床面のほぼ中央付近が径0.3ｍほど火熱を受けていた（赤色焼土化せず）。堆積土中（主に西半）より土師器坏、甕、土師質土器坏など小片がまとまって出土している。上面には貼床が施されていた。

Ｃ期とした北西隅の焼け面痕跡は、西壁より0.9ｍ、北壁より1.1ｍの位置の床が、径0.15ｍの範囲で火熱を受けているものである。北東コーナーとの間には多量の焼土と炭化物を含む黒褐色土が焼け面痕跡を馬蹄形状に取り囲んで、床面上に分布しており、土師器坏の完形が4個体、酸化焔焼成須恵器坏（4／3残存）が1個体のほか、土師器カメ片などがまとまって出土した。当初、Ｂ期南西隅の屋内のカマドと同様な施設かと考えられたが、明瞭な床への掘り込みは無かった。上部の構造は明らかでないが、何らかの調理施設があったものと考えられる。

南壁の中央、やや東寄りの場所で壁に接して、焼土粒・焼土ブロックを多く含んだ黒褐色土が東西0.4ｍ、南北0.7ｍの範囲にあった。高さは床面より0.1ｍ弱で、断面はカマボコ形、壁より住居面に向ってやや下り傾斜となっていた。上面のみ踏み固められた様に固く締まっていたことから、入口部施設の可能性がある。

堆積土はローム粒含む黒褐色土で、下層になるほど締まり粘性増すものの大きく1層としてとらえられる。遺物は住居西南に多く、上下全体にわたって出土している。接合資料は下層のものに多いが、上下で接合もしくは同一個体のものもありほぼ一群のものとしてとらえられる。又、Ａ期西南隅カマド内出土のものと、Ｂ期西南隅カマド内のものと住居覆土下層のもので接合もしくは同一個体資料であることから、Ａ～Ｃの各期は互いに近接した時間差を有していたものと考えることができる。

Ｓ１３２７住居跡（図面6～8、図版6）

ＧＱ・ＧＲ81～83区に所在する。僧寺中軸線より北へ411ｍ、東へ247ｍに位置する。規模は東西4.0（北半）～4.2ｍ（南半）、南北5.1～5.2ｍの南北に長い長方形で、やや南半部が大きい。壁は東壁を除き直線的であり、壁の立上りも直角に近いことが特徴としてあげられる。北壁方位はN83°Wを示す。

Ⅲa 層上部よりⅢc 層（ローム漸多層）上部まで約0.4ｍ掘り込み床面とする。住居中央部は地山をそのまま床とし、周囲のみ0.05～0.1ｍほど貼床を施す。周溝は幅0.1～0.2ｍ、深さ0.03～0.05ｍで、北カマドの北側北壁下の一部を除き全周する。入口部の下にもあった。

住居内の北西部に北カマド、南東部に南東カマド、中央やや西寄りに炉、南壁中央に入口部、住居北西隅に小穴（Ｐ－1）、南東隅にも小穴（Ｐ－2）、中央炉の北側に小穴（Ｐ－3）などのほか、西壁南半中央に壁外へ張り出す落ち込みがあった。以上の諸施設は貼床下検出の北カマド・Ｐ－3と、貼床のない南東カマド・炉・Ｐ－2・3に分けられる。入口部と張り出し部の構築時期は明らかでない。床は両カマドと炉・入口部を中心に堅固な範囲が広がっており、北東部は軟弱であった。

さて、北カマドは、床面精査時に検出され屋内に設けられたカマドで、幅0.5ｍ、奥行0.9ｍの長円形を呈する火床部の掘り込みを持つ。壁より掘り込み北端まで0.5ｍ、深さは床面より0.05～0.06ｍほどである。掘り込みの南半中央部と周囲壁の一部は火熱を受け赤色焼土化していた。そして、この掘り込みの北半を馬蹄形状に囲む様に、ローム＋炭＋焼土の範囲が明瞭に他の床面と区別できて存在した。この面は床面として使用された面であるが、カマド構築土の基底部の範囲を示しているものと考えられる。その東西幅は約1.5ｍ、奥行0.9ｍほどである。その基底部の構築土を取り除くと、掘り込みの北半を囲う様に、幅0.1～0.25ｍ、深さ0.05～0.1ｍで凵字形に掘りくぼめられていた。構築土、構築材の据えつけ掘り形と思われる。構築材は出土していない。掘り込み内のカマド火床土部を中心にして図面19－4・5・8などの酸化焔焼成須恵器坏や同じく19－11などの灰釉陶器碗片などが、ややまとまって出土している。掘り込みの方向は床面に対してやや南で東へ偏している。

南東カマドは、上層の発掘時においては検出されず、下層に至って、焼土粒・粘土粒の分布から検出されたものである。北カマドと90°方向をかえて、西より東壁に向う形となる。北カマドと同様に床面へ幅0.5ｍ、奥行0.9ｍほどの長方形の掘り込みを行っている。その深さ約0.1ｍで中央やや北東寄りの径0.25ｍの範囲が赤色焼土化していた。そして東半部を馬蹄形に取り囲むように、構築土の基底部が僅かながら残存していた。その幅（南北）約0.75ｍ、奥行（東西）約0.6ｍであった。構築土はローム、粘土、焼土を含む黒褐色土で、これを取り除くと、北カマドと似て0.03～0.05ｍと深い掘り形となっていた。最奥部に構築材と考えられる女瓦片が火床方向へ横倒しになりながらも、構築状況を物語るあり様で出土した。又、火床最奥部には宇瓦が1つ立った状態で出土しており、支脚とされたものと思われる。火床部上にも宇瓦片（別個体）女瓦片、塼片などが重なって出土した。何れも構築材に使用されているものと見られる。

炉は、南北0.5ｍ、東西0.6ｍの不整円形で、床面より火床面まで0.05～0.06ｍで浅い摺り鉢状を呈している。火床面はほぼ全面火熱を受けているが、赤色焼土化していたのは、その西半の一部で、0.12×0.18ｍの長円形の範囲のみであった。火床は住居掘り形埋め土を用いて構築されており、これを取り除くと深さ0.5ｍほどの小穴となった。

次に入口部は、黒褐色土を用いて築かれ、その上面（部）が固く締っていることから検出されたものである。幅0.7ｍ、奥行きとして住居内へは0.5ｍ弱入り、壁外には約0.1ｍほど固い部分があった。半円形を呈す構築土の上面は住居内に向って下り傾斜となり、床面へと続く。拳大の礫が1つ入っていた。

西壁にある壁外への張り出し部は、幅0.5～0.6ｍ、奥行0.7ｍの凵字形である。底面まで検出面より約0.1ｍ下、住居床面より約0.1ｍ上となる。堆積土よりみて住居と一体のものと考えられる。

住居内堆積土は、ローム少ない黒褐色土の上層とローム茶褐色土が多く、締まり粘性ある黒

褐色土の下層に大別される。

遺物は総数230点と少なく、北東部を除き、西カマドと炉周辺に多い。

ＳＩ３２８住居跡（図面８～10、図版７）

ＧＰ～ＧＱ84～86区に所在する。僧寺中軸線より北へ409m、南へ257mに位置する。規模は、東西が2.9（北半）～3.1ｍ（南半）で、南北は西壁で3.4ｍ、東壁で3.9ｍとなってやや台形状を呈する。各壁は若干胴張り状となる。南壁で方位を測るとＮ92°Ｗを示す。

第Ⅲa 層より、第Ⅳ層（ソフトローム）上部まで、住居中央部で0.6ｍ、周囲で0.7ｍ掘り込み、0.03～0.15ｍほど埋め土して床を形成する。床は周辺を除き堅固な範囲が広がる。カマド方向へ若干の下り傾斜となっている。周溝はカマド部分と南東隅を除き全周する。幅は0.1～0.3ｍ、深さ0.01～0.03ｍと浅い。壁はほぼ垂直に立上る。壁周辺に浅いテラス状の落ち込みを有するのが本跡の特徴である。カマド部分を除く四周にあり、その幅は壁より0.1～0.5ｍほどあり、壁の形状に合う様に各辺が胴張り状となる。深さは検出面から0.05～0.10ｍで、住居内へ向ってゆるやかに下る。床よりの高さは約0.3ｍほどである。南東部においては、さらに南北２ｍ、東西0.9ｍの長円形の張り出し部がとりつく。その深さ0.02～0.03ｍと浅い、住居中央部の東西に対をなす様に小穴が検出された。径0.3ｍ、深さ0.15ｍ前後である。堆積土・形状よりみて柱穴と考えられ、いづれも壁外の掘り込み中にあることから、特殊な上屋構造を有するものと解される。

カマドは北壁の中央よりやや西寄りに設ける。壁外への掘り込みは凸字形で幅0.7ｍ、断面は舟底状である。火床は長円形で、幅が手前で0.55ｍ、奥で0.35ｍ、奥行は0.7ｍ。手前中央部が0.03ｍほど凹み、径0.35ｍほどの範囲で赤色焼土化している。赤色焼土の厚みは0.07ｍほどあった。丁度、壁下となる。焼土域の最奥部に支脚とされた拳大の礫が立っていた。構築土は両袖と西側壁の基底部のみであるが比較的良好に残存していた。ロームを多く含む黒褐色土を主体とする。両側壁は男瓦、女瓦片を用いて構築しており、ことに、左側壁は女瓦を立て凹面を火床へ向けて、そのまま側壁としていた。

南壁の中央やや東寄りで入口部と考えられる硬質面があった。壁の途中にあって，階段状となっているもので、その幅0.8ｍ、奥行は深さ0.2ｍ、踏み面の奥行0.12ｍほどである。壁を断面Ｌ字状に掘り込み凹部に固く締まる黒色土を埋め込み上面を平坦にしている。踏み面より床面までの高さ0.23ｍ、検出面までは0.16ｍを測る。

堆積土は、上・中・下層に大別され、下層ほど黒色味と締まり・粘性度が増し、ローム粒を多く含むようになる。曲型的なレンズ状の堆積を示し、自然堆積と考えられる。

遺物は、330点と比較的多い。が、多くは上中層より出土の小片資料で接合例が少ない。対して、カマド及び床直、覆土下層の一群は接合例も多く、分布状況においても若干の不整合が認められるので、一部に上層と下層のものが接合する例もあるが、各々別の一群とみることができる。

(3) 溝 跡

SD184溝跡（図面11、図版8）

GP・GQ84～87区に所在する東西溝である。東側の道路下での調査（第51次調査地道路部分）では検出されなかったが、浅く、良好な堆積土でない為、把握されなかったものと思われる。幅0.4～0.9m、深さ最大0.1mほどで延長105mを検出した。西端は僧寺中軸線の東253.5mでおわる。SI328 住居跡を切って上に構築されており、堆積土は黒色味弱い黒褐色土であるが、時期は新しいものと考えられる。底面のレベルは東へいくに従い下る。レベル差は西端で0.13mほどである。遺物は還元焔焼成須恵器坏片が3点、酸化焔焼成須恵器坏片が1点のほか瓦片、礫片が若干ある。

SD185溝跡（図面11、図版8）

GO・GP77～82区を調査する東西溝である。幅0.4～0.6m、深さ最大0.1mほどの浅い溝で西端は僧寺中軸線の東231.8m、東端は同じく251mまで、延長18.3mを調査した。東端付近は、底面付近のみ僅かに検出したにすぎない。浅い遺構の為、検出面が深いと発見されないことが考えられる。底面のレベルは東へいくに従い下る。レベル差は両端で0.13mほどである。堆積土は小穴内のものに似て、締まりある黒褐色土で、小穴と重複して、切られるものが3例ある。遺物は還元焔焼成須恵器坏体部片が1点あるのみである。

(4) 土 坑

カマド状施設を有する土坑1基（SK825）と円形土坑3基（SK821・826・863）、方形土坑4基（SK819・820・822・823）の合計8基である。いづれも竪穴住居と重複することなく分布し、SB78掘立柱建物跡内に存するもの1基（SK819）、その周辺にあるもの5基（SK820・821・825・826・863）、離れて調査区西南隅にあるもの2基（SK822・823）となり、この内重複関係有するものは、3例でSK822とSK823が重複し、SK825とSK826も重複し、SK863はSX37と重複している。

SK819土坑（図面12、図版9）

GM・GN84区に所在する。僧寺中軸線の北399m、東253mに位置する。SB78掘立柱建物跡内の北東部（2-2→3-2→3-3→2-3柱穴間）中央に位置する。第51次調査地区において掘立柱建物内にあるものが5例、建物外の近接位置にあるもの3例があって、その位置、方向などよりみて建物跡と土坑との強い関連性を指摘しておいたが、SK819とSB78の関係はその類例を追加することになった。

本土坑の形態は不整方形ともいうべきで、丸味を有す部分と直線的な部分がある。上面東西0.75m、南北0.8m。底面は第Ⅳ層（ソフトローム）上面で、検出面より0.25mを測る。壁はゆるやかに立上る。

SK820土坑（図面12、図版9）

GO・GP84区に所在する。僧寺中軸線の北405m、東253mに位置する。SK821土坑に

東接する。上面東西0.8 m、南北0.9 mを測る隅丸方形。第Ⅲc層（ローム漸移層）上部まで約0.3 m掘り込み底面とする。壁の立上りはゆるく、断面丸底状を呈する。堆積土は黒褐色土（下層にはローム粒多くなる）で、ＳＫ819土坑と似る。

ＳＫ８２１土坑（図面12、図版９）

ＧＯ・ＧＰ83・84区に所在する。僧寺中軸線の北405m、東251mに位置する。ＳＫ820土坑に西接する。上面東西1.0 m、南北1.15mの長円形。深さ0.7 m。底面は第Ⅴ層（ハードローム）上部。壁の立上りは急で、底面は丸底状となっている。堆積土は大きく上・下層に分けられ、上層はローム若干入る黒褐色土、下層はローム粗粒多く入る黒褐色土で、下層は人為的に埋めたものと思われる。遺物は上層より瓦片３点、礫１点、酸化焔焼成須恵器坏口縁部片１点の外、下層より酸化焔焼成須恵器坏口縁小片１点がある。

ＳＫ８２２土坑（図面12、図版９）

ＧＭ73区に所在する。僧寺中軸線の北398.5m、東221mに位置する。ＳＫ823土坑を切って構築する。ＳＫ819などと同様に不整方形を呈し、東西0.7 mの規模を有する。深さ0.1 mで、第Ⅲc層上部に底面を作る。断面は舟底形。

ＳＫ８２３土坑（図面12、図版９）

ＧＭ・ＧＮ73区に所在する。僧寺中軸線の北399m、東221m に位置する。ＳＫ822土坑に切られる。上面東西1.1 m、南北1.0 mの隅丸方形土坑。深さ0.2 mで断面舟底形を呈する。礫片３点及び、還元焔焼成須恵器坏小片３点などが出土している。

ＳＫ８２５カマド状施設を有する土坑（図面13、図版10）

ＧＮ・ＧＯ81区に所在する。僧寺中軸線の北401m、東244mに位置する。ＳＫ826 土坑を切って構築する。

上面東西1.6 m×南北1.3 mの円形で、深さ0.1 mの浅い土坑の南壁に幅0.9 m、奥行0.6 mの馬蹄形のカマドを設ける。壁の立上りはゆるやかで、底面はほぼ平坦であった。カマド前面においては幅0.8 m、奥行0.7 mの範囲が住居の床面と同様に、貼床を施し、堅固になっていた。カマドの構築土はローム焼土粒まじりの黒色土で、基底部が残存していたもので、構築材として用いられた瓦片が若干残る。火床は約0.2 mの円形範囲で、その中心は壁下となる。但し、焼成を受けた炉跡は検出されなかった。底面の北東部に上面東西0.4 m、南北0.3 m、深さ0.7 mの円形小穴が１つあり（Ｐ－１）、柱列跡と埋め土がみられていることから、柱穴と思われる。柱痕の上面径0.25m、深さ0.5 mである。

遺物はカマド周辺に集中して34点出土。還元焔焼成須恵器坏２個体が復原実測できた。（図面22－１・２）

ＳＫ８２６土坑（図面13、図版10）

ＧＮ・ＧＯ81区に所在する。僧寺中軸線の北402m、東245mに位置する。西南部分を大きくＳＫ825土坑により切られる。

上面東西 1.2 m×南北 1.3 mの長円形を呈すると思われ、深さ 0.02～0.03 mと浅い。

ＳＫ８６３土坑（図面13、図版10）

ＧＯ86区に所在する。僧寺中軸線の北４０４.５m、東２５９mに位置する。ＳＸ37火葬墓と接する。ＳＸ37掘り形検出時に発見したもので、ＳＸ37との切り合い部分は僅かしかなく、新旧関係を把握することができなかった。

径 0.85mの円形土坑で、深さ 0.35mを測る。底面は第Ⅲc 層（ローム漸移層）下部にある。壁の立上りはゆるやかで丸底状を呈する。堆積土は黒褐色土で上層の厚さ 0.04mを除き、下層には硬質のブロックが入り締まり強く、人為的に埋め込んだものと考えられる。

遺物は上～中層より炭化物片３点の外に、酸化焼成須恵器坏小片７点、土師器甕胴部小片６点、礫１点などが出土した。

(5) 火葬墓

ＳＸ３７火葬墓（図面11、図版11）

ＧＯ・ＧＰ86区に所在する。僧寺中軸線の北 405m、東 259mに位置する。

掘り形の規模は上面東西 0.48m×南北 0.52m、底面で同じく 0.27m× 0.35m の隅丸長方形プランを有する。壁の立上りはゆるやかで断面舟底形を呈する。深さ 0.13mを測る。

そのほぼ中央に、土師器甕を骨蔵器として用い、逆位に埋設したものである。口縁部はほぼ水平で、底面より 0.09mを測る。上部（骨蔵器の胴下半部）は表土排土作業により、大半を失い、口縁から頸部にかかる周囲はどが原状のまま遺存したほかは、骨蔵器内及び掘り形内より出土したものや、排土中より採集されたものが多い。

骨蔵器内は粗粒で締まりある黒褐色土で、骨粉をまじえてやや白色味を帯びる。口辺部と同レベルで、図版18－①・②の骨片が出土したほかは、後に主に骨蔵器内の土壌中より、同様もしくは、さらに細かい骨片を若干採集できたにすぎない。褐色味ある白色を呈しており、火熱を受けているものと思われる。詳しくは今後の分析結果を待ちたい。

掘り形内の埋め土は茶褐色土を若干含む黒褐色土で、締まりは強かった。

骨蔵器は口径 23.0cmの土師器長胴甕で最大径は胴部にあると思われ、ゆるやかなくの字状口縁を有し、胴部は縦及び斜めのヘラ削りを施すものである。

(6) 小　穴

調査区の全体において大小多数のピット（小穴）が検出された。遺構検出面で確認された 320 個のピット状落ち込みの内、粒子粗く締まり弱い木の根などによる攪乱と思われるものを除き、195個（未掘１）につき断面実測を行った。194個・197例につき、上面形と断面形につき分類すると次表の様になる。

上面形＼断面形	砲弾形	円筒形	丸底形	平底形	不整形	U字形	計
円形（楕円形含む）	1	5					6
不整円形	46	71	29	17	1		164
方形（隅丸方形含む）				1			1
不整方形							0
不整形		2	1	5	2	1	11
底面が長円もしくは長楕円形	1	5		3		6	15
計	48	83	30	26	3	7	197

17タイプがあったが、この内、上面不整円形で断面円筒形のものが最も多く、これに同じく上面不整円形で断面が砲弾形、丸底形、平底形のものを加えると83%を占める。規模は、上面径0.2～0.3mが多く、深さは浅いものが0.05m、深いものが0.63mまである。第51次調査区例に比べ深いものが少ない様である。タイプ別、規模別の分布状況等の分析に至らなかった。

なお、掘立柱建物跡2棟の柱穴10個も小穴194個に含まれており、そのタイプは、上面円形で断面円筒形のもの1、上面不整円形で断面砲弾形のもの1、上面不整円形で断面円筒形のもの6、底面が長円もしくは、長楕円形で断面V字形のもの1の4種あり、その他の小穴と大きく変るところはない。

2. 出 土 遺 物

本調査により出土した歴史時代遺物としては、土器・陶器・瓦塼類・鉄製品・自然遺物など総量コンテナ32箱ほどであり、その多くは住居跡から出土したものである。

遺物の説明は全て一覧表によることとし、出土位置毎に、土器→陶器→瓦塼類→金属製品→自然遺物の順とした。表記の方法について以下に補足説明をする。

(1) 各遺物共通

イ．遺物番号としてあるのは、各個体毎の登録番号で、各個体に黄色ポスターカラーで註記してある。資料抽出の便に供する。

ロ．出土位置において、「カマド」はカマド構築土崩壊土及びカマド覆土、「床直」は床面直上出土を示す。

ハ．計測値、記号なしは完数値、〔　〕は復元数値、（　）は残存数値、－ は計測不可を表わす、単位はセンチメートル。

(2) 土器類

イ．種別　土：土師器、須A：須恵器A（還元焔焼成）、須B：須恵器B（酸化焔焼成）、土師質：土師質土器、灰：灰釉陶器

(3) 瓦

鐙　瓦（本報告にないので省略）

宇　瓦

イ．内区文様　G：重弧文、KK：均正唐草文、HK：倒行唐草文、H：ヘラ書き文、T：竹管文、K：格子文（ヘラ書きは除く）、J：縄文、O：その他

ロ．外区、脇区文様　a：素文、b：珠文、c：長円珠文、d：圏線文、e：鋸歯文、f：凸線文、g：その他

ハ．顎の形態　以下の組み合わせにより記入

E　直線顎

a　凸面を整形するもの

b　瓦当部と女瓦部境部分のみ整形するもの

c　不整形のもの

F　段　顎

F1 瓦当凸面と凹面が平行するもの

F2 F１以外のもの

a　瓦当凸面および瓦当裏面を整形するもの

b　瓦当凸面のみ整形するもの

c　瓦当裏面のみ整形するもの

d 不整形のもの

G 曲線顎

G1 瓦当凸面が内彎しながら女瓦凸面に移行するもの

G2 瓦当凸面がやや直線的に内傾しながら女瓦凸面に移行するもの

G3 いわゆる蹄顎形式

a 瓦当凸面を整形するもの

b 瓦当部と女瓦部境部分のみ整形するもの

c 不整形のもの

男瓦・女瓦

イ. 布 目 本 数　3㎝四方内での側端縁に平行する糸数と狭・広端縁に平行する糸数を表わす

ロ. 縄 叩 き 本 数　3㎝四方内での縄数を表わす

ハ. 縄 の 撚 り　L：縄圧痕が右上り左下りの傾斜をなすもの

R：縄圧痕が左上り右下りの傾斜をなすもの

ニ. 粘土板合せ目　佐原真氏の「平瓦桶巻き作り」での分類S・Zによる

ホ. 布 合 せ 目　粘土板合せ目の分類S・Zに準ずる

ヘ. 叩き締めの円弧　A：叩き締めの円弧が一方向

B：叩き締めの円径が「ハ」字状をなすもの

第2表　歴史時代出土遺物一覧(1)

ＳＩ３２５住居跡土器一覧						
図面 図版 遺物番号	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
14－1 図版12 PH－01	土－坦、内黒	覆土上下層、床直、床中、雲筋、焼土上面	— （3.7） 6.7 0.1	丸底状の底部に断面方形の高台を付ける。	内面はヘラミガキを施す。体部下端は斜め方向のヘラケズり。	遺存度－底部と体部の一部½。色調－外面淡褐色内面黒色処理。 胎土－赤色スコリア状物質含む。
14－2 図版12 PK－01	須Ａ－坏	覆土下層	13.5 4.9 5.5 —	体部ゆるやかに内彎する。	右回転糸切り。内外面ロクロ調整。体部外面に輪積みもしくは巻き上げ痕。	遺存度－完形。焼成－良好。色調－内外面灰色。 胎土－大粒の砂粒を若干含む。内面と外面に墨書「ゆ」。
14－3 図版12 PK－02	須Ａ－坏	覆土下層、焼土上面、床直	13.4 3.8 5.5 —	底部平坦。体部下半に丸味を有す。	体部外面に輪積みもしくは巻き上げ痕。右回転糸切り。	遺存度－口縁体部½欠。焼成－良好。色調－暗灰色。胎土－白色砂粒多い。
14－4 図版12 PK－03	須Ａ－坏	覆土上下層、焼土上面	12.8 4.6 5.5 —	体部の器厚薄い。	右回転糸切り。体部外面に輪積みもしくは巻き上げ痕。	遺存度－口縁体部½欠。焼成－良好。色調－灰色。
14－5 図版12 PK－04	須Ａ－坏	覆土下層	（13.3） 4.6 5.7 —	体部ゆるやかに内彎する。底部平坦。	右回転糸切り。	遺存度－口縁体部½欠。焼成－還元焼焼成良好。色調－灰白色。胎土－軟質微密。
14－6 図版12 PK－05	須Ａ－坏	覆土下層	（10.6） 3.7 （4.7） —	器厚あり。外面は直線的に開く。	内外面ロクロ調整。	遺存度－½。焼成－良好。色調－灰色。胎土－砂粒を若干含む。
14－7 図版12 PK－06	須Ａ－高台付坦	覆土上層	— （1.8） （6.1） 0.3	断面方形の高台を付す。		遺存度－底部のみ½。焼成－不良。 色調－暗灰褐色。 胎土－やや軟質、土師質。
14－8 — PK－07	須Ｂ－坏	焼土内	（14.8） （4.7） — —	体部やや内彎する。	内外面ロクロ調整。	遺存度－口縁体部のみ½。焼成－酸化焼焼成やや不良。 色調－内外赤褐色。 胎土－赤色スコリア状物質含む。
14－9 図版12 PK－08	須Ｂ－坏	覆土上下層、焼土内	— （1.9） 5.2 —	体部は直線的に立ち上がる。	右回転糸切り。内外面ロクロ調整。	遺存度－底部のみ½。焼成－良好。 色調－褐灰色。 胎土－やや緻密。
14－10 — PK－09	須Ｂ－坏	覆土上層	— （0.7） （5.4） —			遺存度－底部のみ½。焼成－良好。色調－赤褐色。 胎土－緻密。 底部内面に墨書不明。
14－11 図版12 PK－10	須Ｂ－坏	焼土内	— （1.9） 5.4 —	底部平坦。体部やや内彎する。	右回転糸切り。	遺存度－底部のみ½。焼成－良好。色調－暗赤褐色。 胎土－赤色スコリア状物質若干含む。
14－12 図版12 PK－11	ロクロ使用土師器－坏	覆土下層、焼土上面	（11.9） 4.2 5.8 —	体部大きく内彎する。	体部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズり。	遺存度－½。焼成－酸化焼焼成。色調－橙灰色。 胎土－赤色スコリア状物質若干含む。
14－13 図版12 PK－12	須Ｂ－コップ形	覆土下層	— （5.9） 3.4 —	底部厚く、体部直線的。	右回転糸切り、内外面ロクロ調整。	遺存度－口縁部欠。 焼成－やや不良。 色調－淡い褐灰色。
14－14 図版12 PN－01	灰－坦	覆土上下層、焼土上面 焼土内、表採	（15.3） 4.5 6.5 0.9	体部大きく内彎する。断面三日月形の高台を有す。	高台接合後、ていねいに撫部までナデ。	遺存度－底部体部½。口縁一片。焼成－やや良好。 色調－素地は灰白、釉は灰緑色。

第3表　縄史時代出土遺物一覧(2)

SI325住居跡土器一覧

図面 図版 遺物番号	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
14-15 図版12 PN-02	灰-埴	覆土上 下層 焼土上 面	(13.7) 3.3 6.1 0.2	体部やや内彎する。底部厚い。断面方形の高台を付す。	付け高台。	遺存度-底部ほぼ口縁小片。 焼成-良好。 色調-素地は灰白色、釉は灰緑色。胎土-砂粒多い。
14-16 — PN-03	灰-埴	焼土上 面 焼土内 拡張表土	(16.9) (3.6) — —	体部大きく内彎する。	内外面の体部下半まで施釉（刷毛塗り）。	遺存度-口縁体部ほぼ。 焼成-良好。 色調-素地は灰色。釉は灰緑色。
14-17 — PN-04	灰-埴	P-1 覆土下層 焼土内 表採	(15.4) (3.4) — —	体部やや内彎する。	内外面の体部上半に施釉（刷毛塗り）。	遺存度-口縁部ほぼ。焼成-良好。色調-素地は灰褐色。釉は淡く青味がかった白色。
14-18 図版12 PP-01	縄文-段 皿	覆土下層	(17.8) 3.4 (7.8) 0.7	体部は直線的。広い縁を有し段は明瞭。高台はやや細長く、やや外へひらく。		遺存度-½。焼成-良好。色調-素地灰白色、釉は淡い緑色。

SI325住居跡石器一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	縁端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴 凹面 素材	凹面 布目	凹面 特徴	凸面 叩き	凸面 特徴	端面 特徴	備考
15-1 図版13 KD-01	覆土 下層 カマド内	28.8 — 24.2 2.3	—	33×32	端縁ヘラケズリ。	縄目し7本		ヘラケズリ+ナデ。	青灰色。砂粒やや多い。
15-2 図版12 KD-02	覆土 下層 P-1 覆土下層	26.2 — (35.8) 2.7	粘土板	24×20	端縁ヘラケズリ。	格子目			暗灰色。凹面に「父」のヘラ書き文字。海綿骨針含む。
15-3 図版12 KD-04	覆土 下層	— — (8.2) 2.1	—	23×17		縄目L12本			暗灰色。砂粒多い海綿骨針含む。凹面に「父」？のヘラ書き文字。

SI325住居跡鉄製品一覧表

図面 図版 遺物番号	種別	出土 位置	寸法	備考
15-4 図版13 ML-01	ノミ状鉄製品	覆土	最大長2.8cm 最大幅1.8cm 最大厚0.3cm 重量処理前5.25g	先端へむかって厚みを減少し、やや反って刃部となる。 柄部欠損。
15-5 図版13 MY-01	鉄滓	Ⅱ層-陥	最大長3.5cm 最大幅2.5cm 最大厚1.2cm 重量処理前18.1g	不定形。

第4表　歴史時代出土遺物一覧(3)

S1325住居跡自然遺物一覧

図面 図版 遺物番号	種別	出土 位置	寸法	備考
— 図版13 —　① ND-01	炭化種子	焼土内？	最大長　1.1 最大幅　0.9 厚　0.4	遺存度－小粒。 モモ（佐藤敏也氏教示）

S1326住居跡土器一覧

図面 図版 遺物番号	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
16－1 図版13 PH-02	土－坏	覆土下 層	10.8 4.2 4.4 —	体部内湾する。口唇部は薄く先細り状。	粘土紐巻き上げ。体部外面下半には横ヘラケズリ。口縁部横ナデ、内面不定方向のヘラナデ。	遺存度－完形。焼成－やや良好。色調－（底部周辺）明褐色～暗褐灰褐色。 胎土－細砂粒を多く含む。
16－2 図版13 PH-03	土－坏	床直	11.2 4.0 4.1 —	PH－02に同じ。	PH－02に同じ	遺存度－完形。焼成－良好。色調－底部外面のみ黒灰色、他は赤褐色。 胎土－細砂粒多い。
16－3 図版13 PH-04	土－坏	覆土下 層	10.9 3.9 4.0 —	体部やや厚く ほぼ直線的に立上る。	PH－02と同じ。	遺存度－完形。 焼成、色調、胎土－PH－03に同じ。
16－4 図版13 PH-05	土－坏	覆土下 層 床直	11.0 4.0 4.2 —	PH－03に同じ。	PH－03に同じ。	遺存度－ほぼ完形。 焼成、色調、胎土－PH－03に同じ。
16－5 図版13 PH-06	土－坏	A期西南隅 カマド 覆土	〔11.4〕 4.7 4.3 —	PH－02～05に比べやや大ぶり。	粘土紐巻き上げもしくは輪積み。	遺存度－体部のみ欠。 焼成－良好。 色調－暗赤褐色。 胎土－細砂粒多い。
16－6 図版13 PH-07	土－坏	覆土上 層 床直	〔10.9〕 4.1 4.4 —	体部やや内湾する。	底部外面もヘラケリ、体部下端のみ横ヘラケリ。	遺存度－体部のみ欠。 焼成－良好。色調－橙褐色。 胎土－細砂粒多い。 体部大きく歪む。
16－7 図版13 PH-08	土－埴 （内黒）	覆土下 層	〔13.3〕 6.0 7.0 0.7	体部内湾する。外へ開くやや高い高台を付ける。	底部より粘土紐を巻き上げ口縁端のみ一部を輪積み、体部大半横ヘラケズリ。	遺存度－口縁欠。 焼成－やや良好。色調－外面橙褐色。胎土－大粒の砂粒多い。内黒、内面底部は不定方向、体部は横ヘラミガキ。
16－8 図版13 PH-09	土－甕	覆土上 下層 床直 表土	〔18.8〕 15.0 〔7.5〕 —	大きく厚い底部からゆるやかに立上り、口縁部は若干外反する。最大径は口縁にあり。	口辺内外面は横ナデ。体部外面は縦もしくは斜めヘラケリ、指頭厚痕全体に残る。	遺存度－½。焼成－良好。色調－赤褐色黒褐内外面に認められる。 胎土－砂粒多い。
16－9 図版13 PK-13	土師皿－坏	覆土上 下層	〔11.0〕 3.8 〔4.6〕 —	底部肥厚。口縁部やや外反。底部厚く突出し円柱状を呈する。体部内湾。	口縁外面に横撫みもしくは巻き上げ痕1条。	遺存度－½。焼成－半還元焼やや不良。色調－灰色若干、赤色味帯びる。胎土－やや軟質土師質土器ととらえた方が適当か。
16-10 図版13 PK-14	須B－坏	覆土下 層 床直	11.4 3.8 4.8 —	体部直線的に立上る。口唇部肥厚する。	石回転糸切り、内外面ロクロ調整。	遺存度－口縁体部欠。 焼成－酸化焼やや不良。 色調－赤褐色。底部から口縁にかけ大きく黒斑。胎土－大粒の砂粒多い。
16-11 図版13 PK-15	須B－坏	A期西南隅 カマド 覆土	10.2 3.2 4.8 —	体部直線的。	石回転糸切り、内外面ロクロ調整。	遺存度－完形。焼成－良好。色調－暗褐色～赤褐色。 胎土－砂粒若干入る。

第5表　歴史時代出土遺物一覧(4)

SI326住居跡土器一覧

図面 図版 遺物番号	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
16-12 図版13 PL-01	土師質-坏	覆土下層	10.7 3.4 5.3 —	体部直線的。底部や厚く底部と体部の境は鋭角的（外面）漸移的（内面）に移行。	右回転糸切り。	遺存度-完形。焼成-酸化焼やや不良。色調-灰色・赤褐色味金体に帯びる。胎土-大粒の砂粒少し入る。
16-13 図版13 PL-02	土師質-坏	覆土下層	10.6 3.8 4.7 —	体部内彎し口縁部やや外反する。	右回転糸切り。	遺存度-完形。焼成-良好。色調-赤褐色。胎土-砂粒少ない。
16-14 図版14 PL-03	土師質-坏	A期南西カマド覆土 南西カマド床直	(13.5) 5.6 (5.1) —	体部大きく内彎する。	内面底部に同心円状の調整痕。右回転糸切り。	遺存度-½。焼成-良好。色調-赤褐色。内外面に黒斑あり。胎土-赤色スコリア状物質多い。
16-15 図版13 PL-04	土師質-高台付坏	覆土下層	(11.9) 6.2 6.5 0.7	極めて厚い底部にほぼ直線的な体部を有する。断面三角形状の高台付く。	内外面ロクロ調整。	遺存度-口縁体部½欠。焼成-半還元焔。色調-赤味を帯びた灰色。胎土-砂粒なるびに赤色スコリア状物質多い。
16-16 図版14 PL-05	土師質-高台付坏	覆土下層、A期南西カマド覆土	(16.6) 6.4 (6.6) 0.7	部厚い体部が大きく開く。ほぼ直線的。断面方形の高台が強く外へはりだす。厚手。	内面ロクロ調整により底部極端に薄くなる。	遺存度-口縁体部½欠。焼成-良好。色調-赤褐色。胎土-砂粒少ない。
16-17 図版14 PL-06	土師質-高台付坏	覆土下層、南西カマド覆土 床直周構	(14.4) 4.9 (6.6) 0.8	底部大きい。体部内彎する。断面方形に近い高台ほぼ垂直にとりつく。薄手。	内外面ロクロ調整。	遺存度-½。焼成-良好。色調-赤褐色。胎土-スコリア状物質の細粒多い。 体部大きく重ね。
16-18 図版14 PL-07	土師質-高台付坏	南東土 覆土	— (3.0) (7.2) 1.2	まっすぐはりだす、やや高い高台。	内外面ロクロ調整。	遺存度-底部のみ。焼成-良好。色調-橙褐色。 胎土-砂粒少ない。 スス状黒色付着物内外面にあり。
16-19 図版14 PL-08	土師質-高台付坏	覆土下層 A期南西カマド覆土南東土上	— (6.5) (6.6) 0.5	体部はほぼ直線的に開く大ぶりの坏。短かく外へはりだす高台を付ける。厚手。	ロクロ目跡著。	遺存度-½。焼成-良好。色調-橙褐色。胎土-黒色鉱物多い。

SI326住居跡男瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴 凹面 素材	布目	特徴	凸面 叩き	特徴	端面 特徴	備考
17-1 図版14 KC-01	カマド構築土	(9.3) (17.5) (28.3) 1.5	粘土紐	21×20 狭端部に重ね目		縄目L 12本	板状工具による回転ナデ。	ヘラケズリ。	広端部欠。焼成良好。暗灰白色。砂粒多い。凹面狭端を下にして「成」のヘラ書き。 →後広端を下にして「寺」の朱墨書。

SI326住居跡女瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴 凹面 素材	布目	特徴	凸面 叩き	特徴	端面 特徴	備考
17-2 図版14 KD-03	床直	— — (9.2) 2.0	—	22×23		縄目L 10本			焼成良好。青灰色。凸面に「一」のヘラ書き。

第6表　歴史時代出土遺物一覧(5)

SI326住居跡女瓦一覧									
図面 図版 遺物番号	出土 位置	残端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴						備考
			回面		凸面		端面		
			素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
17-3 図版15 KD-05	旧カマド 覆土	— 29.1 (21.9) 2.3	—	32×32	端縁わずかにヘラケズリ。	縄目L 12本	広端縁のみ斜の叩きで仕上げ。	ナデ。	明灰色、細砂粒多い。
17-4 図版14 KD-07	床直	— — 16.5 2.3	—	35×31		縄目L 10本			凹面図示の輪郭良く摩耗脱右の端面ヘラケズリ+摩耗。
18-1 図版14 KD-06	カマド 構築土	(25.5) 30.1 40.8 2.4	粘土紐	19×24	粘土紐接合部を指及びヘッ先で消す。端面ヘラケズリ。	縄目L 9本	端縁ヘラケズリ。	ヘラケズリ。	ほぼ完形（重量5400g）。青灰色凹面に「寺」字の朱墨書。
18-2 図版15 KD-08	旧カマド 構築土 表土	23.5 — (21.9) 2.3	粘土紐	42×39	端縁ヘラケズリ。	縄目L 13本	端縁ヘラケズリ、端部叩き横方向。	ヘラケズリ+ナデ。	暗灰色、細砂粒多い。

SI326住居跡鉄製品一覧				
図面 図版 遺物番号	種別	出土 位置	寸法	備考
18-3 図版15 MH-01	鉄製品 刀子	床直	最大長　14.4cm 最大幅　1.9cm 最大厚　0.4cm 重量処理前23g	刃部長7.9、茎長6.5、刃部巾1.6、茎部0.8。 厚み（峰部）0.4、（茎部）0.6。 茎部、刃部とも先端部を欠く。

SI327住居跡土器一覧							
図面 図版 遺物番号	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考	
19-1 図版15 PH-10	土師 椀	P-2 覆土	(18.5) (5.7) — —	口縁弱いくの字状、器壁はやや厚い。最大径は胴上半に為り。	口縁内外ヨコナデ、外面胴上半ヨコヘラケズり、内面胴上半ヨコヘラナデ。	遺存度・口縁部の3/4。 焼成・良好。 色調・暗褐色。 胎土・砂粒少ない。	
19-2 図版15 PK-16	須A・坏	覆土下層	(13.0) 4.7 (5.5) —	体部ゆるやかに内弯する。	体部外面上部に輪積みもしくは巻き上げ痕1条。	遺存度・3/4。焼成・良好。 色調・灰色。 胎土・砂粒少し入る。	
19-3 図版15 PK-17	須A・高台付坏	覆土上層	— (2.7) (5.9) 0.5	内面体部から底部にかけ漸移的に移行。短かく外へはりだす高台を付す。	内外面ロクロ調整。	遺存度・底部の3/4。焼成・半還元か。色調・やや赤味がかった灰色。胎土・赤色スコリア状物質多い。軟質。土師質土器とした方が適当か。	
19-4 図版15 PK-18	須B・坏	覆土上層 下層 北カマド 覆土	12.2 3.9 5.0 —	体部やや内弯する。器壁やや厚い。	外面口縁部に輪積みもしくは巻き上げ痕1条あり。右回転糸切り。	遺存度・3/4。焼成・良好。 色調・赤褐色。胎土・赤色スコリア状物質含む。	
19-5 図版15 PK-19	須B・坏	北カマド 覆土	(11.4) 4.2 4.8 —	体部やや内弯する。	内面口縁に輪積みもしくは巻き上げ痕1条、右回転糸切り。	遺存度・1/4。焼成・良好。 色調・褐褐色。 胎土・砂粒少し入る。	

第7表　歴史時代出土遺物一覧(6)

SI327住居跡土器一覧

図面 図版 遺物番号	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
19-6 図版15 PK-20	須B-坏	覆土下層 東南カマド覆土	(12.2) 4.1 4.8 —	体部下半丸味を有すも上半は直線的。	右回転糸切り。	遺存度-1/2。焼成-良好。 色調-橙褐色。 胎土-砂粒多い、赤色スコリア状物質少し入る。
19-7 — PK-21	須B-坏	覆土下層	(11.8) 4.2 (6.0) —	体部直線的。器壁厚い。	内外面ロクロ調整。	遺存度-1/4。焼成-良好。 色調-橙褐色。 胎土-細砂粒少し入る。 全体に厚みあり。
19-8 — PK-22	須B-坏	覆土上層 北カマド覆土	(13.0) 4.8 4.7 —	体部上半内弯する。大ぶりの坏。	右回転糸切り。	遺存度-1/4。焼成-良好。 色調-赤褐色。胎土-細砂多い。火熱を受けもろくなっている。
19-9 図版15 PK-23	須B-坏	覆土下層 入口構築土内覆土一括	(14.2) 4.5 (6.2) —	体部下半丸味を帯びる。	ロクロ目顕著。	遺存度-1/4底部なし。 焼成-良好。色調-暗赤褐色。 胎土-軟質緻密。
19-10 — PK-24	須B-高台付坏	覆土上層	— (1.7) (7.7) 0.9	先端り状で外へはり出す。高台を付す。	底部外面に糸切り痕を残す。	遺存度-底部のみ。焼成-良好。色調-明るい赤褐色。 胎土-赤色スコリア状物質やや多い。
19-11 図版15 PN-05	灰-瓶	北カマド覆土	— (2.2) 6.8 0.5	内面底部はほぼ平坦でゆるやかに体部へ移行。低い高台を付す。	内面底部に重ね焼痕有す。外面高台の接合痕よく残る。	遺存度-底部のみ。焼成-良好。色調-素地灰白色、釉は淡い青緑色。胎土-砂粒若干入る。
19-12 図版15 PN-06	灰-瓶	覆土上層	— (2.0) (7.2) 0.3	内面底部は平坦でない。低い三日月形の高台。	高台端はよくナデる。接合痕よく残る。	遺存度-底部1/3。焼成-良好。色調-素地黒い灰色。釉は淡い灰緑色。胎土-白色砂粒やや多い。

SI327住居跡平瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	上弦幅 下弦幅 厚さ	内区		外区				脇区		文様深さ	全長	備考
					上		下						
			厚さ	文様	厚さ	文様	厚さ	文様	幅	文様			
20-1 図版15 KB-01	覆構内 東南カマド カマド 構築瓦	— — — 7.0	4.15	H K	1.25	a	1.6	a	—	—	0.45	(215)	顆、曲線顆(G2a)。暗灰色。砂粒多い。布目21×19、叩き縄目L、9本。
20-2 図版15 KB-02	東南カマド カマド 構築瓦	(6.2) (7.8) — (4.5)	(4.5)	H K	0.7	a	—	—	0.7	a	0.2	(12.2)	顆、曲線顆(G1b)。赤褐色。白色砂粒少量入る。布目26×24、叩き縄目L、7本。端面ヘラケズリ。

SI327住居跡男瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴						備考
			凹面			凸面		端面	
			素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
19-13 図版16 KC-02	覆土下層	— (18.6) (21.4) 1.8	粘土紐	24×19		—	タテ方向のナデ。	ヘラケズり。	暗灰色、砂粒多い。

第8表　歴史時代出土遺物一覧(7)

SI327住居跡女瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	法量 広 全 厚さ	成・整形の特徴 凹面 高材	凹面 布目	凹面 特徴	凸面 叩き	凸面 特徴	端面 特徴	備考
19-14 図版16 KD-09	竈南カマド 覆土	— — (8.2) 1.9	—	16×10		格子目		ヘラケズリ＋ナデ。	広瓶部片、暗青灰色。海綿骨針少し入る。「大」の押型文字。
20-3 図版16 KD-10	覆土下層 東南カマド 構築土崩 壊土	24.8 — (32.0) 2.6	粗土板	18×19		格子目		ヘラケズリ。	与暗灰褐色、海綿骨針を含む。
20-4 図版16 KD-11	覆土下 層	(17.7) — (20.2) 2.0	—	16×22	縦ヘラケズリ。	縄目L 8本	不整形	ヘラケズリ。	灰与暗灰色、砂粒多い凹面「蓋」のヘラ書き文字。

SI327住居跡埴一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	長辺 短辺 厚さ	素材	成・整形の特徴 上面	成・整形の特徴 下面	成・整形の特徴 側面	備考
20-5 — KH-01	東南カマド 覆土	17.8 (12.5) 6.5	—	ヘラケズリ。	ヘラケズリ。	ヘラケズリ。	暗褐灰色、大粒の砂粒多い。

SI327住居跡鉄製品

図面 図版 遺物番号	種別	出土 位置	寸法	備考
19-15 図版15 MX-01	不明鉄片	床直	最大長 1.7 最大幅 1.5 最大厚 0.6 重量処理前2g	図上部が丸味を有し厚く、下部へむかい薄くなる。
19-16 図版15 MZ-01	不明鉄製品	床直	最大長 4.9 最大幅 2.6 最大厚 0.4 重量処理前17.95g	板状の鉄製品、図上部丸味を持つ。断面は薄いかまぼこ形。図下半部欠損。
19-17 図版15 MY-02	鉄滓	覆土 上層	最大長 2.8 最大幅 2.0 最大厚 1.3 重量処理前7.5g	不定形。

SI327住居跡自然遺物一覧

図面 図版 遺物番号	種別	出土 位置	寸法	備考
— 図版16 — ① ND-01	炭化種子	覆土下 層	最大長 1.8 最大幅 1.6 最大厚 0.4	通存況－与例。 モモ（佐藤敏也氏教示）

第9表　歴史時代出土遺物一覧(8)

S1328住居跡土器一覧

図面 図版 遺物番号	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
21－1 図版17 PH－11	土－甕	覆土下層	— （1.9） 7.1 —	厚く突出した底部片。	体部下半ヘラケズリ。	遺存度－底部のみ。 焼成－良好。色調－暗赤褐色。 胎土－細砂多くもろい。 小形のカメか。
21－2 図版17 PH－12	土－高台付埦	覆土上層	— （3.8） 〔6.8〕 0.9	強く外反した高台を付す。底部片。	高台貼付部はよくナデる。	遺存度－底部のみ。焼成－やや不良。色調－暗赤褐色。 胎土－細砂と赤色スコリア状物質多く弱い。
21－3 図版17 PK－25	須A－壺	覆土上層	— （3.4） 〔8.9〕 0.4	断面方形の高台付く。底面は平板。	全体に良く仕上げ調整がなされる。	遺存度－底部¼。焼成－良好。色調－灰色。暗灰色の自然釉かかる。胎土－砂粒少し入る。
21－4 図版17 PK－26	須A－壺	覆土下層	— （3.2） 12.9 —	外面底部中央が一度凹み巾広い高台状になる。	体部下半ヨコヘラケズリ。	遺存度－底部のみ完形。 焼成－良好。色調－暗灰色。 胎土－海綿骨針を含む。
21－5 図版17 PK－27	須A－杯	カマド覆土	〔13.5〕 5.1 5.8 —	体部やや内彎する。やや大ぶりの杯。	外面体部下半から底部にかけ丁寧ヘラ切痕あり。糸切痕等不明瞭。 内面体部に横撫みもしくは巻き上げ痕1条。	遺存度－口縁体部1/2欠。焼成－非還元焔。色調－体部上半灰白色。下半は橙灰色。胎土－砂粒少なく緻密。内面底部にススと状黒色付着物。
21－6 —	須A－埦	床直 カマド覆土 カマド構築土	— （2.3） 6.5 0.5	断面三角形の高台を付す。	外面底部中央に糸切痕を残す。	遺存度－底部のみ¼。焼成－良好。色調－灰白色。 胎土－白色細砂粒多い。
21－7 図版17 PK－29	須A－埦	覆土中層	— （2.3） 〔7.2〕 0.5	直立する凹面方形の高台を付す。	外面底部中央に糸切痕、内外面に高台接合痕を残す。	遺存度－底部のみ1/2。焼成－良好。色調－灰色。胎土－緻密。
21－8 図版17 PK－30	須B－杯	床直カマド覆土 カマド構築土	〔15.5〕 （3.5） — —	体部ほぼ直線的、口縁部肥厚する。	内外面ロクロ調整。	遺存度－口縁部1/2。焼成－良好。色調－赤褐色～暗赤褐色。 胎土－細砂少量含む。
21－9 図版17 PN－07	灰－埦	覆土中下層 掘り形埋め土床直	〔16.6〕 4.6 6.9 0.6	体部やや内彎し、広い底部へとゆるやかに移行凹面三日月形のやや高い高台を付す。	外面の口縁部と体部下半はナデ。体部中位にはヘラケズリ痕残る。 施釉は刷毛塗り。	遺存度－口縁体部1/2欠、底部一部欠。焼成－底部から体部にかけやや歪む。色調－黒地灰白色。釉は淡い青緑色。胎土－緻密。重ね焼き痕残る。
21－10 図版17 PN－08	灰－埦	覆土上層	— （2.7） 5.6 0.5	断面三日月形の低い高台を付す。底部厚い。	内面底部に重ね焼き痕残る。	遺存度－底部のみ。焼成－良好。色調－黒地灰白色。釉は淡い灰緑色。胎土－緻密。

S1328住居跡男瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴							備考
			凹面			凸面		端面		
			素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
21－11 図版17 KC－03	カマド構築土	11.3 16.5 24.3 1.8	粘土板	35×36 重ね目あり		—	板状工具による回転ナデ。	広端面ヘラケズリ狭端面ナデ。		5/8残存。細砂粒多く含む。

第１０表　歴史時代出土遺物一覧(9)

ＳＩ３２８住居跡女瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴 凹面 素材	布目	特徴	凸面 叩き	特徴	端面 特徴	備考
21-12 図版17 KD-12	カマド 覆土 カマド 構築土	— 30.5 (15.2) 2.4	粘土紐	18×19	不整形	縄目Ｌ ９本		ナデ＋ヘラケズリ。	灰色。砂粒少量入る。

ＳＩ３２８住居跡土製品一覧

図面 図版 遺物番号	種別	出土 位置	寸法	備考
21-13 図版17 TH-01	土錘	覆土下 層	最大長　(2.7) cm 最大幅　1.2 cm 最大厚　1.1 cm 重量処理前　2.9ｇ	中央部がふくらむ。孔径0.4孔は断面不定円形。孔内面に細い3～4条の縦方向の明瞭なる擦痕が認められる。両端欠く。

ＳＩ３２８住居跡鉄製品一覧

図面 図版 遺物番号	種別	出土 位置	寸法	備考
21-14 図版17 MZ-02	不明	覆土上 層	最大長　5.1 cm 最大幅　2.8 cm 最大厚　0.5 cm 重量処理前 20.65ｇ	茎部は断面方形に近づく巾広部の断面は薄いかまぼこ形、ＭＺ０１に似る。 両端欠。

ＳＫ８２５土坑土器一覧

図面 図版 遺物番号	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
22-1 図版18 PK-31	須Ａ－坏	覆土	(12.9) 4.1 (6.2) —	体部下半内彎する。底面は平坦。	内外面ロクロ調整。	遺存度－1/5。焼成－不良。 色調－暗褐灰褐色。 胎土－細砂粒多い。 全体に歪む。
22-2 — PK-32	須Ａ－坏	覆土	(13.3) 4.8 5.5 —	口縁部やや外反内面体部から底部へゆるやかに移行。	右回転糸切り。	遺存度－口縁体部写欠。 焼成－不良。色調－暗灰褐色。 （黄褐色粒帯びる） 胎土－海綿骨針多い。

ＳＫ８２５土坑女瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴 凹面 素材	布目	特徴	凸面 叩き	特徴	端面 特徴	備考
22-3 図版18 KD-14	フク土	— — (21.5) 1.9	—	20×19		縄目Ｌ １０本		ナデ＋ヘラケズリ。	暗灰色。細砂粒多い。面面に「中」の墨書文字。

第１１表　歴史時代出土遺物一覧00

ＳＫ８２５土坑鉄製品一覧

図面 図版 遺物番号	種別	出土 位置	寸法	備考
２２－４ 図版１８ MH－02	鉄製刀子	覆土	最大長　１３.５cm 最大巾　１.１cm 最大厚　０.４cm 重量処理前１４.３g	刃部長６.４、茎長７.１。 刃部最大幅１.１、（茎部）０.３。 厚み（峰部）０.３５、茎部最大幅０.９５。 刃部茎部とも先端欠損。

ＳＸ３７　火葬墓土器一覧

図面 図版 遺物番号	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
２２－５ 図版１８ PH－13	土－師	骨蔵器	２３.０ — ３.７ —	口縁ゆるやかに外反。 胴部上半に最大径。	口縁内外ナデ、胴上半ヨコヘラケズリ、下半斜もしくはタテヘラケズリ。	遺存度－口縁部へ胴上半部と胴部の一部ならびに底部。焼成－良好。色調－赤褐色。 胎土－細砂粒が多い。

ＳＸ３７　火葬墓人骨一覧

図面 図版 遺物番号	種別	出土 位置	寸法	備考
— 図版１８ －① BA－01	人骨	骨蔵容 内	幅　０.６ 長　１.９ 厚　０.２	管状骨片の外殻部片。やや褐色味帯びた灰白色。
— 図版１８ －② BA－02	人骨	骨蔵器 内	幅　０.６ 長　１.１ 厚　０.２	同　上。

遺構外土器一覧

図面 図版 遺物番号	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
２２－６ 図版１８ PK－33	土師質－坏	表採	（１０.８） ３.４ （　６.０） —	内面体部から底部へかけゆるやかに移行。外面口縁部を強くおさえ弱い稜線みれる。	内外面ロクロ調整。	遺存度－½。焼成－還元焼。色調－明灰色。胎土－大粒の砂粒多い。

遺構外字瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	上弦弧幅 下弦弧幅 弧頂 厚さ	内区 厚さ	内区 文様	外区 上 厚さ	外区 上 文様	外区 下 厚さ	外区 下 文様	脇区 幅	脇区 文様	文様 深さ	全長	備考
２２－７ 図版１８ KB－03	表土	— — — —	２.４	KK	１.１	b	—	—	—	—	０.２	（８.７）	顎部粘土接合部より剥離し、為に瓦当下半欠す。暗灰色。白色細砂粒多い。素材粘土厚。布目３１×１９。凹面広縄へラケズリ。

第１２表　歴史時代出土遺物一覧(1)

遺構外平瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	上弦幅 下弦幅 幅 厚さ	内区 厚さ	内区 文様	外区 上 厚さ	外区 上 文様	外区 下 厚さ	外区 下 文様	幅	文様	文様深さ	全長	備考
22-8 図版18 KB-04	撹乱	— — — 5.2	3.2	H	0.8	d	1.2	d	1.0	d	—	(11.1)	段顆（F2C）。 暗赤褐色。砂粒少量入る。 布目21×19。凹凸面広端部へラケズリ。叩き縄目L9本。端面ナデ。

遺構外男瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴 凹面 素材	凹面 布目	凹面 特徴	凸面 叩き	凸面 特徴	端面 特徴	備考
22-9 図版18 KC-04	撹乱	— — (3.8) 1.7	—	21×21		—			暗橙褐色。砂粒多い。 凸面に「父」（?）の押印。

遺構外玄瓦一覧

図面 図版 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴 凹面 素材	凹面 布目	凹面 特徴	凸面 叩き	凸面 特徴	端面 特徴	備考
22-10 図版18 KD-13	表採	— — (4.9) 1.8	—	26×25		縄目L 10本			凹面に「上」の模骨文字。

3. 小　結

出土土器について

本調査区出土の土器群について、その編年的位置を検討しておきたい。器形が復元され、纏まった資料が得られたのは4軒の住居跡のみであるので、これを対象とする。

住居内に於ける出土位置・分布状況・接合状況をみて、一括資料の検討を行う。ＳＩ325住居跡に於ては、カマド火床上のものと覆土のものとに区分され、各々に接合例があることから各々一括資料としてとらえられる。但し、カマド火床上のものには掲載し得た土器資料は無い。ＳＩ326・327住居跡に於いては、カマドや炉などの変遷が認められるのにもかかわらず、覆土上層のものまであわせて接合例があることから、一応一群の資料としてとらえておく。ＳＩ328住居跡では、多量に得られた遺物の大半は覆土上・中層のもので、これらには接合例が少ないのに対し、カマド周辺及び床周辺出土の一群は接合例も多く、垂直分布をみても不整合が認められるので、別の一群としてとらえることができる。

4軒の住居跡出土の土器類としては、須恵器Ａ（還元焔焼成）、須恵器Ｂ（酸化焔焼成）、土師質土器、土師器、加えて灰釉陶器と緑釉陶器がある。ここでは主に供膳形態の坏・埦についてみていくこととする。

まず、須恵器坏Ａ・Ｂであるが、法量比が得られる個体について、南多摩窯址群出土須恵器編年（服部1983）と北武蔵諸窯址出土須恵器編年（高橋・宮1983）に照らすと、須恵器坏Ａの6個体は全て南多摩Ｇ５窯式期に比定し得る。そして、酸化焔焼成須恵器の伴出から、同新期の様相を示すものと理解される。須恵器坏Ｂは南多摩Ｇ14窯式に比定し得るＳＩ327住居跡出土の3個体と、ＳＩ326住居跡出土の小形のもの2個体（図16－10と図16－11）に区分できる。後者は、共に薄手で酸化焔焼成され、Ｇ14窯式に比べ①小ぶりであること、②口径：底径比が$1/4$～$1/2.5$を示して底径の比率が大きいこと、③体部が直線的に立上ること、などの相違点がある。北武蔵のＧ14窯式伴行の栗谷ツ１号窯（ＫＩ）出土の浅い坏と比較すると①口径：底径が$1/4$～$1/2.5$を示すこと、と②体部が直線的に立上ることの2点は共通するが、法量をみると、栗谷ツＩ号窯出土のものが口縁径12～13cmとＧ14窯式にほぼ等しいのに対し、ＳＩ326住居跡出土の2個体は、口縁径10.2と11.4とより小形である点が異なる。こうした小形の酸化焔焼成須恵器坏は、生産地に於ては未検出の様であるが、消費地に於ては、例えば武蔵国府Ｍ39－ＳＩ36住居跡（山口1980）において、小ぶりの土師質土器坏と伴出しているのをはじめ、武蔵国分寺においても小ぶりの土師質土器坏に伴出する例（未報告）がある。大ぶりの土師質土器坏がＧ５窯式期からＧ14窯式期の須恵器と伴出するのに対し、小ぶりの土師質土器坏には初期において上述の小形の酸化焔焼成須恵器坏が伴出するが、次第に須恵器が伴わなくなり、土師質土器と土師器が主体となる。（福田1984）そこで、小形の酸化焔焼成須恵器は、少くとも消費地においてはＧ14窯式に後続するものとしてとらえることが可能となる。[1]

土師質土器は坏・高台付坏・高台付埦など9個体があるが、いづれもＳＩ326住居跡出土のものである。土師質土器坏はその形態変化をみると第１段階：底径の大きい大ぶりの坏→第２段階：大ぶりの坏→第３段階：小ぶりの坏（皿型土器出現期）→第４段階：さらに小ぶりの坏（皿型土器主体期）となり、高台付坏や埦は第３段階に盛行する。ＳＩ326住居跡出土の土師質土器群はまさに、第３段階に相当するものである。

土師器坏は小形のもので、ＳＩ326住居跡より６個体とまとまって出土しており、法量・形態・焼成・整形技法等相似している。埦は２個体あり、共に内面黒色処理するものである。ＳＩ326住居跡出土の図16－７が口縁から体部外面に粘土紐痕跡を良く残し、外へ開くやや高い高台を付すのに対し、ＳＩ326住居跡出土の図14－１は残存する体部下半をみると、横及び斜めのヘラケズリを行って器面を平滑に仕上げており、底部は丸底状で、低く断面方形の高台を削り出し(?)ているなど相違点が多い。前者はＧ14窯式期以降の前出の土師器小形坏などと伴出するが、後者は、武蔵国府例（ことぶきマンション地区ＳＩ３）（山口1980）にみられるごとく、Ｇ５窯式期に伴出するもので、時間的隔たりを有する。

なお、土師器甕は３個体あるが、ＳＩ328住居跡出土の図21－１は底部厚い小形甕の底部片・ＳＩ327住居跡出土の図19－１は口縁弱く「く」の字状で器壁厚い大形甕の口縁片、SI326住居跡出土の図16－８は口縁径大きい小形甕で、底部に回転糸切痕を有するものである。「コ」字口縁を呈する武蔵型甕が消失後の煮沸形態の様相を示している。

以上を総合して、須恵器Ａ・Ｂと土師質土器並びに土師器について供膳形態の坏・埦の組成を住居跡毎にみると、第14表に示す様に、３群に大別され、１群→２群→３群の順に変遷するものととらえることができる。

第１３表　住居跡出土土器群の組成

群	器種／住居跡	須恵器Ａ（還元焼成）						須恵器Ｂ（酸化焼成）					土師質土器			
		坏		高台付	蓋	鉢	甕類	坏			高台付埦	コップ形	坏		高台付坏	高台付埦
		Ｇ５	その他					Ｇ14	小形	その他			半還元焼	酸化焼		
1群	SI325	④	① △	①			△			④ △		①				△
	SI328	①[1]	△	②[1]		△	②[1] △			①[1] △				△		
2群	SI327	①	△	①			△	③		③ △	①			△		△
3群	SI326		△		△				②	△			①	⑧ △	②	③ △

○は図示資料、数字は個体数を示す。△は小破片資料（図示外）の存在を示す。
但し、須恵器坏Ａ・Ｂと土師質土器坏においては右端欄に、土師質高台付坏・埦においては埦の欄に一括した。

第１群　Ｇ５窯式期の還元焔焼成須恵器並びに酸化焔焼成須恵器を主体とする。

第２群　第１群土器を残すも、後続するＧ14窯式期の酸化焔焼成須恵器を主体とする。他例よりみて、大ぶりの土師質土器坏を欠いているものと考えられる。

第３群　土師質土器（小ぶりの坏、高台付坏、高台付埦）を主体とし、Ｇ14窯式期に後続すると考えられる小形の酸化焔焼成須恵器を加える。

これを南接の第107次調査区における５軒の住居跡と１基の土坑出土の土器群と対比する。第107次調査区においては、１群（ＳＩ229）→２群（ＳＩ232、231、230）→３群（ＳＩ228、ＳＫ546）の変遷を把えたが、今次第１群は107次１群にほぼ併行し、今次第２群は107次２群及び３群のＳＩ228に併行し、今次第３群は107次３群のＳＫ546にほぼ併行する。

なお、ＳＩ328住居跡出土の土器群は、カマド周辺等下層遺物と上・中層遺物とに区分し得ると既述したが、供膳形態土器５個体の内、下層のものは３個体で、須恵器Ａ坏（Ｇ５窯式）と須恵器Ａ埦と須恵器Ｂ坏の組み合わせとなり、一応第１群に含めて考えられる。上層のものは２個体のみで、その所属は明らかにし得ない。さらにＳＫ825土坑出土の須恵器坏２個体をみるといづれもＧ５窯式期の特徴を有しているので、第１群に併行するものと理解される。

さて、これら土器群の実年代としては、直接に示す遺物の出土は得られなかったので、南多摩及び北武蔵の窯址出土須恵器編年に準拠して与えることとしたい。生産地の編年に拠れば、Ｇ５窯式期は古・新あわせて10世紀中葉から後半にかけて、Ｇ14窯式は10世紀末から11世紀初頭頃とされている。従って、本地区出土の第１群土器は、酸化焔焼成のものでＧ５窯式期を主とすることから、10世紀後半代、第２群は、Ｇ14窯式期とのものを主とすることから、10世紀末から11世紀初頭頃、第３群は、後続する11世紀前半代など各々実年代を推測することができる。但し、上述の窯址出土須恵器編年の内、平安時代後期においては、灰釉陶器との共伴例な

土師器							灰釉陶器埦	緑釉陶器		備考
坏	高台付埦	内黒埦	甕 小形	甕 大形	ロクロ使用 坏			埦	段皿	
△		①	△		①		④ △	△	①	
	①		① △				②[1] △			右上の小数字は下層遺物（内数）
			△	①			② △			
⑥ △		①	① △	△			△			

どをもって与えられた実年代であり、将来変更される可能性が大きいが、須恵器生産の減退以後、平安時代後半～末期の土器群においては、主体となる土師質土器を軸とした編年の確立が望まれ、今次調査資料は些かの好資料を提供するものと考える。

終わりに、ＳＩ325住居跡出土のロクロ使用の土師器と施釉陶器について記すこととする。

図14－12はＳＩ325住居跡出土の土師器坏で、ロクロ成形により、体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施され、底部に回転糸切痕が残される。橙灰色を呈し、口辺部薄手で、口径と底径の比は与に近い。こうしたロクロ使用の土師器は、国分寺をはじめとする南武蔵地域では客体的な存在で、千葉県下に於て、８世紀後半代から出現するもので、図14－12に類似するものは、下総国分遺跡第２地点５号住居址出土土器（９世紀第３四半紀～第４四半紀）(宮内1983）、我孫子市新木東台遺跡Ⅴ期の土器群（９世紀第４四半世紀）（石田1987）、君津郡袖ケ浦町永吉台遺跡群－西寺原地区－Ⅱ期の土器群（10世紀第２四半期－豊巻1987、但し、９世紀末期～10世紀第１四半期とする意見もある。－笹生1987b）、君津郡袖ケ浦町遠寺原遺跡Ⅴ期の土器群（９世紀第４四半期～10世紀第２四半期）（笹生1987a）などがみられる。１個体の土器のみをとって、その出自や時期を明らかにすることは、難かしいが、大きくとらえると、図14－12のロクロ使用の土師器は千葉県下にて９世紀後半から10世紀前半代にかけて生産されたものが、国分寺へ移入され、上述の様に10世紀後半代とした第１群土器に伴って廃棄されたものと考えられる。その時間差は、そのまま受け入れた方が良いか、あるいは彼我の実年代推定を訂正すべきかは、現段階では決し得ない。今後はこの種の土器に注意していきたい。又、実地に比較・検討する機会を持って、細部について考究していかなければならない。

次に施釉陶器についてみると、第１群と第２群に伴出する９個体（内１個体のみ緑釉陶器）がある。猿投窯における編年表（楢崎1983）と猿投窯・美濃窯における編年表（前川1984）に照らすと、いづれも黒笹90号窯式期前後から、東山72号窯式期前後に比定することができる。第１群土器には古段階のものが、第２群土器には新段階のものが多い様である。実年代については、末期に関する最新の前川試案（前川1984）に拠ると、黒笹90号窯式が９世紀後半、折戸53号窯式が10世紀前半、東山72号窯式が10世紀中葉から11世紀初頭とされている。上述の本調査区出土の土器群の実年代比定と比べると、時間の隔たりはみられる個所があるが、消費地たる本跡出土土器群より得られた年代の方が古くなることはなく、この点大きな矛盾はない。

検出遺構について①（平安時代前期のＳＸ37火葬墓）

ＳＸ37火葬墓の骨蔵器に用いられた土師器甕はいわゆる「武蔵型」のものである。器壁が薄く、胴上部外面を横にヘラ削りし、下半部は縦にヘラ削りする。口縁は「く」の字状と「コ」の字状の中間形態を示し、最大径が胴上半にある長胴の甕である。以上の諸特徴から、国府・国分寺地域の土器編年に照らすと、平安時代前期：９世紀代の年代が与えられる。従って、本調査区で検出された遺構群の内、平安時代前期に属すると思われるのは、この火葬墓のみということになる。

ところで、こうした火葬墓は、次表に示す様に、本例で6例目を数える。奈良時代後半（国分寺創建期）から平安時代前期にかかるものと推測される。火葬の葬法は、700年（文武天皇4年）の僧道昭にはじまり、持統（702）、文武（707）などの天皇の葬法に導入されたことを契機として、次第に貴族や官人層にひろがっていたものと考えられている。武蔵国分寺検出の火葬墓群の被葬者としては、その立地より推して、国分寺僧侶あるいは国府の官人などが可能性として考えられる。

第10図によって明らかな様に、6基の火葬墓は武蔵国分寺の北東地域にまとまって検出されている。⑤・⑥については、谷をはさんで対岸の現南町三丁目付近からの出土と伝えられている。[2]

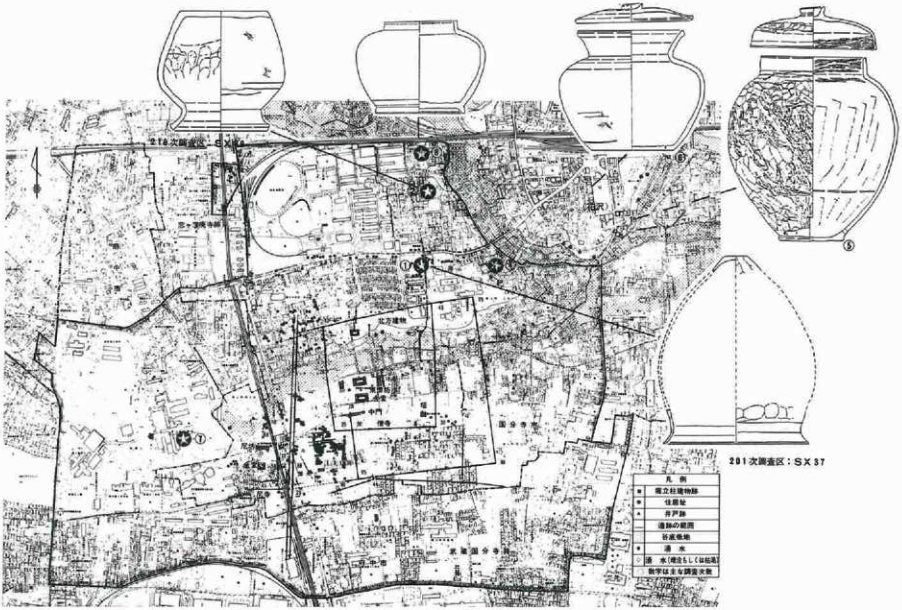
この地域に於ては、④[3]の付近まで、台地縁辺部を中心に奈良時代末～平安時代前期の遺構が分布することが知られているが、②・③及び⑤・⑥の地域では国分寺関連遺構の発見は、この火葬墓以外にない。僧寺北方域に於ては調査例が少なく、何とも伝えないが、僧寺北西域に於ては密度濃く発掘を行っているにもかかわらず、今のところ火葬墓の検出例は無い。従って、武蔵国分寺の北東域の台地縁辺部及び谷をはさんで対岸の台地上は広範囲な墓域を形成していたものと思われる。

なお、尼寺西方の台地縁辺にあたる武蔵台遺跡（都立府中病院構内）でも最近、火葬墓発見の報を聞いているので（⑦）、西方台地縁辺部に於ても広範囲な墓域があった可能性があり、この場合、本地域との性格がどう異なるのか、など考究されるべき問題は多い。

最後に、当時の地表面について考える材料を与えられたので触れておくこととする。

番号	出土位置	占地	埋葬状況	土壙	骨蔵器	蓋	収納物	備考
①	201次調査区（佐藤共同住宅）	台地縁辺	土壙内に逆位	隅丸方形 一辺0.5m、深0.13m	土師器甕	なし	火葬骨 片若干	SX37
②	218次調査区（泉プラーザ建設地）	台地縁辺	土壙内に逆位 因く傾まる。収入る。	方形 一辺0.5m、深0.25m	須恵器甕	なし	火葬骨 片少量 黒い土入る	SX39 壙埋土中より須恵器高台付坏・灰釉陶器片出土
③	恋ケ窪南遺跡（都営住宅建設地）	台地縁辺	不明	不明	須恵器壺	不明	40歳位男子火葬骨 充満	表土除却時に検出
④	東元町3丁目（東急宅造地）	谷壁斜面	不明	不明	土師器甕	不明	火葬骨多量に検出	重弧文宇瓦群出付近より須恵器甕片、坏片出土
⑤	「国分寺駅南方畑地」（福村里元1949-1950）	不明	不明	不明	土師器甕 底部に3個の穿孔	土師器蓋	火葬骨 充満	国分寺所蔵
⑥	国分寺駅の南か）	不明	不明	不明	須恵器甕	須恵器蓋	火葬骨 充満	国分寺所蔵

（武蔵国分寺北東地域発見の火葬墓一覧）


218次調査区：SX34
291次調査区：SX37
北方建物
中門
東方面分寺
凡例
掘立柱建物跡
住居址
井戸跡
遺跡の範囲
砂金採地
湧水
湧水（埋没もしくは枯渇）
数字は主な調査次数

第5図　火葬墓の分布図

骨蔵器は土壙内に倒置して埋納されたものであるが、口縁のレベルが標高75.98ｍを示し、（土壙検出面はⅢb層上面の76.00ｍ）、推定復原された器高は約29cmであるので、骨蔵器の底部のレベルを算出すると、76.27ｍとなる。付近の現地表は約76.5ｍ、Ⅱ層（黒褐色土）の上面が76.2ｍであるので、約10cmⅠ層（現在の表土）に入り込むこととなる。埋納方法が骨蔵器を壙に倒置した後、完全に土砂で覆うとしたら、最低でもさらにその数cm上が、土壙掘り込み面＝当時の地表面ということになり、現在の地表面との差は10cm内外という結果が得られる。あるいは、倒置した骨蔵器の一部が当時の地表より上に出るとした場合（覆土して、マウンド状の墓標を形成することとなる）、当時の地表は先程得た数値（76.27ｍ）より下っても良いこととなる。いづれにしても埋納レベルが浅い為に、興味あるデータが得られた。

検出遺構について②（平安時代後期の遺構群）

先に検討した結果、4軒の住居跡出土の土器群は、10世紀後半代から11世紀前半代にかかる時期のものとすることができ、いづれの土器群に於てもカマド内や床面直上の遺物を含んだ一群と把えられたもので、各住居の構築・使用の時期もほぼこれら土器群の示す時期と考えられる。この外の遺構の内、還元焔焼成須恵器坏2個体を出土したＳＫ825カマド状施設を有する土坑がＳＩ325・328住居跡と併行する10世紀後半代と考えられるものをはじめ、小破片ながら還元焔焼成須恵器坏や酸化焔焼成須恵器坏などを出土したＳＤ184・185溝跡やＳＫ820・821・823・863土坑並びに多数検出された小穴（この場合、全体として酸化焔焼成須恵器坏の比率出土が高い）などは、4軒の住居跡の示す時間幅の中で把えられる。

なお、重複関係などによって新旧の判明しているものは小穴を除き次の4例がある。

① （旧） ＳＩ328住居跡→ＳＤ184溝跡（新）（重複）

② （旧） ＳＫ826土坑→ＳＫ825土坑（新）（重複）

③ （旧） ＳＫ823土坑→ＳＫ822土坑（新）（重複）

④ ＳＢ78掘立柱建物跡＝ＳＫ819土坑（一体のものと考えられる）

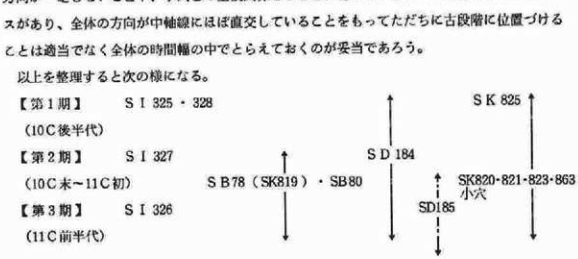
次に出土遺物のない遺構について手掛りを得るため、各遺構の方向をまとめると次の様になる。僧寺南北中軸線との交角を求めると、

ＳＤ184遺跡	：89°西偏	ＳＩ325住居跡		：90°西偏
ＳＤ185遺跡	：91°西偏	〃 326	〃	：85°西偏
（東半：89°西偏～西半：95°西偏）		〃 327	〃	：83°西偏
ＳＢ 78掘立柱建物跡	：85°西偏	〃 328	〃	：92°西偏
ＳＢ 80 〃	：86°西偏			

前項で検討した住居跡についてみると、古い順より、90°西偏・92°西偏→83°西偏→85°西偏ということになり、本調査区内のみをみた場合、中軸線に直交するものが古く、建物の方位が東へ偏するものが新しいということとなる。掘立柱建物跡につき、同様な推移を示すと仮定すると、桁行方位が東偏する2棟の掘立柱建物跡は、住居第2・3群（ＳＩ327・326）

に併行するものと推測し得る。但し、ＳＤ184溝跡については、中軸線に直行する方向でありながら、ＳＩ328住居が完全に埋まった後に構築されたものであり、堆積土の状態が余り良くなかったので、本調査区検出の遺構の中では最末期に位置づけられる。又、ＳＤ185溝跡も、方向が一定しないことや、小穴との重複関係をみると、切っているケースと切られているケースがあり、全体の方向が中軸線にほぼ直交していることをもってただちに古段階に位置づけることは適当でなく全体の時間幅の中でとらえておくのが妥当であろう。

以上を整理すると次の様になる。



以上の様に、本調査区検出遺構の内、前述した平安時代前期のＳＸ37火葬墓を除く、同後期と考えられる遺構群について、大略３期の変遷をとらえた。周辺における既往の調査成果によれば、平安時代後期に至って、国分寺北方域にあたる台地の中央部において遺構群が展開されることになるが、その多くは重複せず、10～20ｍの間隔をおいて散在しており、寺地内の僧尼寺中間地における様相と異なったあり方を示している。これらは、寺地外において、寺院を支える計画的集落と考えられ、今次調査においても、竪穴住居と掘立柱建物跡が一体的に配置された様相を示すなど、そうした計画集落の一部を明らかにしたこととなる。今後は、周辺調査区例とあわせ、巨視的にとらえていく要がある。いづれにしてもこうした遺構群の解明は、武蔵国分寺そのものの構造・変遷を究明していく上で、重要な地位を得ているものである。

註(1)　こうした形態をさらに小形化したものが、国分寺の最終末を示す遺物と思われる第18次調査ＳＩ119住居跡出土土器群にみられ、系統をおうことができる。

(2)　⑤・⑥は国分寺所蔵で、現在⑤は武蔵野郷土館、⑥は国分寺市文化財保存館にて展示中である。現住職星野亮勝師にお伺いしたところ、⑤についての記憶は無いが、⑥については終戦前後に国分寺駅の南で発見され、寺へもちこまれたものと、先代住職より聞いているとのことであった。稲村坦元1949に「武蔵国分寺駅の南方畑地からも奈良時代の骨壷と見られる赤焼で蓋の付いたものを発見して居り現に国分寺に蔵して居る。」とあるのが⑥で、同氏1950にこの「土師質の壷」と並んで「須恵質で同じく蓋も有して居る」ものの記載があるので、それが⑧と思われる。佐藤敏也氏にお伺いしたところ、故塩野半十郎氏が昭和20年代に、旧岩崎敬地（現都立殿ケ谷戸公園一帯）内で作業中に、同敷地南東隅（現南町二丁目15付近）で⑤の骨蔵器を発見しているとのことである。佐藤氏も当時実見しており、出土位置についても直接聞いたことなので、稲村1949・1950にある"南方畑地"は誤りではないか、とのことであった。なお、⑥について"花沢谷戸"出土とあるが、同名称は無いので、「花沢」の誤りである。

(3)　④は、佐藤敏也氏が昭和30年９月４日に、東元町三丁目２２－５付近の東急不動産による分譲地（元天野別邸）の造成工事中に掘り出された土師器甕・字瓦と多量の骨を同一地点で発見し、採集したものである。

Ⅴ　縄文時代の調査

縄文時代の調査は、歴史時代住居調査の為の拡張区を除く636380㎡について実施した。

調査区の中央に南北土層断面用ベルト２本を設け、全体を３地区に分割し、東半部・中央部・西半部と仮称した。調査の開始は東半部より①遺物包含層（Ⅲb 層）発掘→②遺構発掘（Ⅲc 層上面）→③遺物包含層（Ⅲc 層）発掘→④遺構発掘（Ⅳ層上面）の順に、各地区毎に進めていった。調査が冬期にかかったこともあり、調査区の南半域において、日中にても陽が当らないため凍結し続け、難渋した。以下に調査の概要を記す。

1. 検　出　構　遺

縄文時代に属する遺構は、土坑３、ピット（小穴）163である。いずれも検出面並びに堆積土・伴出遺物により縄文時代のものと判断した。この内、Ⅲc 層上面において土坑３、ピット84、Ⅳ層上面においてピット79を検出した。

ＳＫ８６４Ｊ土坑（図面23、図20）

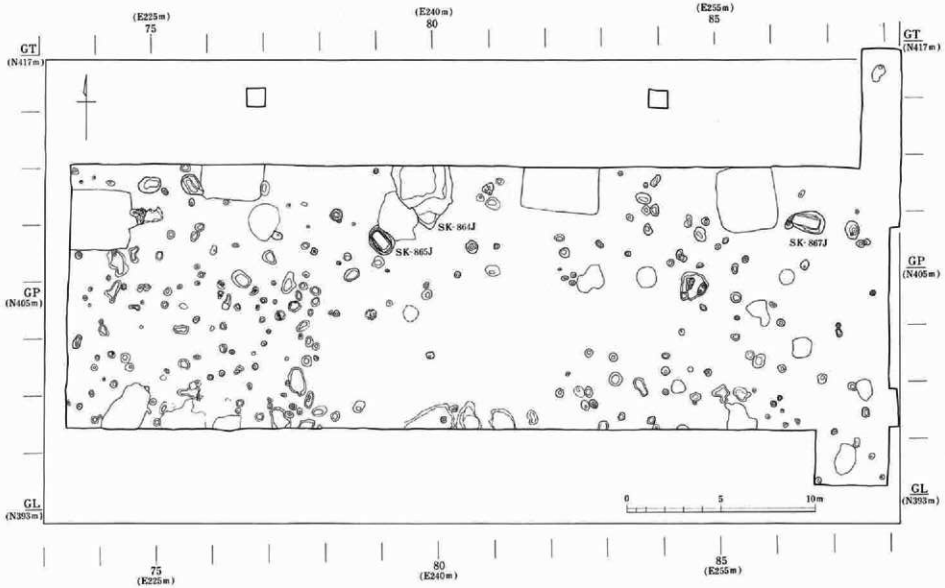
堆積土中央上層に、ローム塊及びロームを多く含む土層があり、周囲を黒色土が囲い、上面では、黒色土が環状にローム土を囲う形となる。いわゆる風倒木痕と思われる。黒色土中より土器（田戸下層式）１点（図面24－１）、礫４点が出土。なお、この土器片は隣接する第200次調査区（リオン本館等増築予定地）試掘時出土のもの（約100ｍ離れる）と同一個体片である。

ＳＫ８６５Ｊ土坑（図面23、図版20）

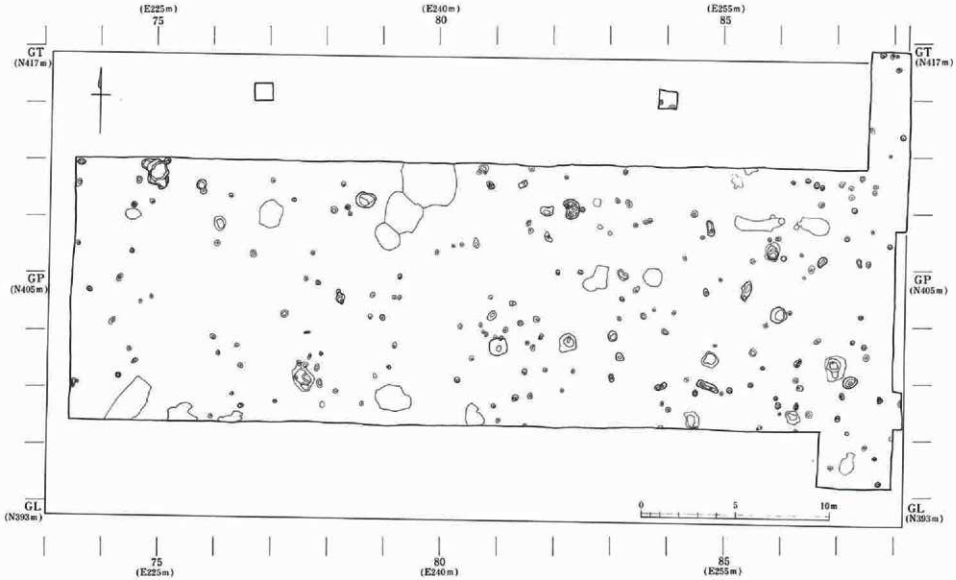
調査区中央部のＧＰ78・79区に所在する。いわゆる陥し穴土坑である。Ⅲc 層上面で検出した。上面形は長円形で最大幅1.5ｍ、最大長1.6ｍ、底面形は長方形で、最大幅0.48ｍ、最大長1.05ｍを測る。長軸方位はＮ40°Ｗを示す。 底面の短辺はやや外へ丸味を持ち、長辺は内側へ丸味を持って張り出す。深さは検出面より1.15ｍで、底面はほぼ平坦である。底面にピット等はない。底面より0.4ｍほどの壁は急角度に立上るものの、それより上は大きく崩れ、長辺ではテラスができる。堆積土は、上層（茶褐色土主体、検出面のⅢb 層及びⅢc 層に似る）、下層（黒色土及び黄褐色土）より成る。最下層は層厚0.2ｍほどの黄褐色ローム土（黒色土を若干含む）で、固く締まり、その上面を一坦底面とみたほどであるが、その上部層より漸移的に移行することや、上面がやや凹凸あることから、底面とみるに至らなかった。出土遺物はない。

ＳＫ８６７Ｊ土坑（図面23、図版20）

調査区東半部のＧＰ・ＧＱ86区に所在する。ＳＫ865Ｊ土坑同じく、いわゆる陥し穴土坑である。Ⅲc 層上面で検出した。上面形は、長円形で最大幅1.14ｍ、最大長1.95ｍ、底面形は長方形で最大幅0.5ｍ、最大長1.02ｍを測る。長軸方位はＮ75°Ｗを示す。 底面の各辺は若干嗣張



第8図　縄文時代遺構平面全体図① Ⅲc層上面（縮尺1／200）



第７図　縄文時代遺構平面全体図②Ⅳ層上面（縮尺１／２００）

り形である。深さは、検出面より0.9ｍで、底面はほぼ平坦で若干中央へむかって下り傾斜となっている。底面から0.5ｍほどの壁は急角度に立ち上るものの、これより上は大きく崩れる。堆積土は三層に大別される。上層は、検出面のⅢc 層より若干暗い程度の暗褐色土～暗茶褐色土。中層は、ローム粗粒目立つ黒色土～黒褐色土。下層は、ローム・ロームブロック多い黒色土～黒褐色土で締まり強い。出土遺物はない。

ピット（小穴）

調査区全体に大小多数のピット（小穴）を検出した。Ⅲc 層上面で239個、Ⅳ層上層面で207個、合計446個をまず確認した。粒子粗く締まり弱い木の根等による攪乱と思われる（全体図で上端線のみのもの）ものを除き、Ⅲc 層上面で84個、Ⅳ層上面で79個、合計163個につき断面実測を行った。複数の底面をもつものを分離して、174例につき、上面形と断面形を分類すると次のようになった。

上面形＼断面形	砲弾形	円筒形	丸底形	平底形	不整形	U字形	摺鉢形	計
円形（楕円形含む）	2	3	1	1				7
不整円形	35	66	31	10	1	1		144
方形（隅丸方形含む）								0
不整方形								0
不整形		2		1				3
底面が長円もしくは長楕円						12	1	13
大形の不整円形							7	7
計	37	71	32	12	1	13	8	174

以上の内、上面形が不整円形で断面形が円筒形のものが最も多く、これに上面形が同じく不整円形で、断面形が砲弾形のものと、丸底形のものと平底形のものを加えると82%を含める。歴史時代小穴と異なるのは、大形の上面不整円形で断面摺鉢形のものの存在で、これらの多くは堆積土、形態などよりみて、小規模の風倒木痕と考えられる。平面径は0.2～0.3ｍのものが多く、深さは最も浅いもので0.08ｍ、深いもので0.61ｍであった。タイプ毎・規模毎の分布状況の分析までには至らなかった。

2. 出 土 遺 物

縄文時代の遺物は、Ⅲ層（遺物包含層）より主に出土したのをはじめ、Ⅰ層（表土）、Ⅱ層（黒褐色土）あるいは歴史時代遺構内よりも出土している。ここでは、土器・石器・礫の順に記す。出土遺物の総量は、コンテナ14箱、総数349点。内訳は次表に示す。

	点数（比率）		遺構内	包含層	表土他	報告掲数	備　　考
土器	140	40%	1	81	58	46	破　片　数
石器	30	9%		25	5	11	
礫	179	51%	5	174	—		表土他の礫は除く（若干量）
計	349	100%	6	280	63	57	

土器（図面24、図版21）

本調査区出土の140点の土器は次の8類に分けられる。

第1類	早期後半	田戸下層式土器	図面24－1	1個体	1点
第2類	前期後半	諸磯b式土器	〃　－2	1個体	37点
第3類	中期前半	五領ケ台・阿玉台・勝坂式土器	〃　－3~14	12個体	12点
第4類	中期後半	加曽利E式土器　a．口縁部片（降帯文）	〃　－16	2個体	2点
		b．胴部片（　〃　）	〃	1個体	8点
		c．深　鉢（W字状文他）	〃　－15	1個体	20点
第5類	時期不明	有文（沈線文）		8個体	8点
第6類	時期不明	縄文のみのもの　a．早期？	〃　－17	4個体	7点
		b．中期？		3個体	3点
第7類	時期不明	無文のもの　a．胴部片（繊維混入）		1個体	1点
		b．　〃　（早期？）		15個体	15点
		c．底部片（　〃　）	〃　－18	1個体	1点
		d．口縁部片（中期？）	〃　－19	1個体	1点
		e．胴部片（中期？）		6個体	6点
		f．底部片（　〃　）		2個体	2点
第8類	細片・分類不可			16個体	16点
			合　計	75個体	140点

本調査区の南の第107次調査区においては、ほぼ同じ面積の調査によって、331点の土器を得ている。早期撚糸文系・条痕文系・押型文系土器、前期諸磯b式、中期五領ケ台式・勝坂式・阿玉台式・加曽利E式、後期堀之内式・加曽利B式などである。この内、今次調査区域では、

早期撚糸文系・早期押型文系と後期のものを欠くほかは、おおよそ類似した内容を示している。

図面24－1は田戸下層式土器。口唇肥厚し、口唇上にも施文される。文様は平行する細沈線と沈線間の瓜形状刺突文（竹管文）及び、太沈線による羽状文。胎土には白色の細砂粒多い。色調は内外共橙褐色。器厚約1㎝。

図面24－15は、加曽利E式Ⅶ段階（安孫子・秋山・中西1980）の深鉢形土器。ゆるやかな波状を呈するか。口唇が肥厚し無文部に刺突文等が二重にまわる。くびれ部分にW字文、くびれ部以下は八状文となり、Wの上部と八の内側が縄文、他は無文となる。図のdとeが一箇所で接合するものとみて、復原を試みた。奇異な感じも受け、確実性に乏しいので、参考案として提示する。

石器（図面25、図版22）

本調査区出土の30点の石器は次の9類に分けられる。

第1類	石鏃		2点
第2類	打製石斧（全て短冊型）		4点
第3類	礫器		2点
第4類	磨石	a．不整形	5点
		b．偏平のもの	1点
第5類	石皿（偏平、小形のもの）		1点
第6類	スタンプ形石器	a．打面不整方形、掘り部鳥帽子形（片側加工）	1点
		b．打面不整三角形	1点
第7類	削器・石匙	a．削器	1点
		b．粗製石匙	1点
第8類	台石？		1点
第9類	剥片		10点

図示した11点については第14表にまとめる。

図面25－10はU字状に湾曲する縁辺の両面に細かい刃部加工を施したもので、上部破断面の一部に細かな剥離痕がみられる。

107次調査区では総数53点あり、石鏃・打製石斧・スタンプ形石器・凹石・敲石・特殊磨石・剥片などがあった。本調査区においては、凹石と特殊磨石を欠き、礫器と石皿・削器・石匙・台石？を加える。何れも、早期及び中期に特有な石器群である。

第14表 石器計測表

図版	図版	種別	分類	出土位置	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	遺存状態	石材 —は不明	備考
25－1	22	石鏃	1類	GO78区 Ⅲc層	1.5	1.4	0.2	1.5	完形	黒曜石	
25－2	22	石鏃	1類	GM75区 Ⅲc層	2.3	1.25	0.125	2.0	完形	チャート	
25－3	22	打製石斧	2類	GP81区 Ⅲb層上部	5.3	5.5	2.1	95.5	頭部のみ	結晶岩？	
25－4	22	磨器	3類	GP80区 Ⅲb層	6.4	11.9	3.4	470	完形	頁岩？	
25－5	22	磨石	4類a	GP87区 Ⅲb層上部	14.3	7.0	4.1	485	完形	砂岩	
25－6	22	磨石	4類a	GM78区 Ⅲb層	7.3	7.3	4.3	280	与欠	砂岩	頂部に敲打痕
25－7	22	磨石	4類a	GN78区 Ⅲb層	11.0	7.2	4.1	420	完形	閃緑岩	
25－8	22	スタンプ形石器	6類a	GN79・80区Ⅲb層上部	10.7	7.5	4.6	410	完形	——	
25－9	22	スタンプ形石器	6類b	GP・GQ79区 攪乱	13.3	7.5	6.3	770	完形	砂岩	
25－10	22	削器	7類a	GO77区 Ⅲb層上部	4.4	5.1	0.7	14	与欠	チャート	
25－11	22	剥製石核	7類b	GQ86区 Ⅲb層	9.5	5.4	1.0	46.5	完形	頁岩？	

礫

包含層及び遺構（SK 864J土坑）内より土器・石器にまざって179点（計35,876g）の礫が出土した。内訳は次表の通りである。

地成・土地成		地成						土地成						計
石材		砂岩		チャート		その他		砂岩		チャート		その他		
被熱度		完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	
包含層	点数	8 (2)	49 (3)	2	3		7 (1)	21	25	10	8	5	30 (2)	174 (10)
	平均重量 g	3653	2437	475	520		4892	1059	1918	925	516	115	1868	2023
	全重量 g	7306	119.42	95	1560		3215	2224	4795	925	416	575	6805	35206
SK 864 J	点数							1	2				2	5
	全重量 g							40	417				13	470
	平均重量 g							40	208.5				6.5	94

この内、包含層出土の174点につき、第51次調査区包含層出土の7546点の結果と比較すると下表の通りとなる。

	点数	全重量 g	平均重量 g	石材 砂岩	石材 チャート	石材 その他	被熱度 完形	被熱度 破片	地成状況 地成	地成状況 土地	黒色付着物有
本地区包含層	174	35206	2023	103 (59%)	23 (13%)	48 (28%)	46 (26%)	128 (74%)	69 (40%)	105 (60%)	16 (9%)
第51次調査区包含層	7546	466320 (7191点)	66 (7191点)	5665 (75%)	1085 (15%)	782 (10%)	2789 (37%)	4757 (63%)	5988 (93%)	558 (7%)	739 (10%)

点数に開きがあるので単純比較は妥当でないと思われるが、指摘されることとしては、①平均重量が大きいこと、②その他の石材の比率が大きいこと、③破損礫がやや多いこと、④未焼礫の比率が大きいこと（特にその他の石材が多い）などがあげられる。なお、接合資料は1例のみで、3点の砂岩、焼成、破片礫が接合している。

3. 遺物包含層の発掘

縄文時代の遺物包含層は第Ⅲ層で、Ⅲa層（黒褐色土）、Ⅲb層（暗茶褐色土）、Ⅲc層（ローム漸移層、茶褐色土）に分層されるが、遺物はこの内Ⅲa層からⅢb層にかかって多く出土し、以下漸移的に減少する。

層厚はⅢ層全体で、調査区西端で50cm、東端で60cm。西に薄く、東で厚い。地形が東北方向へゆるやかに傾斜しており、東の野川谷壁より浅く延びる谷地形の影響と思われる。土器の接合資料において、東西方向の動きがみられることと関連が考えられる。

土器・石器・礫の平面分布を第7～9図によりみると、接合資料を除き、散在している様子が伺える。調査区北半に少ないのは、歴史時代住居等ローム面までの遺構が多い為であり、南半において少ないのは、調査が冬期にかかり、凍結した為、充分に捕捉できなかった為である。

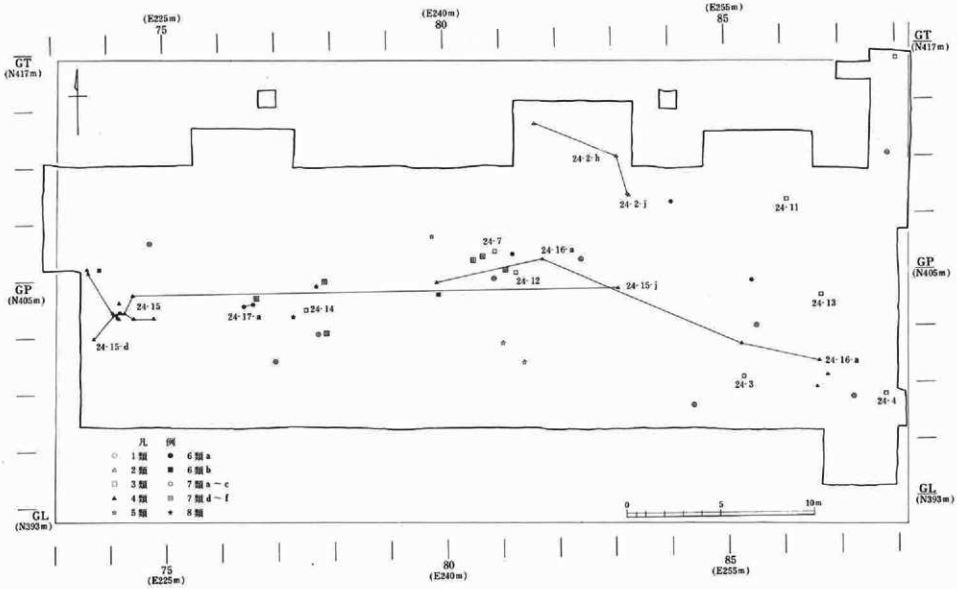
南側の107次調査区においては、今次調査とほぼ同面積（612.6㎡）の調査によって、総数1,184点（土器331点、石器53点、礫800点）の遺物を得、その平面分布は東北方向にむかってやや多くなる傾向を示していた。礫は調査区中央北壁と調査区南東隅にやや集中していた。

今次調査の結果と比較すると、分布傾向は一致しており、地形・地層との対応が考えられるにもかかわらず、107次調査の結果から予測すれば、今次調査においては、さらに数量が増加すべきところが、逆に減少している。両地区間の最短距離は10m以内であるが、このように一見矛盾する結果となったが、その割合をみると全体では½弱であるが、土器・石器が½弱に対して礫は½弱となっており、両者を区別して考える必要があろうし、分布の疎密についてはより広範囲にとらえるべきであろう。

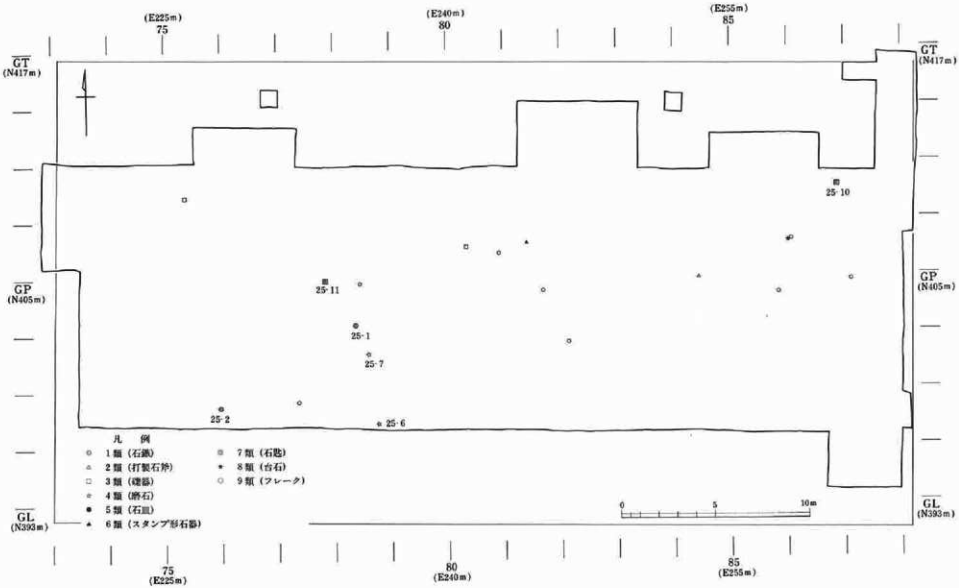
4. 小　結

本地区の南約50ｍ地点の第51次調査区（国際電信電話株式会社国分寺寮建設地）における調査成果より、早期撚糸文期、条痕文期及び中期後半加曽利Ｅ式期を主体とした集落遺跡として多喜窪遺跡Ｃ地点を先に認識した（『国分寺市史』上巻）。本第201次調査区では、南接の第107次調査区と同様に、遺構としては土坑のみで、他に早・前・中期の遺物を得るなどの成果があった。この内、中期前半の遺物については、多喜窪遺跡Ｃ地点では少なく、東方の多喜窪遺跡Ｄ地点に多いことから、Ｄ地点との関連で把えられる。多喜窪遺跡Ｃ地点は台地南縁（真姿の池の湧水地点を中心とする）に拠点を有するものと考えられ、崖線より約150ｍ入った第51次調査区はその北側縁辺部にあたり、さらにその北方の第107次調査区や本地区はその周囲に広がる活動領域と考えられる。

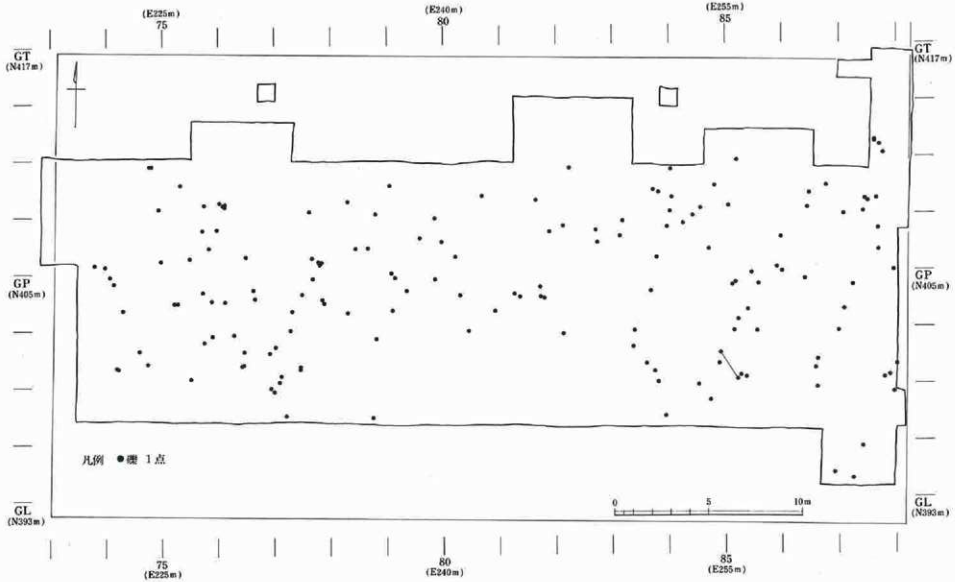
２基検出された土坑はいわゆる陥し穴土坑とされているもので、早期後半に盛行したものと考えられている。（この外に墓壙説、貯蔵穴説などがある。）今次調査では遺物の出土はなかったが、検出面より考えて早期に属する可能性が強い。本地区例を含め、多喜窪遺跡（地点北辺周辺では同種の土坑が６例発見されたことになる。この種の土坑の坑底には小ピット等が穿たれるものが多くみられるが、本地区周辺の６基には底面施設はなく、形態等共通点を有している。陥し穴とすれば同一の狩猟方法によった遺構と考えられるし、時間的な隔たりも少ないものとみた方が適当であろう。又、ＳＫ865Ｊ土坑の最下層の様に人為的埋め込みと思われるものが、外にも１例あって、陥し穴とすると不自然な行為と思える。二点とも他地域との比較の好材料として特筆される。



第8図 土器出土分布図（縮尺1／200）



第9図　石器出土分布図（縮尺1／200）



第10図　礫出土分布図（縮尺 1／200）

Ⅵ　先土器時代の調査

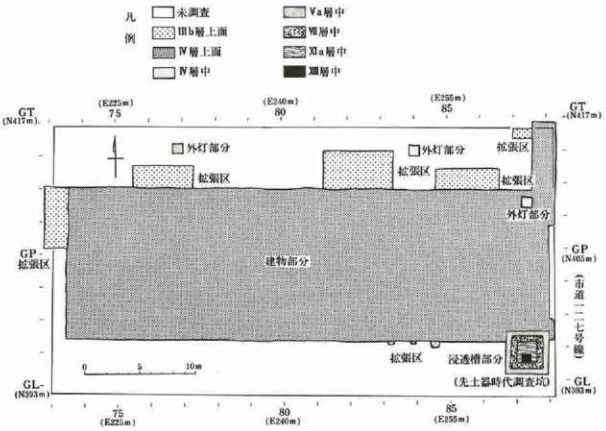
先土器時代の調査は、調査地区の南東部の浸透槽設置位置と、外灯部分３箇所において実施した。

浸透槽部分では深掘り部分でⅩⅢ層中まで、 外灯部分では掘削深度にあわせ、Ⅳ層中もしくはⅤa 層中にて調査を終了した。

南に隣接する第51次調査区及び第 107次調査区において、ユニット３箇所（第51次調査）、礫群１箇所、ユニット１箇所（第 107次調査）が発見されていることから、今回対象としたものである。ことに、第 107次調査の礫群及びユニット検出位置から、今回の浸透槽部分まで、ほぼ真北へ直線で12ｍほどであることから遺構の存在が期待された。

結果としては、遺構・遺物はいずれも調査区においても何ら検出されなかった。

但し、第51次調査、第 107次調査の結果をみても、該期の遺構は本地区周辺では密集することなく、点在することが知られており、偶々、検出されなかったものと考えた方が適当であろう。



第１１図　発掘深度図

Ⅶ　結語に代えて

武蔵国分寺址調査は、創設時より衰退時に至る期間を、1.堂塔伽藍など寺の機能を果すための造形物 ― 建造物・溝柵など ― の推移と、2.寺地内外、周辺における道路および人の居住の形態を明らかにし、その成果を総合して、国分寺設置とそれによる史的意義を解明することにある。この報告書に載せる調査は、その一環として佐藤氏による共同住宅増設工事に先立って、文化財保護法の定めるところによって行ったものである。

遺跡地周辺は、先土器・縄文以降の遺構遺物の存在が既に知られている地域でもあり、それら各時代の埋蔵物についても慎重に作業を進めた。その成果については本文中に記述してあるが、中から二三主要な点について摘記しておきたい。

その第一は、火葬墓である。容器は土師器甕を使用しており、口辺を下の逆位に容器を覆せて隅丸長方形の土壙内に安置してあったが、表土削除作業のために上方を失なっていた。しかし残存した範囲では、容器内は人骨の破砕されたもの以外に遺物はなく、壙内にも副葬品などはなかった。納骨器は土器の分類上これを平安時代前期と判断しているが、埋納の時期もそれとみて差支えない。本文中にこれまでの出土例について述べているように、6例中2例は以前現国分寺に出土後納められたもので内に火葬骨が充満している土師の甕（底部に3個の穿孔がある）と須恵の甕であり、花沢付近の出土と伝えられており、容器自体は丁寧に掘り出されているが出土の状況については判然としていないのが残念である。

この伝花沢の2例を除いても4例は、いずれも僧寺址の北東の地域から出土したものであり、比較的数多く調査を繰り返して実施した北西部からは一点の納骨器も出土しなかったことなどから、この地域を、平安前期のころある種の納骨の地としたであろうとする考えは首肯されるものといえよう。それが一部特定の者の墓域であったのか、火葬骨埋納以外には使われなかったのかなどについては現在のところではまだ断定できないが、寺地区域外の土地使用法の一例と見ることはできよう。

さらに、火葬骨埋納方法の一端がここで明らかにされている。それはおそらく埋納時には小さな塚状を呈していたのであろう。平安時代のこの種の小墳形は既に明らかにされているが、発掘により推定ながら一例を加え得たものといって差支えない。

平安前期に如上のように他の遺構・遺物がなく火葬墓のみを出した本地域が後期に移って住居地域に転用され、しかもその中に掘立柱建物が加わって面目を一新しているさまが調査で解明されたが、調査担当者の述べるように、それが計画的集落の観を呈すると見てよいとすることも、寺地周辺の土地利用の姿を示すことになるので興味深いものがある。しかも、これら竪穴住居について、入口部、カマド・炉などの施設が明確であり、当時の家屋構造解明の好資料であることも特筆できよう。

さて、そこで今回の調査に当って、他にも同様の問題が大なり小なり起ったのであるが、調査遂行上の問題点を記載することを許して載きたい。今回の調査は、共同住宅建設工事に伴う事前調査として実施したため、費用の大半は原因者である佐藤氏が負担することになった。数次にわたる協議の上、理解を得て開始したのであるが、

1. 同地は既に佐藤氏外3名による共同住宅建設のため昭和55年4月から10月末まで7ヵ月間の事前調査を行ったもので、今回は、その増殖工事計画として申請されていた。ところが、今回は遺跡の内容が豊富であり調査の日程を現地10カ月、室内約19カ月と延ばさざるを得なかった。

2. この期間を多少でも短縮するには、現調査体制を改善することが一策であるが、現状ではかなりの困難がありやむを得ないものがあった。

3. 決算後、調査費の支出につき、調査結果と照し合わせ、前回に比べ多額にすぎるのではないか、との疑問が出ているので十分検討したが、調査対象、調査方法などの点からやむを得ないものと結論せざるを得なかった。

これらについては、本文冒頭、調査に至る経過として記載したものをご覧いただきたいが、調査者としては、地権者側が文化財の意義を理解されて、建設を延期し土地を一時提供される好意に対して、それが法の趣旨に添うものであるとしても、可能の限り善処したいものと思っている。

国分寺市における常置組織としての調査会は、巻頭の星野会長の「序」にあるように、市内の二つの調査会を統合一本化し、その対象を全市域とすることにした。しかし、その中の主要なものが、武蔵国分寺とその周辺関連遺跡であることにかわりはないものと位置づけている。現実には、調査会事業として、各種土木工事等開発に伴う事前の調査が、逐次増加することにより、調査団の現有勢力をもってしては、かなりの無理が生ずることになり、一調査に当て得る調査者の数が限られてき、内容を疎略にすることは厳に戒むべきことなので、期間延長となり、それがやがて経費にまで及ぶという現状になる。市当局もこれを承知していて最善の措置を十分考慮されているが、われわれとしても、何処かでこの状態から脱却する方途を市と共に考え腐心しているものであり、諒承を得たいとお願いするものである。

（調査団長　滝　口　　宏）

参　考　文　献

ア　安孫子昭二・秋山道生・中西　充、1980、「東京・埼玉における縄文中期後半土器の編年試案」『神奈川考古』第10号「シンポジウム　縄文時代・中期後半の諸問題－とくに加曽利E式と曽利式土器との関係について」所収

イ　石田守一、1987、「我孫子市新木東台遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学会

　　稲村坦元、1949、「武蔵野の奈良時代文化」『武蔵野』31－2

　　稲村坦元、1950、「武蔵野奈良朝文化　出品解説」『武蔵野』31－3・4

　　今村啓爾ほか、1973、『霧ケ丘』

　　今村啓爾、1983、「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究』2（生業）

カ　神奈川考古同人会、1983、「シンポジウム収録、シンポジウム　奈良・平安時代土器の諸問題」『神奈川考古』第15号

　　上村昌男、1985、「国分寺市K３遺跡出土の薬壺形骨蔵器」『東京の遺跡』№６東京考古談話会

コ　恋ケ窪遺跡調査団、1979・80・82、『恋ケ窪遺跡調査報告』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　恋ケ窪遺跡調査会

　　恋ケ窪遺跡調査団、1984、『花沢東遺跡　都営国分寺南町三丁目団地建設に伴う調査』

　　国分寺市、1986、『国分寺市史　上巻』

　　小島正裕・田中純男・斉藤　進、1983、「№746遺跡」『多摩ニュータウン遺跡－昭和57年度＜第５分冊＞』財東京都埋蔵文化財センター

　　小島正裕・田中純男・斉藤　進・岩橋陽一、1984、「№40遺跡」『多摩ニュータウン遺跡－昭和58年度＜第７分冊＞』（財）東京都埋蔵文化財センター

サ　斎藤時男、1956、「蔵骨器の底部穿孔について」『若木考古』43、国学院大学考古学会

　　坂詰秀一、1984、『入間市八坂前窯跡』八坂前窯跡調査会・入間市教育委員会

　　笹生　衛、1987a、「君津郡袖ケ浦町遠寺原遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会

　　笹生　衛、1987b、「安房・上総に対するコメント」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会

シ　市立市川考古博物館、1983、『シンポジウム資料　房総における奈良・平安時代の土器』　史館同人

タ　高橋一夫・宮　昌之、1983、「北武蔵の窯址」『シンポジウム　奈良・平安時代土器の諸問題』『神奈川考古』第14号

ト　豊巻幸正、1987、「君津郡袖ケ浦町永吉台遺跡群－西寺原地区－」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会

ナ　柄崎彰一・斉藤季正、1981、「猿投窯編年の再検討について」『シンポジウム「平安時代の土器・陶器」－各地域の諸様相と今後の課題－発表要旨』愛知県陶器資料館

　　柄崎彰一、1983、「猿投窯の編年について」『愛知県古窯群分布調査報告（Ⅲ）（尾北・三河地区）

』愛知県教育委員会

ニ　西脇俊郎・山口辰一、1980、「武蔵国府、国分寺出土土器の変遷一試案」『文化財の保護第12号、特集武蔵国府と国分寺』

西脇俊郎、1981、「Ⅵ　小結、出土土器について」『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅴ』武蔵国分寺遺跡調査会、国分寺市教育委員会

ノ　野村幸希、1975、「日本各地の墳墓　南関東」『新版仏教考古学講座』7巻

ハ　長谷川厚、1983、「歴史時代墳墓の成立と展開(1) ― 特に相模・南武蔵の火葬墓の様相を中心として ― 」『古代』75・76合併号　早稲田大学考古学会

服部敬史・福田建司、1979、「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号

服部敬史、1980、『八王子市南部地区の遺跡－東京都八王子市字津貫町および周辺所在の遺跡分布調査報告』八王子南部地区遺跡調査会

服部敬史、1981a、『南多摩窯址群－御殿山地区62号窯址発掘調査報告書』八王子市鑓水遺跡調査会

服部敬史、1981b、「関東地方の窯址出土須恵器編年と年代」『シンポジウム「歴史年代の土器・陶器」発表要旨』愛知県陶磁資料館

服部敬史・福田健司、1981、「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』第12号

服部敬史、1982、「南武蔵における古代末期の土器様相」『東京考古』第1号　東京考古談話会

服部敬史、1983、「南武蔵の窯址」『シンポジウム　奈良・平安時代土器の諸問題』『神奈川考古』第14号

フ　福田信夫、1982、『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅶ』武蔵国分寺遺跡調査会、国分寺市教育委員会

福田信夫、1984、「武蔵国分寺出土の土師質土器について」『東京考古』2 東京考古談話会

藤沢一夫、1970、「火葬墳墓の流布」『新版考古学講座』6巻

富士見市遺跡調査会、1984、『針ケ谷遺跡群』

ホ　房総歴史考古学研究会、1987、『房総における歴史時代土器の研究』

マ　前川　要、1984、「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相－瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にして－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』

ミ　宮内勝巳、1983、「東京湾沿岸にける奈良・平安時代土器の様相」『シンポジウム資料房総における奈良・平安時代の土器』史館同人

ム　武蔵国分寺遺跡調査団、1979、『武蔵国分寺跡　武蔵国分寺遺跡調査会年報（1974）』

武蔵国分寺遺跡調査団、1980、『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅳ』

武蔵国分寺遺跡調査団、1982、『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅵ』

武蔵国分寺遺跡調査団、1985、『武蔵国分寺跡発掘調査概報Ⅷ』

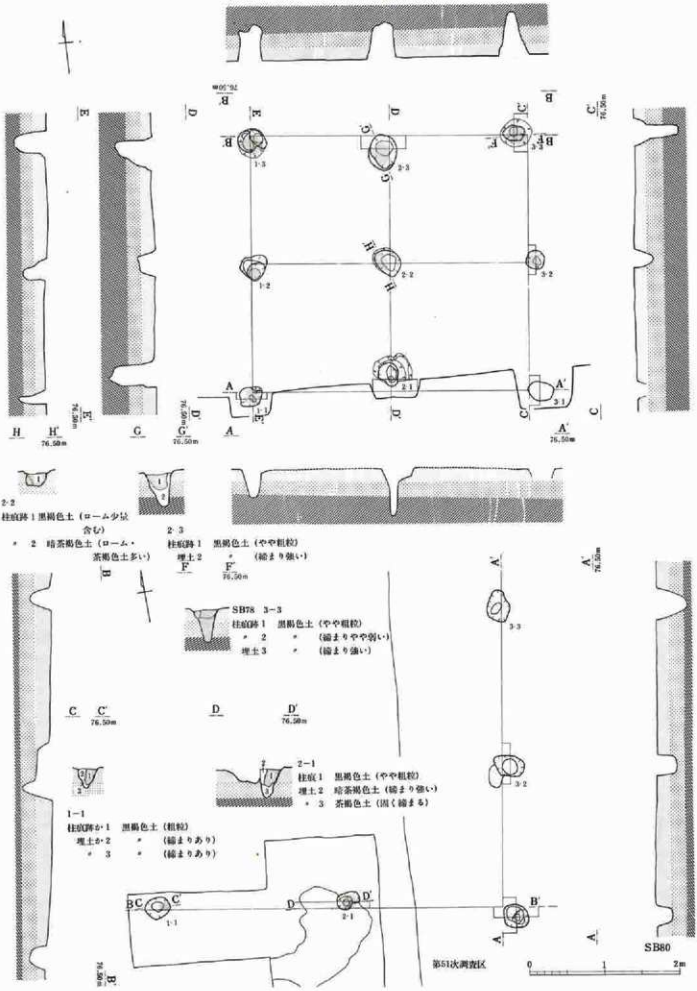
ヤ　山口辰一、1980、「ことぶきマンション地区の調査」『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅱ』府中市教育委員会

山口辰一、1984、「武蔵国府関連遺跡における土器編年試論」『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅴ』府中市教育委員会

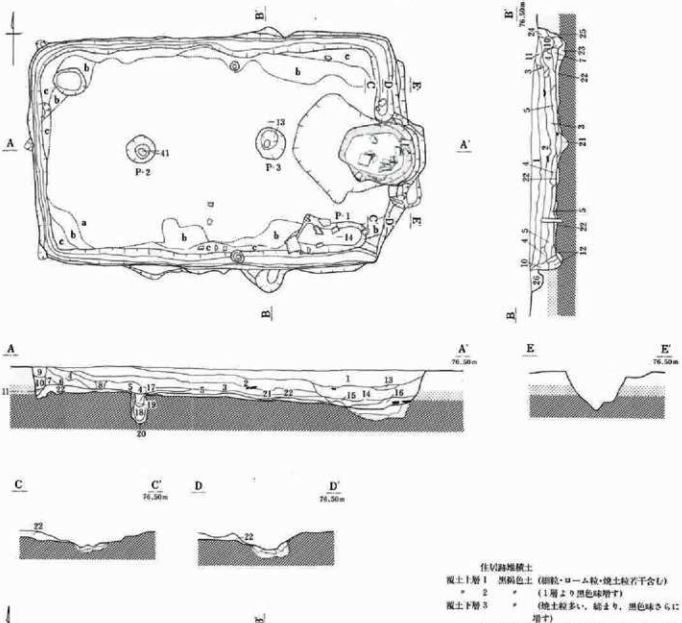
山口辰一、1985、「武蔵国府と奈良時代の土器様相」『東京考古』3 東京考古談話会

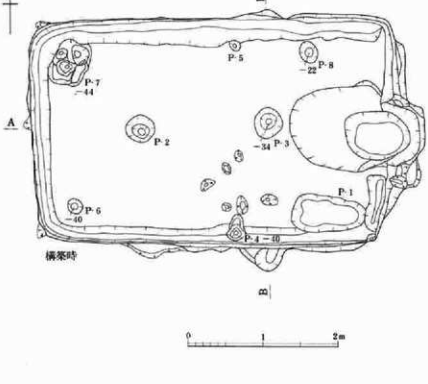
図　　面

図面1　SB78・80掘立柱建物跡実測図



図面2　SI325住居跡実測図

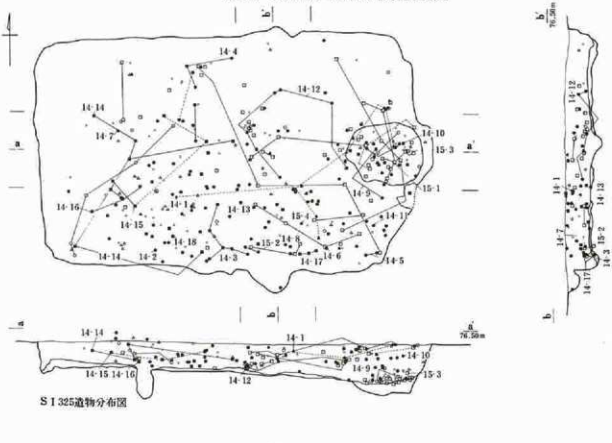




住居跡堆積土

覆土上層1	黒褐色土	(細粒・ローム粒・焼土粒若干含む)
〃　2	〃	(1層より黒色味増す)
覆土下層3	〃	(焼土粒多い、縮まり、黒色味さらに増す)
〃　4	暗赤褐色土	(赤色焼土ブロックと焼土粒を多量に含む)
〃　5	黒褐色土	(ロームをやや多く含み、縮まり・粘性あり)
〃　6	赤褐色土	(赤色焼土ブロック)
〃　7	黒褐色土	(ロームを少量含む)
〃　8	〃	(焼土粒やや多く含む)
周溝9	〃	(やや粗放、10層より黒色味ややあり)
〃　10	〃	(焼土細粒若干入る)
〃　11	暗茶褐色土	(ローム・茶褐色土やや多い)
〃　12	黒褐色土	(ローム少量含む)
カマド覆土13	〃	(焼土粒少量含む)
〃　14	〃	(黒色味あり、ローム粒少量含む)
〃　15	〃	(黒色味増す、縮まりやや弱い)
〃　16	〃	(焼土粒を少量含む、やや粗絞)
P－2 17	黒褐色土	(焼土多く入り、縮まりにややなく)
〃　18	〃	(ローム・茶褐色土やや多く、縮まりやや弱い)
〃　19	暗茶褐色土	(ローム・茶褐色土多く、縮まりあり)
〃　20	暗黄褐色土	(ローム多く、縮まりあり)
P－3 21	黒褐色土	(ロームやや多く、縮まりあり)
貼床土22	暗茶褐色土	(ロームブロックを含み、固く縮まる)
〃　23	〃	(ロームややを多く、縮まりやや弱い)
不明落込24	黒褐色土	(茶褐色土を少量含む)
〃　25	〃	(ローム・茶褐色土をやや多く含む)
〃　26	暗茶褐色土	(ローム・黒褐色土若干入る)

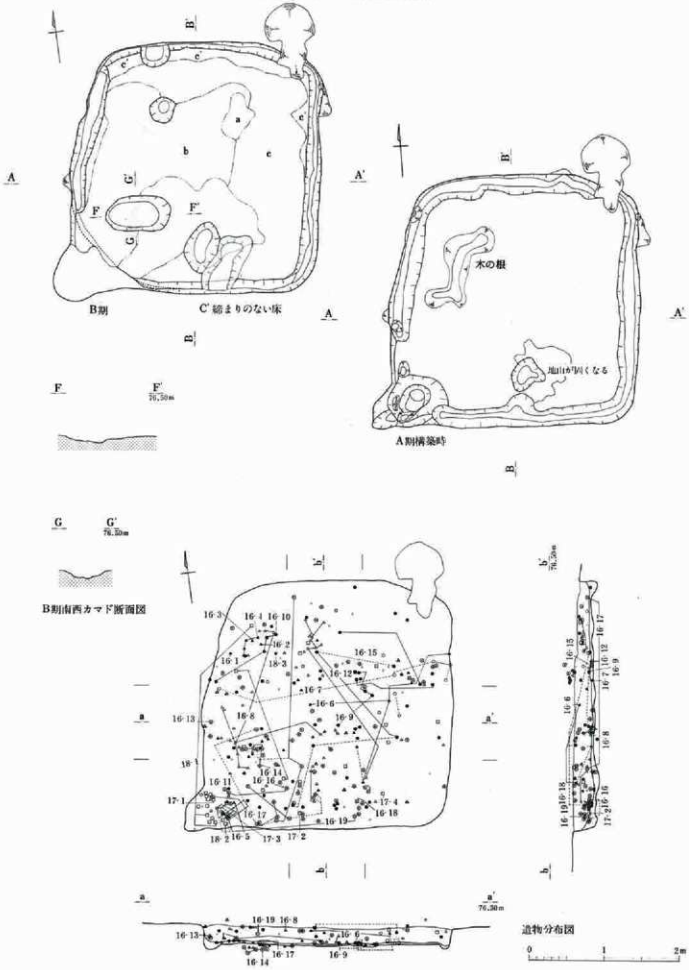
図面3　SI325・SI326住居跡実測図



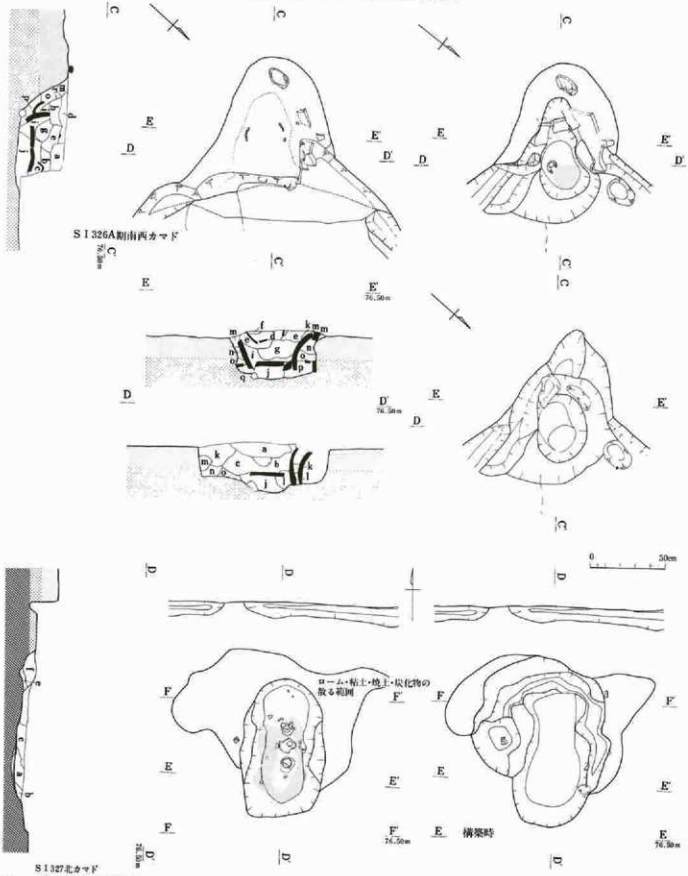
		住居跡堆積土	
覆土	1	黒褐色土	(細粒、黒色味あり)
〃	2	〃	(ローム粒少量含む)
〃	3	〃	(締まり・粘性増す、焼土細粒・炭化粒若干入る)
〃	4	〃	(締まりあり、1層に似る)
〃	5	〃	(締まり・粘性さらに増す、黒色味あり)
周溝	6	〃	(焼土粒ところどころ入る)
〃	7	暗茶褐色土	(ローム・茶褐色土多い)
〃	8	黒褐色土	(やや粗粒、ローム若干入る)
貼床土	9	暗茶褐色土	(ローム・茶褐色土多い、黒色土ブロック入る)
〃	10	黒褐色土	(ローム・茶褐色土若干入る)
		A期南西カマド	
覆土上層	a	黒褐色土	(ローム粒若干含む)
〃	b	〃	(茶褐色土細粒をやや多く含む)
〃	c	〃	(黒色味あり)
〃	d	〃	(ローム細粒・粘土粒を若干含む)
〃	e	〃	(やや明るい、締まりあり)
〃	f	〃	(黒色味あり)
〃	g	〃	(黒色味あり)
〃	h	〃	(粘土細粒をやや多く、白色味をやや帯びる)
覆土下層	i	〃	(焼土・粘土粒を少量含む)
〃	j	暗茶褐色土	(ローム・茶褐色土をやや多く、焼土粒を若干含む)
構築土崩壊	k	黒褐色土	(やや茶褐色味あり)
〃	l	〃	(茶褐色土を多く含む)
構築土	m	〃	(茶褐色土ブロックと黒褐色土入る)
〃	n	暗茶褐色土	(茶褐色土ブロック多く、締まり、粘性あり)
〃	o	黒褐色土	(粘土粒多く、白色味を帯びる)
〃	p	〃	(ローム・焼土やや多く、締まりあり)
〃	q	暗茶褐色土	(ローム・焼土若干入る)
〃	r	黒褐色土	(黒色と茶褐色土を多く含む)

		南壁下焼土
1	黒褐色土	(焼土粒・ブロックを多く含み、締まり強い)
2	〃	(ローム・焼土粒を若干含み、締まり強い)
3	〃	(焼土粒・ローム粒僅かに含む、締まりやや弱い)

図面4　SI326住居跡実測図



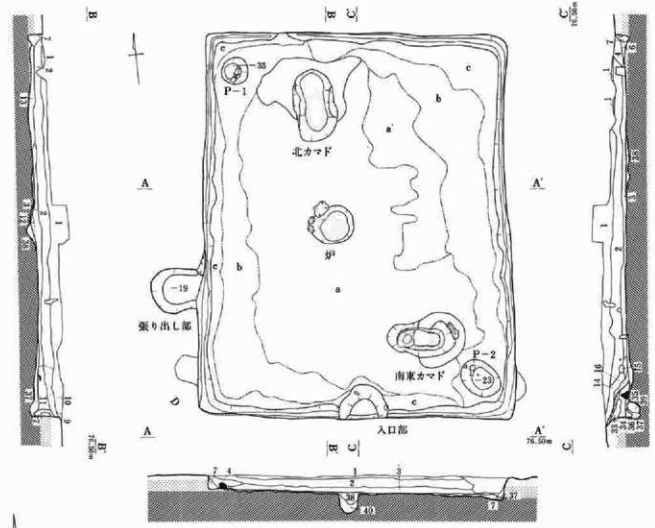
図面5－SI326　327住居跡実測図

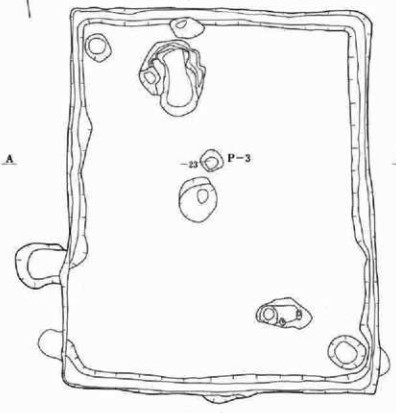


SI327北カマド

覆土	a	暗茶褐色土（焼土粒多量に含む）	
〃	b	黒褐色土（ローム粒・焼土粒若干含む）	
〃	c	〃	（焼土粒やや多い、茶褐色味あり）
〃	d	〃	（ローム粒やや多く、焼土粒少ない）
構築土	e	〃	（ローム粒・焼土粒若干入る）
〃	f	暗黄褐色土（ローム多量、焼土粒・粘土粒含み固く締まる）	

図面6　SI327住居跡実測図

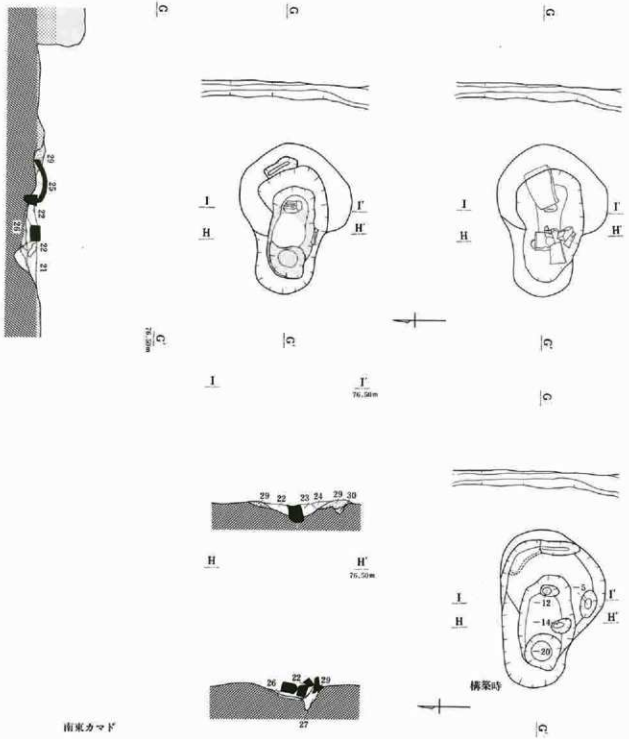




		住居跡堆積土	
覆土上層	1	黒褐色土	(ローム粒少なく，やや細粒)
覆土下層	2	〃	(締まり強まる，黒色味増す)
〃	3	〃	(ローム粒多い，締まり・粘性さらに増す)
〃	4	〃	(やや細粒，黒色味あり)
〃	5	〃	(ローム粒・茶褐色土粒ややあい)
〃	6	〃	(2層よりローム少なく，やや細粒)
〃	7	〃	(3層より黒色味あり，焼土粒若干含む)
周溝	8	〃	(ローム・茶褐色土若干入る)
炉堆積土	9	〃	(ローム細粒と焼土粒少し入る)
入口部前面	10	〃	(ローム細粒少量入る)
〃	11	〃	(黒色味あり)
〃	12	〃	(茶褐色味あり，締まり強い)
入口部構築土	13	〃	(1層域(締まる)
〃	14	〃	(黒色味あり，締まりあり)
〃	15	〃	(茶褐色土多い)
〃	16	〃	(15層より暗い)
掘方土	17	暗茶褐色土	(ローム・茶褐色土より成る。締まり強い)
〃	18	暗黄褐色土	(ローム・ブロックに若干の黒色土・茶褐色土が入る)
P－3埋土	19	暗茶褐色土	(ローム・茶褐色土多く，締まりあり)

0　1　2m

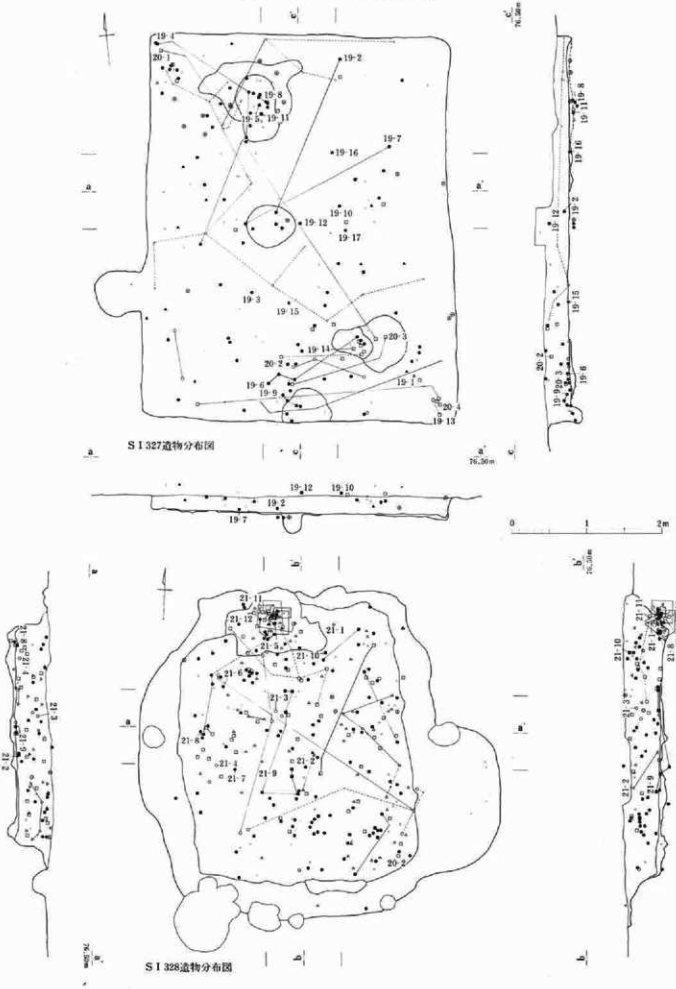
図面7　SI327住居跡実測図



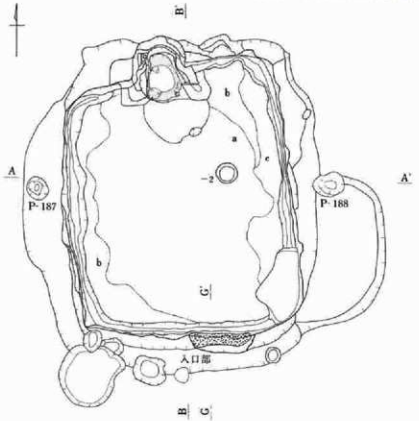
SI327南東カマド
覆土　a　黒褐色土（黒色味あり，粘性強い）
〃　b　〃　（ローム・焼土粒若干入る）
〃　c　〃　（ローム・焼土・粘土やや多く，茶褐色味あり）
〃　d　〃　（a層に似る，ローム・粘土・焼土粒若干入る）
〃　e　〃　（ローム塊粒，粘土粒少量含む）
〃　f　黒色土（炭化物多く含み，締まり弱い）
構築土g　黒褐色土（ローム粒若干入る）
〃　h　〃　（ローム・粘土・焼土・黒色土を多く含む）
〃　i　〃（ローム・粘土少なく，黒色味あり）

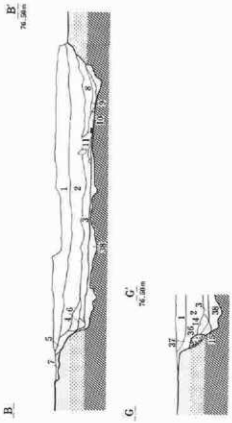
0　50cm

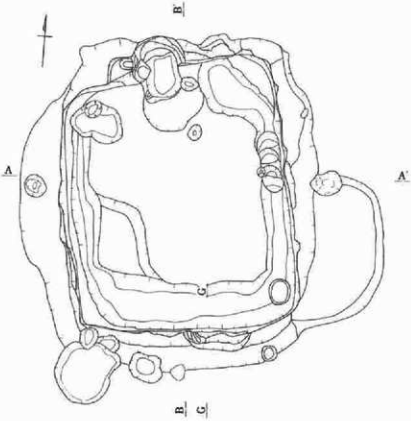
図面8　SI327・328住居跡実測図



図面9　SI328住居跡実測図

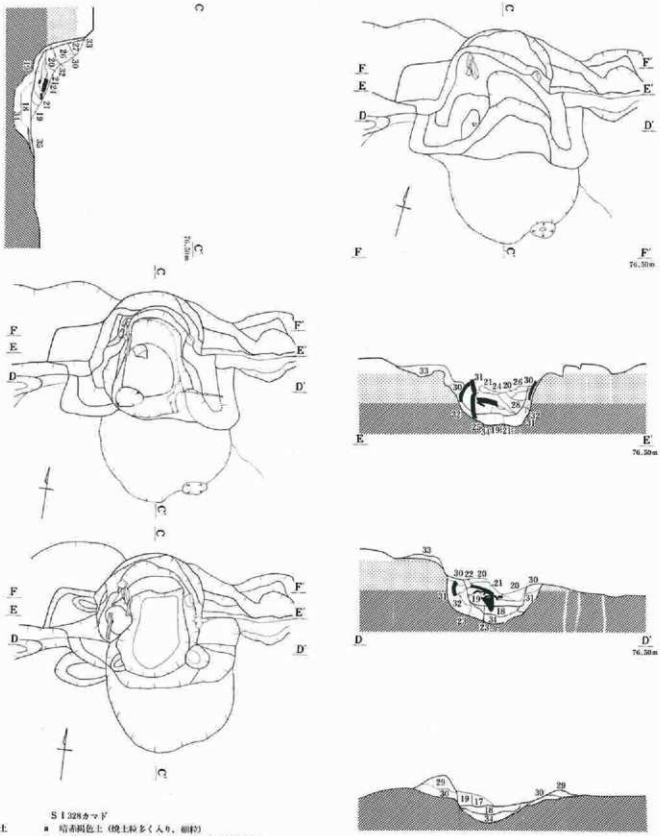






		SI328住居跡
覆土上層	1	黒褐色土（ローム粒少なく，細粒）
覆土中層	2	〃　（黒色味増す，ローム粒やや多い）
覆土下層	3	〃　（黒色味さらに増し，締まり，粘性強くなる）
〃　4　〃　（3層に似るも，ローム粒少ない）
〃　5　〃　（焼土粒少し入る）
〃　6　〃　（ローム粒少ない）
〃　7　暗黄褐色土（ローム多い）
張り出し部　8　黒褐色土（茶褐色土を若干含む，締まりあり）
〃　9　〃　（茶褐色土多く，締まり強い）
周溝上部　10　〃　（黒色土多い）
〃　11　〃　（ローム粒やや多く，やや粗粒）
周溝　12　〃　（ローム粒3層より若干多い）
〃　13　暗茶褐色（茶褐色土ブロック）
〃　14　黒褐色土（ローム粒少し入り，やや粗粒）
〃　15　黒色土（ローム粒若干入る）
構築土　16　黒褐色土（ロームブロック少し含む）
〃　17　暗黄褐色土（黒色土を少し含む）
入口部構築土　18　黒色土（ローム細粒を少し含み，固く締まる）
〃　19　黒褐色土（ローム粒を少量含み，締まりあり）

図面１０　Ｓ１３２８住居跡実測図

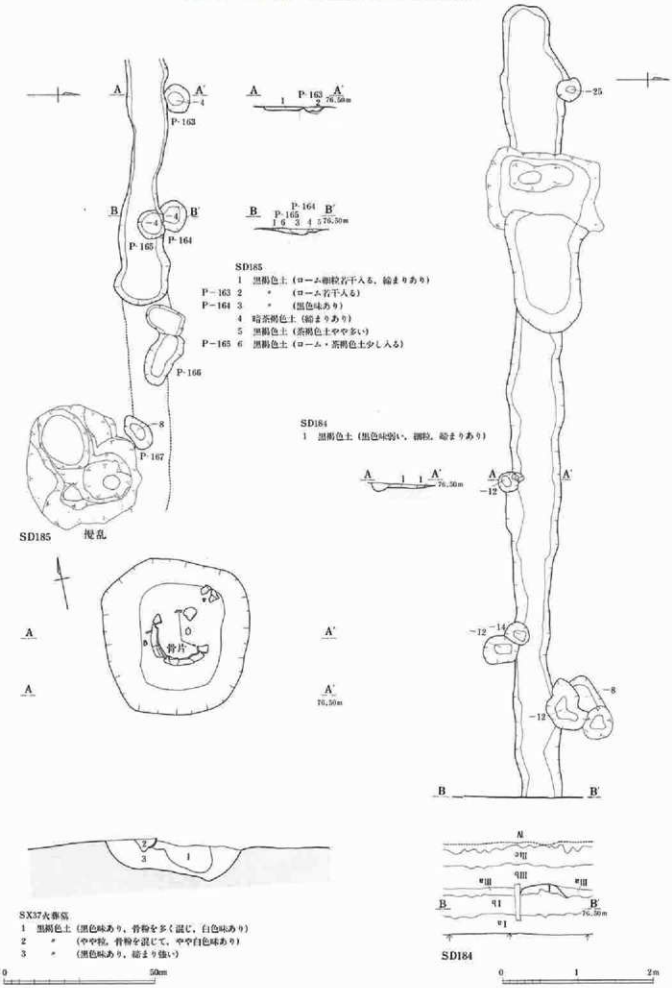


Ｓ１３２８カマド

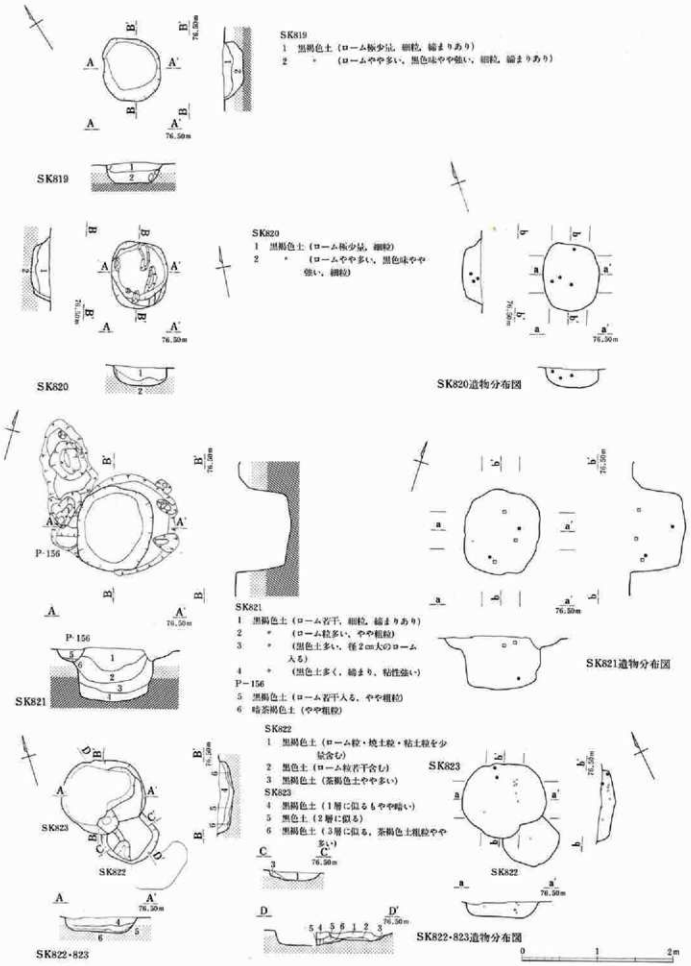
覆土	a	暗赤褐色土（焼土粒多く入り，細粒）
〃	b	黒褐色土（ローム細粒と粘土粒・焼土粒を若干含む）
〃	c	〃　（ローム細粒・粘土粒・焼土粒をやや多い）
構築土崩壊土	d	〃　（ローム細粒少しを含み，縞まりあり）
〃	e	黄褐色土（ローム細粒・ロームブロックを多く入る）
〃	f	黒褐色土（黒色土ブロック入り，ローム・焼土粒みられない）
〃	g	暗褐褐色土（ローム多く含，e層に似る）
〃	h	黒褐色土（黒色味あり，d層に似る）
〃	i	〃　（ローム・やや多く，褐色味ややあり）
〃	j	暗褐褐色土（やや火熱を受けて赤色味あり）
構築土	k	黒褐色土（赤色味帯びる，q層が焼土化したもの）
構築土	l	黒褐色土（黒色味あり，ローム粒少量含む）
〃	m	〃　（ローム・ロームブロック多い，焼土ややあり）
〃	n	〃　（ローム・焼土粒若干含む）
〃	o	暗褐褐色土（ローム多い）
〃	p	暗茶褐色土（ローム粒少量含む，縞まりあり）
〃	q	黄褐色土（黒色土を若干含む）
〃	r	黒褐色土（ローム・焼土粒若干入る）

0　1　2m

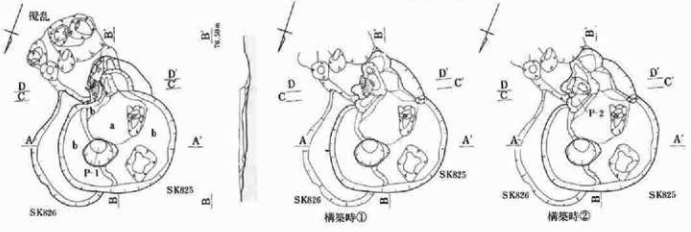
図面11　SD184・185溝跡、SX37火葬墓実測図

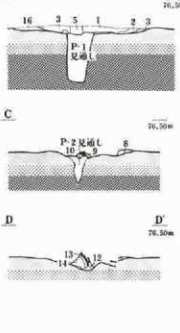


図面１２　SK819・SK820・SK821・SK822・823土坑実測図



図面13　SK825・826・863土坑実測図



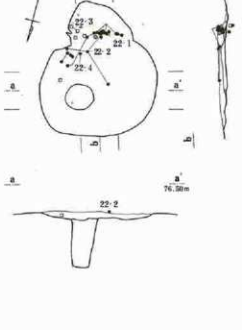


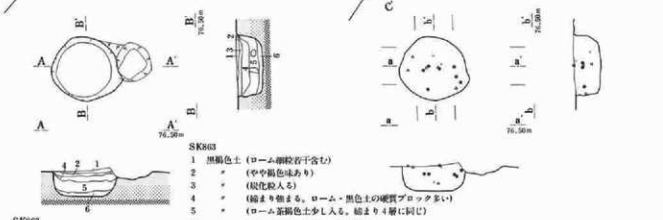
SK825

堆積土1　黒褐色土（ローム粒・焼土・粘土粒・炭化粒若干含む）
2　〃　（やや茶褐色土多く含む）
3　暗茶褐色土
4　黒褐色土（焼土粒やや多く，締まりややや弱い）
5　〃　（締まり強い，ローム粒若干入る）
6　黒色土
7　黒褐色土（締まり弱い）
8　〃　（ローム・焼土粒入る）
9　〃　（黒色土多い）
10　暗茶褐色土（茶褐色土多い）
11　黒褐色土（締まり，粘性あり）
12　茶褐色土（ブロック）

SK826

堆積土13　黒褐色土（茶褐色土ブロック若干含む）

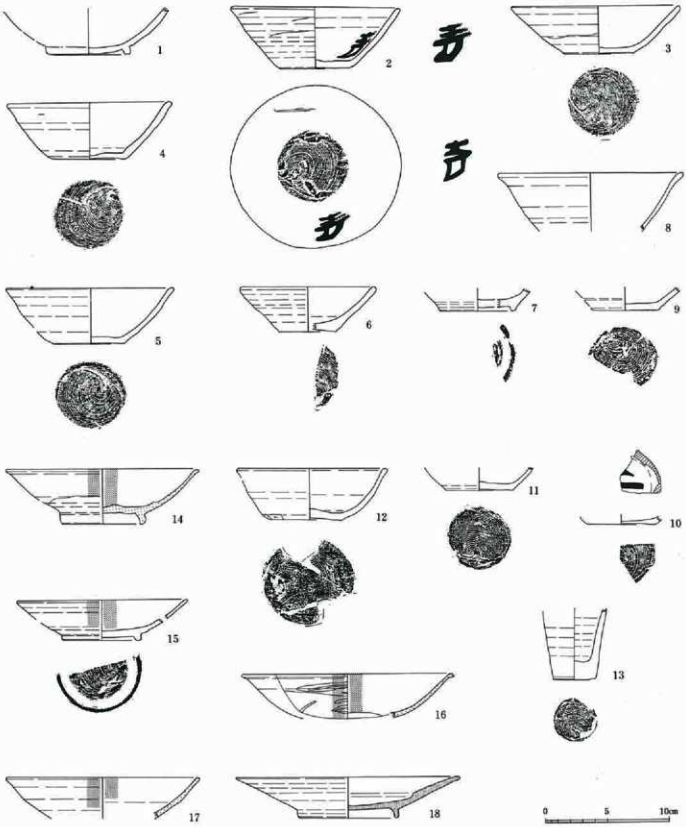




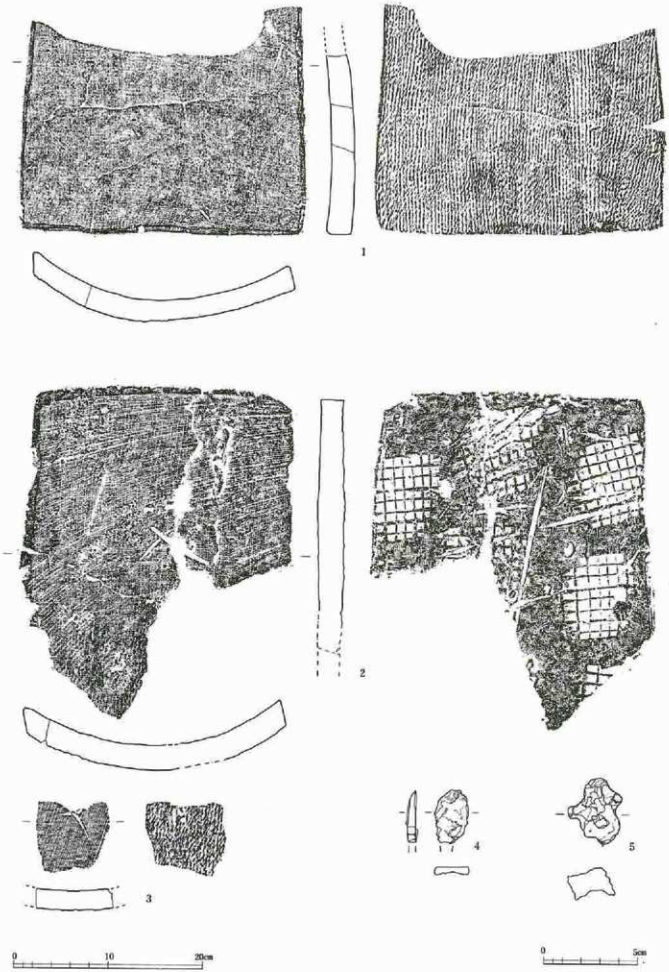
SK863

1　黒褐色土（ローム粒若干含む）
2　〃　（やや褐色味あり）
3　〃　（炭化粒入る）
4　〃　（締まり強まる。ローム・黒色土の硬質ブロック多い）
5　〃　（ローム茶褐色土少し入る。締まり4層に同じ）
6　〃　（黒色味あり。締まり4層に同じ）

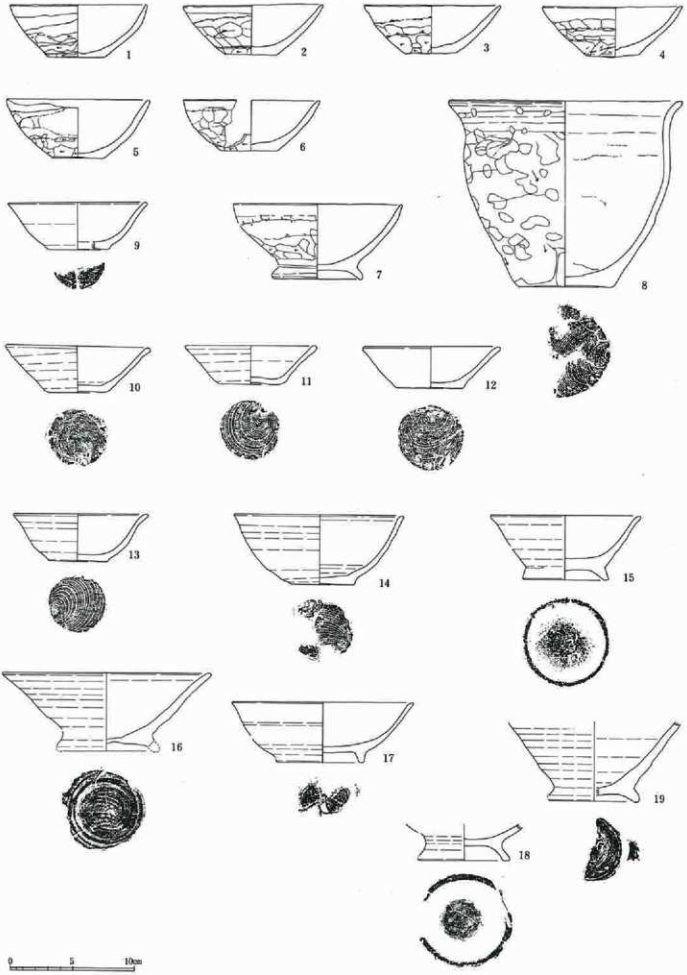
図面14　SI325住居跡出土遺物



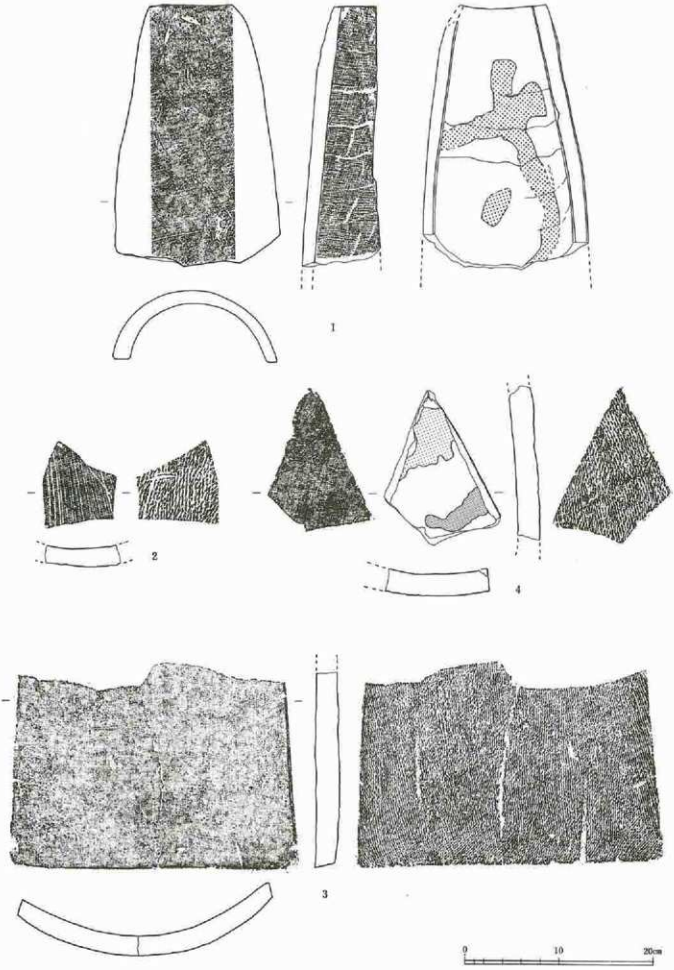
図面１５　Ｓ１３２５住居跡出土遺物



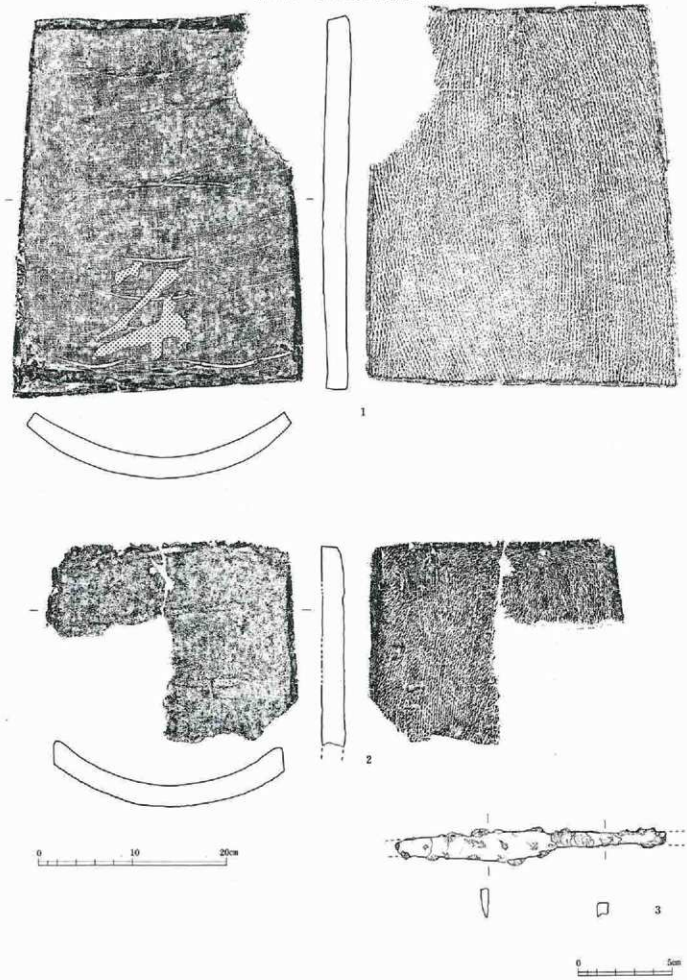
図面16　SI326　住居跡出土遺物



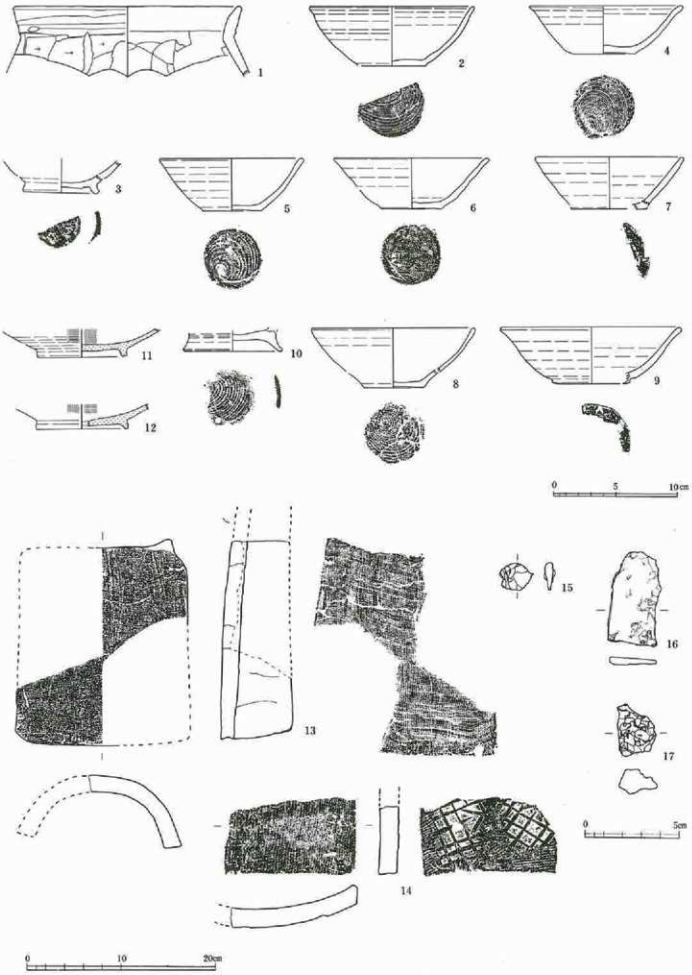
図面１７　Ｓｉ３２６住居跡出土遺物



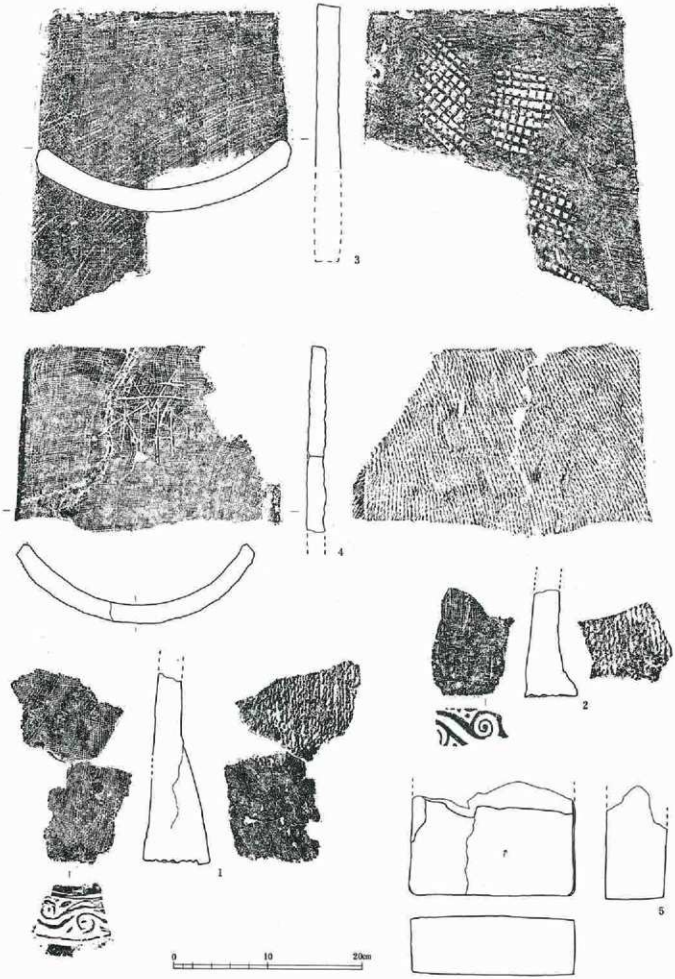
図面１８　Ｓｉ３２６住居跡出土遺物



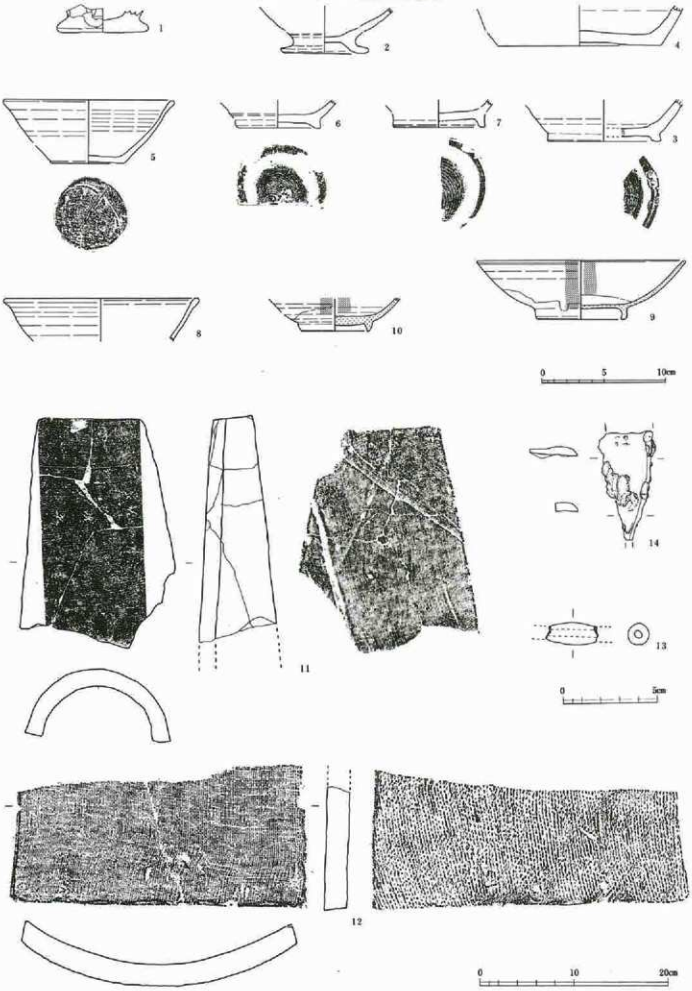
図面１９　SI３２７住居跡出土遺物



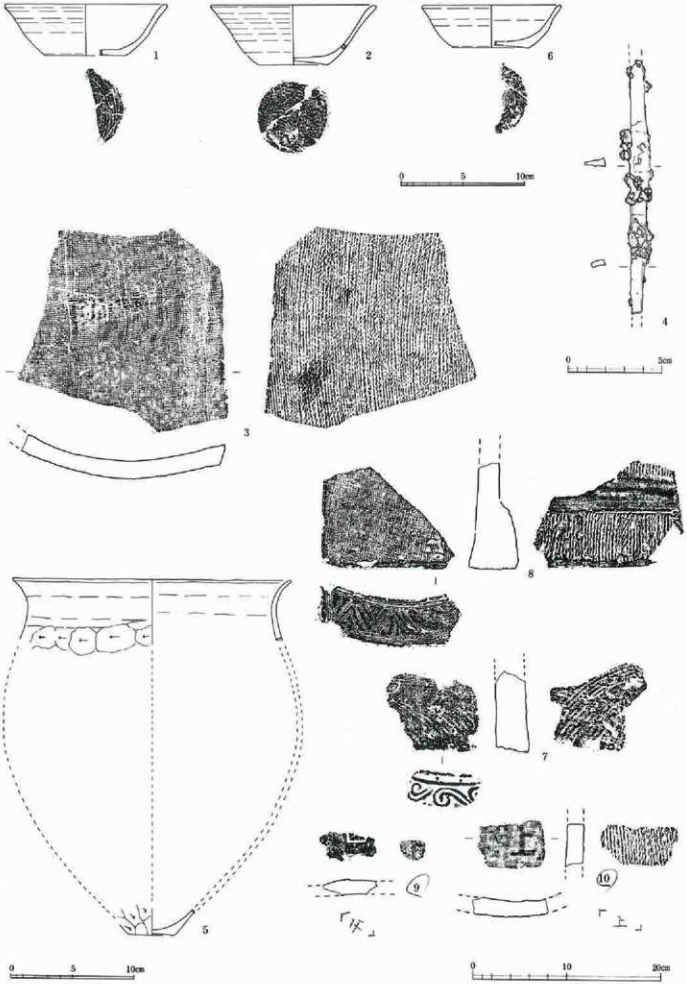
図面２０　Ｓ１３２７住居跡出土遺物



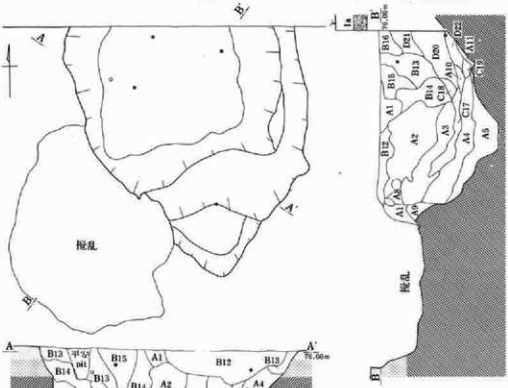
図面21　SI328住居跡出土遺物



図面２２　SK８２５土坑、SX３７火葬墓、遺構外出土遺物



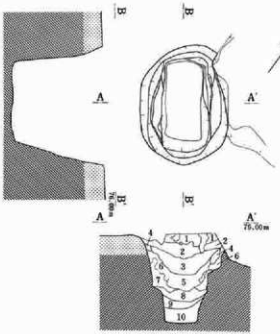
図面23　SI864J・865J・867J土坑実測図



SK864J

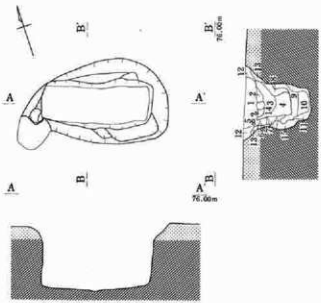
A　ローム主体　　1～11層
B　ローム含む茶褐色土12～17層
C　ローム含む黒色土　18～20層
D　黒色土　　21～23層

1　暗黄褐色土（ローム＋ロームブロック少量）
2　黄褐色土（ローム＋ロームブロック）
3　〃　（ローム粗粒＋ロームブロック）
4　〃　（ローム粒＋ロームブロック多量＋黒色土ブロック少量）
5　〃　（ローム＋ロームブロック多量）
6　暗黄褐色土（黒色土を混じる）
7　〃　（やや汚れたローム）
8　〃　（ローム＋茶褐色土多量＋黒色土少量）
9　〃　（ローム多い）
10　〃　（黒色土少量入る）
11　黄褐色土（ローム粗粒より成る）
12　暗茶褐色土（ローム・茶褐色土やや多く含む）
13　暗褐色土（ローム少し入る）
14　茶褐色土（ロームやや多い）
15　暗褐色土（III層よりやや暗い）
16　暗茶褐色土（黒色味あり）
17　黒色土（黒色土＋ローム・ロームブロック多量）
18　暗茶褐色土（ローム多量＋黒色土多量）
19　黒色土（ロームやや多い）
20　〃　（ローム中多い）
21　黒褐色土（ローム細粒を入る）
22　黒色土（黒色味強もあり）



SK865J

上層1　茶褐色土（ロームブロック少量含む）
〃　2　暗茶褐色土（III層に似る）
〃　3　暗褐色土（ロームブロック少量含む）
〃　4　茶褐色土（ローム粒多い、鉄沖）
下層5　黒色土（スコリア粗粒入る）
〃　6　暗黄褐色土（ローム粒多い、黒色土少し入る）
〃　7　黄褐色土（ローム に5層・8層の黒色土が若干入る）
〃　8　黒色土（5層よりやや黄褐色味あり）
下層9　暗黄褐色土（10層に8層が混じったもの）
〃　10　黄褐色土（ハードローム・黒色土粒を若干混じる）

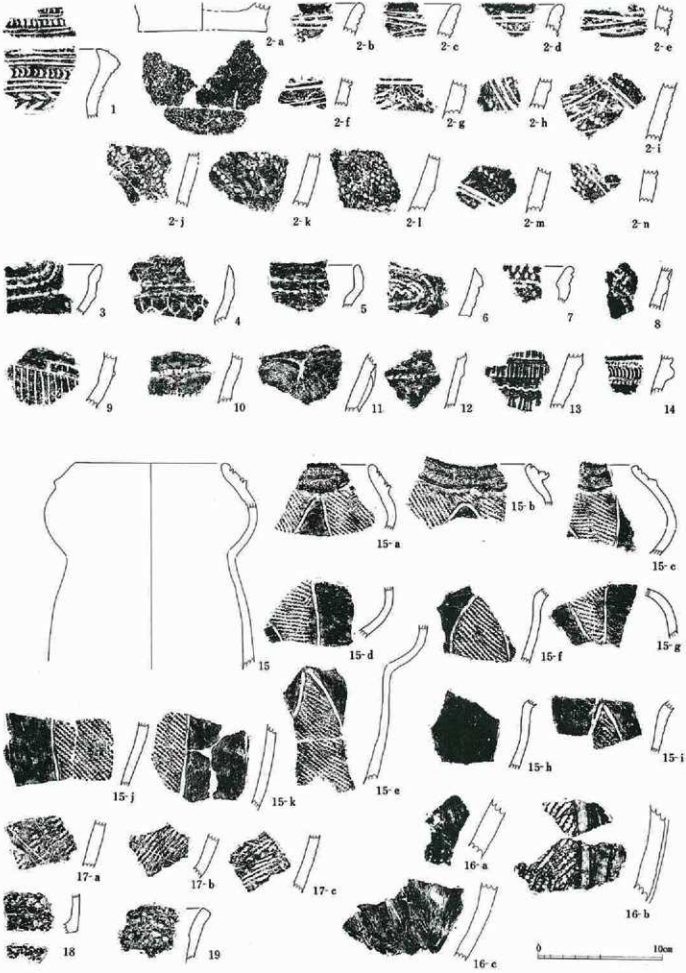


SK867J

上層1　暗茶褐色土（ローム若干含む）
〃　2　暗茶褐色土（黒色味あり）
中層3　黒色土（スコリア粗粒入る）
〃　4　〃　（さらに黒色味増す）
〃　5　暗褐色土（ローム少量入る）
〃　6　〃　（ローム粗粒やや多い）
〃　7　黒褐色土（ローム細粒若干入る）
〃　8　〃　（ローム細粒少量入る）
下層9　黒色土（ローム中や多い、縮まり、粘性強まる）
〃　10　〃　（黒色味弱もあり、縮まり強い）
〃　11　黒褐色土（ロームブロックやや多い、縮まり強い）
壁のくずれ12　暗茶褐色土（ローム若干入る）
〃　13　〃　（ローム細粒やや多い）
〃　14　黄褐色土（ローム）
〃　15　暗黄褐色土（ローム多量、黒色土少し入る）

0　1　2m

図面２４　遺構外出土土器



図面２５　遺構外出土石器

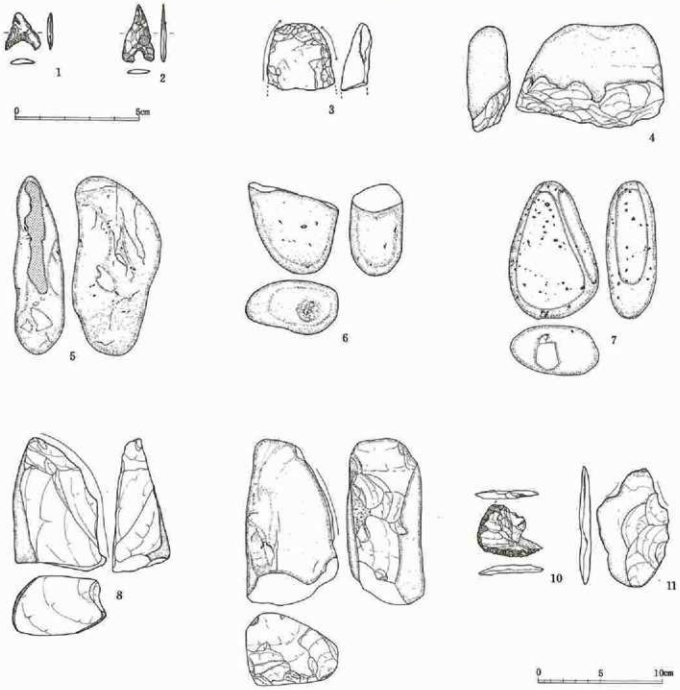


図　　版

図版1　発掘状況

1. 発掘着手時状況（東から）
昭和59年7月5日

2. 表土掘削状況（西から）
昭和59年7月5日

3. 仮囲い状況（北東から）
昭和59年12月22日

4. 歴史時代遺構検出状況・全体（東から）
昭和59年7月26日

5. 歴史時代遺構検出状況・東半（南から）
昭和59年7月26日

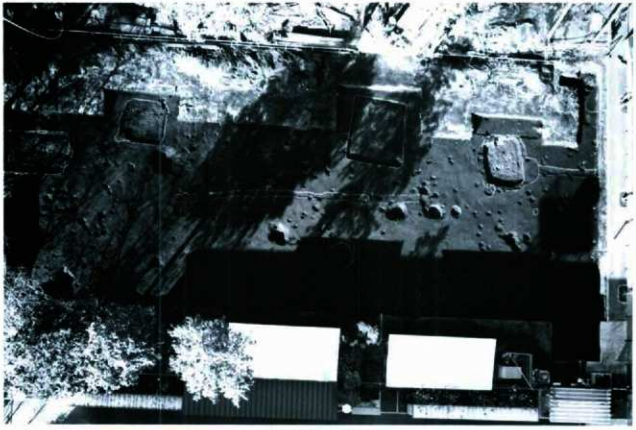
6. 歴史時代遺構調査状況（東から）
昭和59年9月12日

7. 気球による全景撮影状況・準備（南から）
昭和59年12月23日

8. 縄文時代遺構調査状況（SK865J）
昭和60年2月13日

図版 2.　歴史時代調査区全景

1.　全　景（東から）



2.　気球による全景

図版 3.　SB78，80掘立柱建物跡

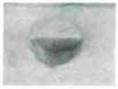
1.　SB78　全　景（北から）

2.　2－2柱穴
土層断面（東から）

3.　2－3柱穴
土層断面（東から）

4.　3－3柱穴
土層断面（北から）

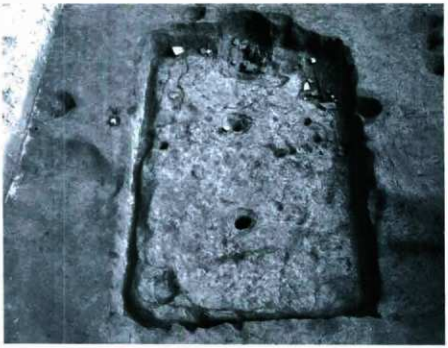
5.　SB80　全景（南から）



6.　1－1柱穴
土層断面（南から）

7.　2－1柱穴
土層断面（南から）

図版4　S I 3 2 5 住 居 跡



1. 全　景（西から）

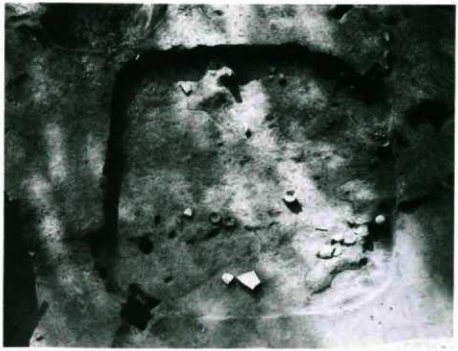
2. 構築時全景（北から）

3. 遺物出土状態・下層（北から）

4. 南北土層断面（東から）

5. カマド全景（西から）

図版5　SI326住居跡

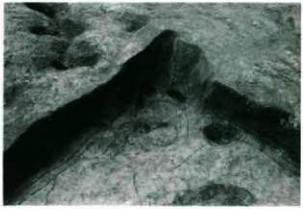


1.　B・C期全景（北から）

2.　A期全景（東から）

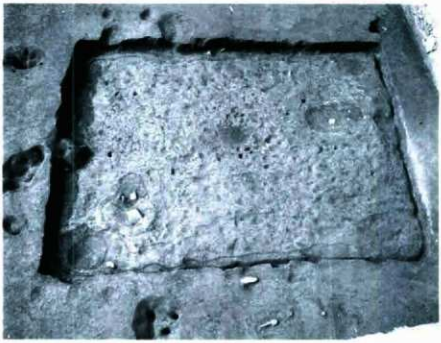
3.　南北土層断面（東から）

4.　A期南西カマドE－E′土層断面（東から）



5.　A期南西カマド構築時（北東から）

図版6　SI327住居跡



1.　B期全景（東から）

2.　遺物出土状態（北から）

3.　A期北カマド全景（南から）

4.　B期南東カマド（北から）

5.　入口部全景（北から）

図版7　S I 3 2 8住居跡

1. 全　景（北から）

2. 遺物出土状態（東から）

3. 南北土層断面（西から）

4. カマド東西土層断面（南から）

5. 入口部土層断面（東から）

図版8　SD184・185溝跡

1. SD184全景（西から）

2. SD184 B－B′土層断面（西から）

3. SD185全景（東から）

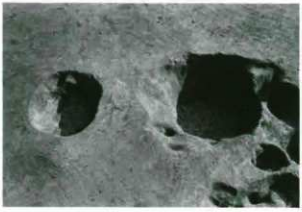
4. SD185A－A′土層断面（東から）

5. SD185 B－B′土層断面（東から）

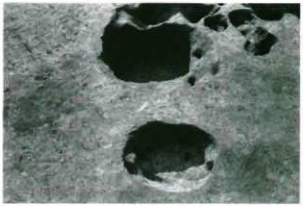
図版9　SK819～823土坑

1. SK819全　景

2. SK819南北土層断面（東から）



3. SK820・821全景（北から）



4. SK820・821全景（東から）

5. SK820 南北土層断面（西から）

6. SK821東西土層断面（北から）

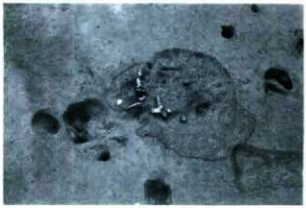
7. SK822・823全景（北から）

8. SK822東西土層断面（南から）

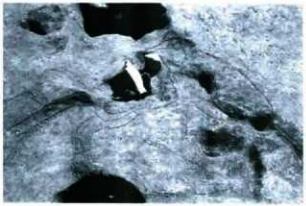
9. SK823南北土層断面（東から）

図版10　SK825・826・863土坑

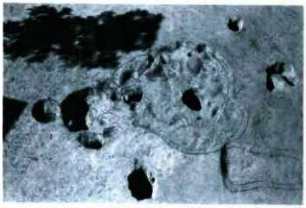
1. SK825全景（北から）



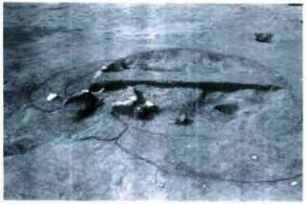
2. SK825遺物出土状態（東から）



3. SK825構築時①カマド部分（北から）



4. SK825構築時②SK826土坑全景



5. SK825南北土層断面（東から）

6. SK826南北土層断面（西から）

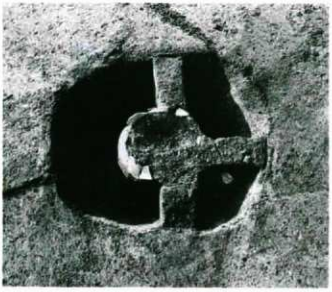
7. SK863全景（東から）

8. SK863東西土層断面（南から）

図版11　SX37火葬墓

1. 上面検出状態（東から）

2. 東西土層断面（南から）



3. 骨蔵器検出状態（東から）

4. 骨蔵器検出状態（北から）

5. 掘り方全景（東から）

6. 掘り方全景（北から）

図版12　ＳＩ３２５住居跡出土遺物

14−1

14−6

14−2

14−3

14−7

14−4

14−5

14−9

14−12

14−11

14−13

14−14

14−15

14−16

15−3

15−2

図版13　S I 325・326住居跡出土遺物

15−1

15−4

15−5

16−8

16−1

16−2

16−5

16−3

16−4

16−7

16−6

16−9

16−12

16−10

16−11

16−13

16−15

図版14　S I 3 2 6住居跡出土遺物

16−14

16−16

16−18

16−17

16−19

17−2

17−1

17−4

18−1

図版15　SI326・327住居跡出土遺物

17−3

18−3

16−2

19−1

19−4

19−9

19−3

19−2

19−5

19−6

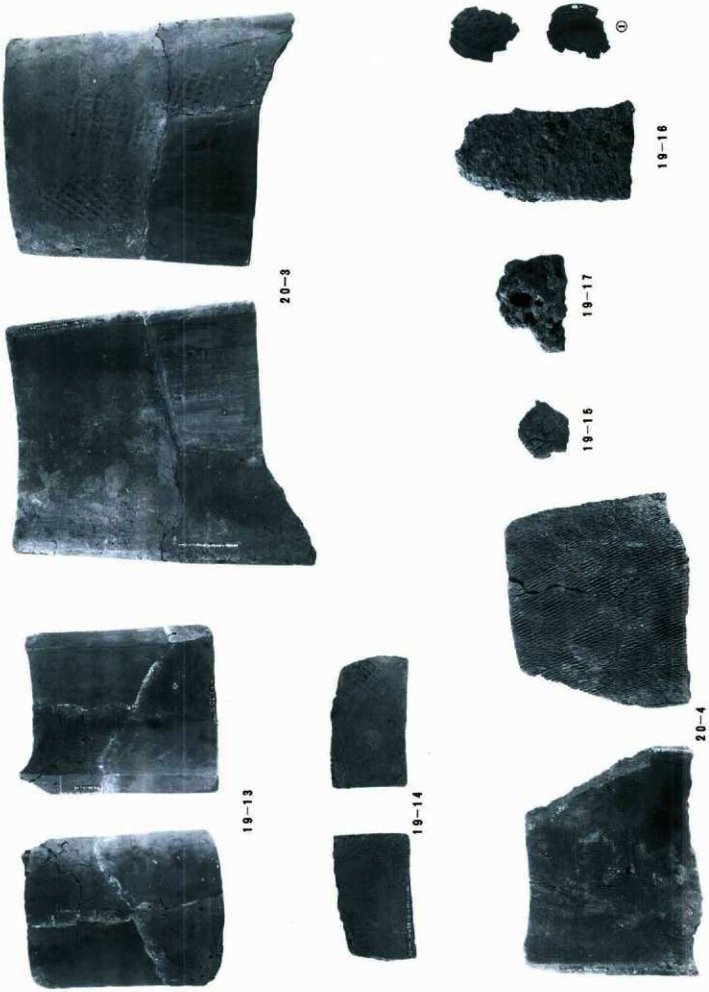
19−11

19−12

20−2

20−1

図版16　SI327住居跡出土遺物



図版17　S I 3 2 8住居跡出土遺物

21−1

21−2

21−3

21−4

21−7

21−5

21−9

21−8

21−10

21−11

21−13

21−14

21−12

図版18　SK825土坑，SX37火葬墓，遺構外出土遺物

22−1

22−6

22−5

①

②

22−7

22−8

22−10

22−9

22−3

22−4

図版19　縄文時代全景，遺物出土状態

1.　調査区東半部全景（北から）

2.　調査区東半部全景（西から）

3.　調査区東半部遺物出土状態（北から）

4.　調査区西半部全景（東から）

5.　調査区西半部全景（北から）

6.　調査区西半部遺物出土状態（東から）

図版20　SK864J・865J・867J土坑

1.　SK864J全景（南から）

2.　SK864J東西土層断面（北から）

3.　SK865J全景（南から）

4.　SK865J東西土層断面（南から）

5.　SK867J全景（東から）

6.　SK867J南北土層断面（東から）

図版21　縄 文 土 器

24−1

24−2−a

24−2−b

24−2−c

24−2−d

24−2−e

24−2−f

24−2−g

24−2−h

24−2−i

24−2−j

24−2−k

24−2−l

24−2−m

24−2−n

24−7

24−8

24−3

24−4

24−5

24−6

24−9

24−10

24−11

24−12

24−13

24−14

24−16−a

24−16−b

24−16−c

図版22　縄文土器・石　器

24−17−a

24−17−b

24−17−c

24−15

24−18

24−19

25−1

25−2

25−5

25−3

25−4

25−6

25−10

25−9

25−8

25−7

25−11

図版23　先土器時代調査区

1. 全　景（南から）

2. 南壁土層断面（北から）

3. 発掘終了状況（西から）
昭和60年5月22日

武蔵国分寺跡発掘調査概報Ⅺ

－北方地区・佐藤国分寺共同
住宅増築工事に伴う調査－
発行日　昭和62年3月31日
編著者　国分寺市遺跡調査団
©（団長　滝口　宏）
発行所　国分寺市遺跡調査会
（国分寺市西元町1－15－15）
印刷所　第一法規出版株式会社

令和4年（2022）8月29日　デジタル版作成
個人情報削除